

群馬県前橋市

石関西築瀬遺跡
西片貝源田島遺跡

1996

石関西築瀬遺跡調査会

群馬県前橋市

石関西築瀬遺跡
西片貝源田島遺跡

1996

石関西築瀬遺跡調査会

序

広大な赤城山麓の扇状地へとつながる前橋市東部は、古くから文化の栄えた地域であり、歴史的風土に富んでいます。最近まで、水田や畑が広がり、県内でも有数の農業中心地の一つでしたが、近年経済活動の活発化とともに工場の進出や住宅の建設などが急速に進んでいます。

一方、その恵まれた自然環境を生かして、新たな文教地区の建設をめざすという構想も立てられています。そうした一環として、高等技術専門校の再編整備を進めている群馬県では、この地に県立前橋産業技術専門校の設置を計画し、産業技術の近代化に対応する技術者の養成に応えようとしています。このため、建築工事に先立ち、埋蔵文化財発掘調査を実施することとなりました。

その結果、古墳時代中期から歴史時代にかけて営まれた集落の一部と思われる竪穴住居や掘立柱建物跡などの遺構や、土師器や須恵器等の遺物が検出されています。ここに、その調査報告書を刊行するはこびとなりましたが、この成果が広く活用され、地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査から整理作業を経て報告書の刊行に至るまで、ご指導、ご協力いただきました群馬県商工労働部、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、山武考古学研究所、そして、発掘・整理の作業にあたられた多くのみなさんに厚くお礼を申しあげ、序といたします。

平成8年3月

石関西築造跡調査会

会長 林 弘二

例　　言

1. 本書は、群馬県前橋市石間町123-1番地他に所在する石間西塗瀬遺跡及び、群馬県前橋市西片貝町417-4番地に所在する西片貝源田島遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県立前橋産業技術専門校建設に伴う事前調査として実施した。
3. 調査は、群馬県教育委員会の依頼を受けて、石間西塗瀬遺跡調査会が山武考古学研究所の協力を得て行った。
4. 遺跡の所在地・面積および、調査面積・調査担当者は、下記の通りである。

遺跡名 石間西塗瀬遺跡
所在地 群馬県前橋市石間町123-1番地他
調査面積 I区 5,200m² II区 144m² III区 196m²
調査期間 平成6年12月8日～平成7年3月2日
遺跡名 西片貝源田島遺跡
所在地 群馬県前橋市西片貝町417-4番地
調査面積 196m²
調査期間 平成7年2月18日～同年2月27日
調査担当者 奥富雅之（山武考古学研究所）

5. 現地での座標・水準点の設置、遺跡の全体測量は開成測量株式会社に、航空写真撮影は青高館に、協力を求めた。
6. 本書の編集および、資料整理は、山武考古学研究所において石田利子、今成勝子、小川悦子、小野沢昌子、奈良雄策、根津珠代、矢島博文の協力を得て奥富が担当し、総括は所長平岡和夫が行った。
7. 本書の執筆は、第1章を齊藤和之、第2～5章を奥富雅之、第4章付節を早田勉（古環境研究所）、第5章付節を宮崎重雄（大間々高校教諭）・飯島義雄が分担した。
8. 発掘調査期間において、下記の諸氏・諸機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表すものである。

神谷桂明　坂口一　桜岡正信
早田勉　三浦京子　宮崎重雄
群馬県商工労働部職業能力開発課　木島学園医療福祉専門学校
東日本重機　富沢建材　たつみ写真スタジオ
開成測量　青高館　新成田総合社

9. 発掘調査参加者は下記の通りである。

岡田うめ	大河原初枝	黒沢とき	齊藤吉江	桜井れい
神宮政江	須藤八江子	高橋トク子	田中米一	田村きみ
田村さよ子	田村よし	土屋ケサミ	勅使河原西造	長岡裕治
中野つる	中野利一	矢島博文	山崎悟	山田隆
吉田新一郎	吉田とみ子	吉田芳江	渡辺武江	

凡　例

1. 第1図 遺跡の位置と広瀬川低地帯には、国土地理院発行の5分万分の1地形図「前橋」を、第2図周辺の遺跡には国土地理院発行の2万5千分の1地形図「前橋」「大胡」を、第3図 明治時代の地形には、明治21年陸地測量部出版の2万分の1地方迅速測図「前橋」を80%縮小して、第4図 各遺跡の調査区設定図には、前橋市発行の2千5百分の1都市計画図No.45・46をそれぞれ使用した。
2. 遺跡の位置図および、遺構実測図中の方位は全て座標北を示す。
3. 本書の挿図の縮尺は、遺跡全体測量図1/500・1/100、遺構実測図1/80を基本とし、住居カマド・火葬跡を1/40、2・3・4・5号溝平面図を1/100とした。また、遺物実測図は、1/4とし、遺物・写真も原則的には実測図と同じ縮尺としたが、例外として石関西塗瀬遺跡2号住居跡出土の暗文・墨書き土器片は1/2、西片貝源田島遺跡1号集石出土の石臼は1/6の縮尺で掲載した。
4. 本報告書内の遺物番号は、挿図・表・写真共に一致している。
5. 住居跡の規模は、原則的に中軸線を計測し、壁高は床面から確認面までの垂直方向の高さとした。
6. 遺構の主軸は、住居跡はカマド煙道の伸びる中心線、掘立柱建物跡は桁行方向、火葬跡は張り出し部分の伸びる中心線とした。
7. 住居跡実測図中の縁線は、掘り方を示している。また、ピット図版の数値は深さを示し単位はcmである。
8. 遺物観察表中の法量の欄中、「胴部」の表示は胴部最大径を示す。また、数値の中で（）内に表示されているものは復元値である。
9. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1990年9月発行を使用し、原則として土器外面の焼成の良い箇所によって記載した。
10. 出上遺物の注記については、以下の略号を用いた。遺構番号は略号の前に、遺物番号は略号の後にそれぞれ算用数字で付した。なお表探遺物については、遺跡番号の後にグリッド番号で示し、遺跡一括遺物は遺跡番号のみを記した。

石関西塗瀬遺跡……6D-10

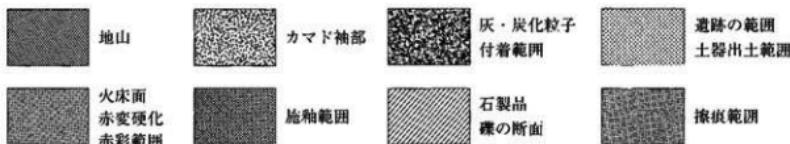
西片貝源田島遺跡……6D-11

住居跡……………H 土坑……………D 湾……………M 堪穴状遺構……………T
火葬跡……………K カマド……………カ 掘り方……………ホ 石……………S

例) 石関西塗瀬遺跡 8号住居跡カマド出土遺物調査番号 1 6D-10-8Hカ-1

西片貝源田島遺跡 1号火葬跡出土石調査番号 2 6D-11-1K-S2

11. 遺物注記番号と、本報告書に掲載される遺物番号は、基本的に一致しない。
12. 西片貝源田島遺跡1号火葬跡出土の焼入骨は、注記せず個々の遺物収納袋に取りあげた順番に通し番号を付した。これは、本報告書に掲載される番号と一致している。
13. 挿図中に使用したスクリーントーンは、以下の内容を示す。



目 次

本 文 目 次

序

例 言

凡 例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
第3章 調査の方法と経過	
調査の方法	5
調査の経過	5
第4章 石関西塗掘遺跡	
遺跡の概要	7
基本堆積土層	7
検出された遺構と遺物・I区	9
1. 古墳時代前期	
住居跡	9
土坑	18
2. 古墳時代後期	
住居跡	19
3. 歴史時代	
住居跡	25
4. その他の時代および、時期不明の遺構	
住居跡	38
掘立柱建物跡	39
土坑	40
ピット群	41
溝	42
検出された遺構と遺物・II、III区	44
まとめ	57
付節 自然科学分析	59
第5章 西片貝源田島遺跡	
遺跡の概要	69
基本堆積土層	69
検出された遺構と遺物	70
まとめ	72
付節 西片貝源田島遺跡火葬跡出土の焼人骨	73

挿図目次

第1図 遺跡の位置と広瀬川低地帯	27
第2図 周辺の遺跡	28
第3図 明治時代の地形図	28
第4図 各遺跡の調査区段図	29
石関西築瀬遺跡	
第5図 基本堆積土層	7
第6図 I区分全体測量図	8
第7図 1号住居跡	9
第8図 1号住居跡出土遺物	10
第9図 5号住居跡	11
第10図 5号住居跡出土遺物	11
第11図 5号住居跡出土遺物	12
第12図 6号住居跡	13
第13図 6号住居跡出土遺物	13
第14図 6号住居跡出土遺物	14
第15図 7号住居跡	15
第16図 7号住居跡出土遺物	15
第17図 11号住居跡	16
第18図 11号住居跡出土遺物	16
第19図 19号住居跡	17
第20図 19号住居跡出土遺物	17
第21図 19号住居跡出土遺物	18
第22図 4号十坑	18
第23図 4号土坑出土遺物・遺構外出土遺物	19
第24図 13号住居跡カマド掘り方	19
第25図 13号住居跡	20
第26図 13号住居跡山上出土遺物	20
第27図 13号住居跡山上出土遺物	21
第28図 14号住居跡山上出土遺物	21
第29図 14号住居跡	22
第30図 15号住居跡カマド	22
第31図 15号住居跡	23
第32図 15号住居跡出土遺物	23
第33図 15号住居跡出土遺物	24
第34図 2号住居跡	25
第35図 2号住居跡出土遺物	26
第36図 3号住居跡	26
第37図 3号住居跡出土遺物	27
第38図 4号住居跡	27
第39図 4号住居跡出土遺物	27
第40図 4号住居跡カマド	28
第41図 8号住居跡カマド	28
第42図 8号住居跡	29
第43図 8号住居跡出土遺物	29
第44図 9号住居跡	30
第45図 9号住居跡出土遺物	30
第46図 10号住居跡	31
第47図 10号住居跡カマド	32
第48図 10号住居跡出土遺物	32
第49図 16号住居跡	33
第50図 16号住居跡出土遺物	34
第51図 17号住居跡	35
第52図 17号住居跡出土遺物	35
第53図 18号住居跡	36
第54図 18号住居跡出土遺物	37
第55図 12号住居跡	38
第56図 1号掘立柱建物跡	39
第57図 2号掘立柱建物跡	39
第58図 3号掘立柱建物跡	40
第59図 1-3・5-12号十坑	41
第60図 1号ピット群	41
第61図 2号ピット群	41
第62図 1号溝	42
第63図 2・3・4・5号溝	42
第64図 2号溝出土遺物	43
第65図 II区分体測量図	44
第66図 III区分全体測量図	45
第67図 石関西築瀬遺跡I区分の集落変遷図	57
第68図 テララ分析土層柱状図と試掘トレンチ設定図	58
第69図 試掘第2トレンチの植物珪酸体分析結果	67
第70図 試掘第7トレンチの植物珪酸体分析結果	67
西片貝源田島遺跡	
第71図 全体測量図	68
第72図 基本堆積土層	69
第73図 1号火葬跡	70
第74図 1号集石	71
第75図 1号集石出土遺物	71
第76図 遺構外出土遺物	72

図版

石関西築瀬遺跡	
1. 石関西築瀬遺跡全景(空撮)	6
2. 4号十坑遺物出土状況	18
3. 5号土坑全景	40
4. 10号土坑全景	40
5. II区分景	44
6. 13号土坑全景	44
7. 14号土坑全景	44
8. III区分全景	45
9. 喷砂板山状況	57
10. 植物珪酸体	65
11. 植物珪酸体	65
12. 植物珪酸体	65
13. 植物珪酸体	65
14. 植物珪酸体	65
15. 植物珪酸体	65
16. 植物珪酸体	66
17. 植物珪酸体	66
18. 植物珪酸体	66
19. 植物珪酸体	66
20. 植物珪酸体	66
21. 植物珪酸体	66

西片貝源田島遺跡

22. 1号火葬跡の焼人骨	74
---------------	----

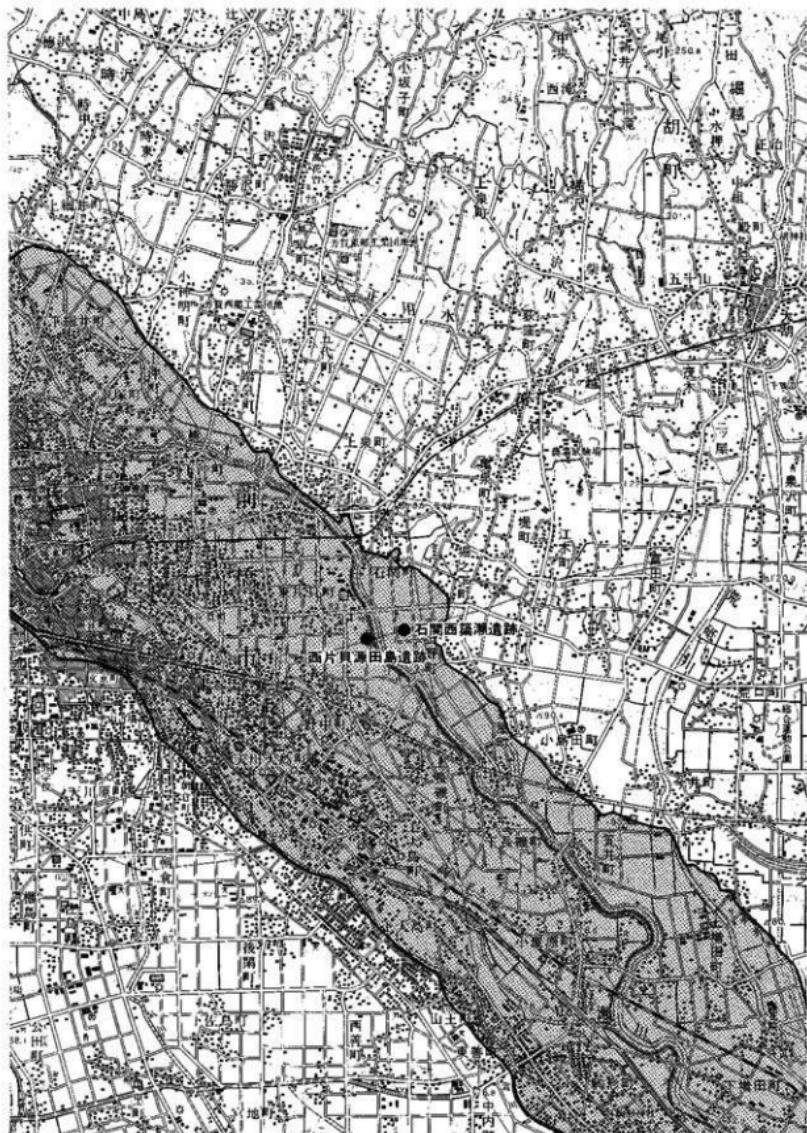
石関西築瀬遺跡

23. I区分全景	図版1
24. 1号住居跡遺物出土状況	図版1
25. 1号住居跡遺物出土近景	図版1
26. 1号住居跡完掘全景	図版1
27. 1号住居跡遺物出土近景	図版1
28. 5号住居跡炭化材出土状況	図版2
29. 5号住居跡遺物出土近景	図版2
30. 5号住居跡遺物出土近景	図版2
31. 5号住居跡遺物出土近景	図版2
32. 6号住居跡遺物出土近景	図版3

33. 6号住居跡遺物出土状況	図版 3
34. 6号住居跡遺物出土近景	図版 3
35. 6号住居跡遺物出土近景	図版 3
36. 7号住居跡遺物出土状況	図版 3
37. 7号住居跡遺物出土近景	図版 3
38. 7号住居跡遺物出土近景	図版 3
39. 11号住居跡炭化材出土状況	図版 4
40. 11号住居跡全景	図版 4
41. 19号住居跡遺物出土状況	図版 4
42. 19号住居跡遺物出土近景	図版 4
43. 13号住居跡遺物出土状況	図版 4
44. 13号住居跡全景	図版 4
45. 13号住居跡遺物出土近景	図版 4
46. 13号住居跡遺物出土近景	図版 4
47. 14号住居跡遺物出土状況	図版 5
48. 14号住居跡遺物出土近景	図版 5
49. 14号住居跡遺物出土近景	図版 5
50. 15号住居跡遺物出土状況	図版 5
51. 2号住居跡遺物出土状況	図版 6
52. 2号住居跡カマド近景	図版 6
53. 2号住居跡遺物出土近景	図版 6
54. 2号住居跡遺物出土近景	図版 6
55. 3号住居跡遺物出土近景	図版 6
56. 3号住居跡カマド近景	図版 6
57. 3号住居跡全景	図版 6
58. 4号住居跡全景	図版 6
59. 4号住居跡カマドA上層断面	図版 6
60. 4号住居跡カマドB下層断面	図版 6
61. 8号住居跡遺物出土状況	図版 7
62. 8号住居跡カマド近景	図版 7
63. 8号住居跡遺物出土近景	図版 7
64. 8号住居跡遺物出土近景	図版 7
65. 9号住居跡全景	図版 7
66. 9号住居跡遺物出土近景	図版 7
67. 12号住居跡全景	図版 7
68. 12号住居跡カマド近景	図版 7
69. 10号住居跡全景	図版 8
70. 10号住居跡カマド近景	図版 8
71. 10号住居跡遺物出土近景	図版 8
72. 10号住居跡遺物出土近景	図版 8
73. 10号住居跡遺物出土近景	図版 8
74. 16号住居跡全景	図版 8
75. 16号住居跡カマド近景	図版 8
76. 16号住居跡遺物出土近景	図版 8
77. 16号住居跡土層断面噴砂近景	図版 8
78. 17号住居跡全景	図版 9
79. 17号住居跡カマド近景	図版 9
80. 17号住居跡遺物出土近景	図版 9
81. 18号住居跡全景	図版 9
82. 18号住居跡カマド近景	図版 9
83. 18号住居跡遺物出土近景	図版 9
84. 1号掘立柱建物跡	図版 9
85. 2号掘立柱建物跡	図版 9
86. 3号掘立柱建物跡	図版 9
87. 7号住居跡出土遺物	図版 10
88. 5号住居跡出土遺物	図版 11
89. 6号住居跡出土遺物	図版 12
90. 6号住居跡出土上漿物	図版 13
91. 7号住居跡出土遺物	図版 13
92. 11号住居跡出土遺物	図版 13
93. 19号住居跡出土遺物	図版 14
94. 9号土坑出土遺物	図版 15
95. 遺構外出土遺物	図版 15
96. 13号住居跡出土遺物	図版 15
97. 14号住居跡出土上漿物	図版 15
98. 15号住居跡出土遺物	図版 16
99. 15号住居跡出土上漿物	図版 17
100. 2号住居跡出土遺物	図版 17
101. 3号住居跡出土遺物	図版 17
102. 4号住居跡出土遺物	図版 17
103. 8号住居跡出土遺物	図版 18
104. 9号住居跡出土遺物	図版 18
105. 10号住居跡出土遺物	図版 18
106. 16号住居跡出土遺物	図版 18
107. 17号住居跡出土上漿物	図版 18
108. 16・17号住居跡出土遺物	図版 19
109. 18号住居跡出土遺物	図版 19
110. 2号溝出土遺物	図版 19

表 目 次

第1表 平成6年度石門西葉瀬遺跡調査会組織表	1
第2表 平成7年度石門西葉瀬遺跡調査会組織表	1
第3表 周辺の追跡一覧表	3
石門西葉瀬遺跡	
第4表 土坑表	40
第5表 1号住居跡遺物観察表	46
第6表 5号住居跡遺物観察表	47
第7表 6号住居跡遺物観察表	48
第8表 7号住居跡遺物観察表	49
第9表 11号住居跡遺物観察表	50
第10表 19号住居跡遺物観察表	50
第11表 4号上坑遺物観察表	51
第12表 進構外出土遺物観察表	51
第13表 13号住居跡遺物観察表	51
第14表 14号住居跡遺物観察表	52
第15表 15号住居跡遺物観察表	52
第16表 2号住居跡遺物観察表	53
第17表 2号住居跡暗文、墨書き上器観察表	53
第18表 3号住居跡遺物観察表	53
第19表 4号住居跡遺物観察表	54
第20表 8号住居跡遺物観察表	54
第21表 9号住居跡遺物観察表	54
第22表 10号住居跡遺物観察表	55
第23表 16号住居跡遺物観察表	55
第24表 17号住居跡遺物観察表	55
第25表 18号住居跡遺物観察表	56
第26表 2号溝出土遺物観察表	56
第27表 石門西葉瀬遺跡のテフラ検出分析結果	61
第28表 石門西葉瀬遺跡の植物珪酸体分析結果	67
西片貝源田鳥遺跡	
第29表 1号集石出土遺物観察表	72
第30表 遺構外出土遺物観察表	72
第31表 墓人骨記録表	73



第1図 遺跡の位置と広瀬川低地帯（5万分の1）

第1章 調査に至る経緯

群馬県教育委員会文化財保護課では、群馬県関係機関が実施する開発事業について、平素より各課・各機関へ、文書・パンフレットを送付したり定期的な打ち合わせを行い、また土地利用調整などの合議を通じてその把握に努め、必要な対応をとろうとしている。

平成5年9月3日に開かれた県の土地利用調整会議において、商工労働部より、(仮称)県立中毛高等技術専門校建設の計画が付議され、県教育委員会文化財保護課ではこれに対し、該当地区には周知の遺跡がないものの、周辺の遺跡の分布状況や地形等を勘案し、事前に遺跡の有無を確認する試掘調査の必要があるものと判断し、その旨県商工労働部に回答するとともに、具体的な内容等につき商工労働部と協議を進めるところとなった。

こうして、平成6年3月14日から19日の6日間にわたり、県教育委員会文化財保護課によって該当地区的試掘調査が実施された結果、古墳時代の堅穴住居跡2軒を含む遺構や遺物が確認され、遺跡が存在することが明らかとなり、「石関西築造遺跡」と命名された。

その後、商工労働部と県教育委員会及び前橋市教育委員会との間で遺跡の保存と校舎の建設について調整がなされ、技術専門校設置の必要性及び立地条件等から、現在位置での建設は不可避であるものの、設計変更等により可能な限り遺跡保存に努めるとともに、やむを得ず建設工事により現状保存が不可能な部分については本調査を実施して記録保存の措置を取ることになった。また本調査については群馬県教育委員会に事務局を置く調査会を組織し、実施することとした。

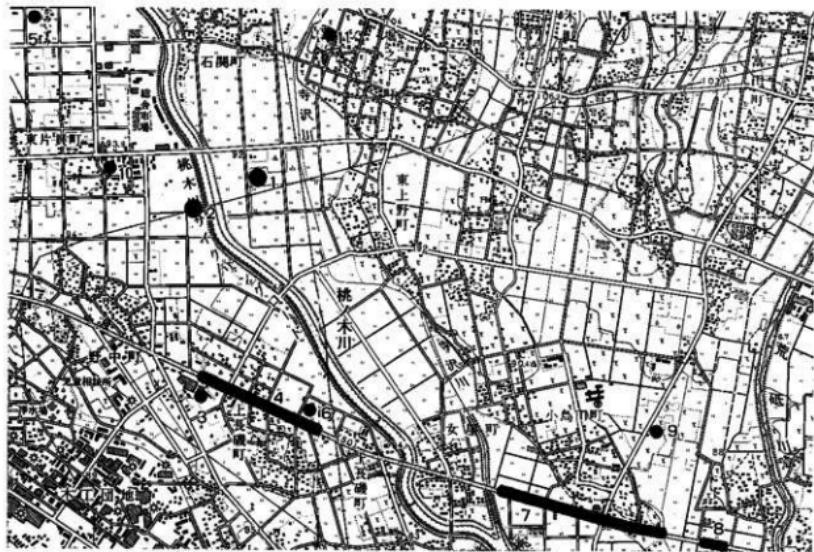
なお、出土資料及び関連記録については、前橋市教育委員会で保管・活用する予定である。

第1表・平成6年度石関西築造遺跡調査会組織表

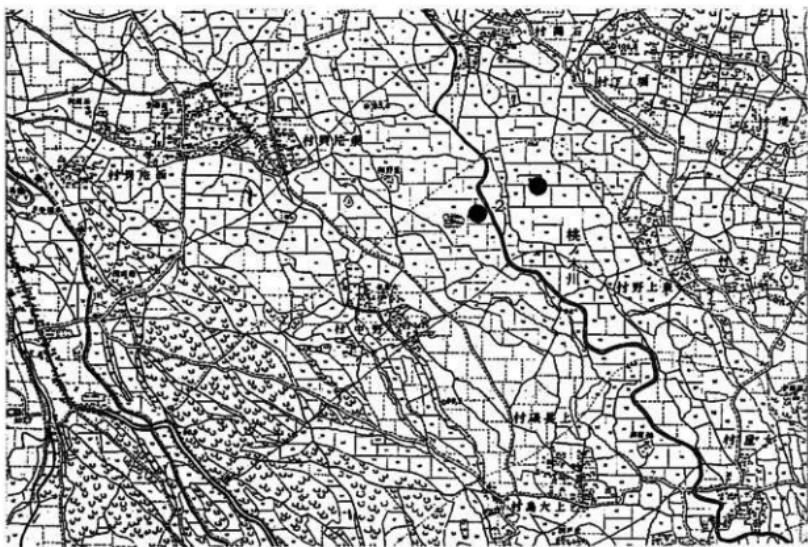
区分	職名	氏名
会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	林 弘二
副会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課長	荒塚 大治
理事	群馬県 商工労働部 就業能力開発課長 群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 鳥居課長補佐 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課長	大竹 正信 田口 紀雄 本山 卓
監事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 主幹兼守門員 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課 堤義文化財係長	佐藤 明人 鈴倉 秀一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	赤山 容造
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 土幹兼門員 同上	飯島 義雄 武井 俊彦

第2表・平成7年度石関西築造遺跡調査会組織表

区分	職名	氏名
会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	林 弘二
副会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課長	荒塚 大治
理事	群馬県 商工労働部 就業能力開発課長 群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 次長 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課長	大竹 正信 森 公之 本山 卓
監事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 専門員 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課 堤義文化財係長	井川 達雄 鈴倉 秀一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	巾 隆之
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 土幹兼門員 同上	齊藤 和之 高井 俊弘



第2図 周辺の遺跡（2万5千分の1）



第3図 明治時代の地形図（2万分の1を80%縮小）

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

石関西築瀬遺跡¹、西片貝源田島遺跡²の両遺跡の立地する前橋市は、背後に赤城山、榛名山がそびえ、前方に関東平野が広がり、ちょうど山間部と平野部の境目に位置している。市域内を地形的に区分すると、北東部の赤城山麓扇状地の斜面部と南西部の前橋台地の平坦面に分けられる。この前橋台地上には、利根川が南流し氾濫源を形成しているが、かつては今の位置よりも赤城山寄りを流れている。旧流路は狭義の前橋台地面より数メートル低く広瀬川低地帯と呼ばれ、現在広瀬川、桃ノ木川およびそのほかの小河川が、合流または分流し網の目状に流れている。そして、今なお少しづつ流れを変えていくことが第2図と第3図中の桃の木川の形を見比べるとよく分かる。かつての利根川もまた、自然堤防や中洲を兼ねながら複雑に流れ、わずかな高低差を生み出し、こうした低地帯の様相を造り出した。

今回発掘調査が行われたのは、前橋市市街地の東方、上毛電鉄線赤坂駅から約1km南下した広瀬川低地帯の微高地に位置し、すぐそばを桃の木川が南流する。周辺には水田が広がり近年徐々に開発が進み、それに伴い埋蔵文化財の発掘調査が進められている。こうして、かつての湿地もその微高地には集落の展開することが明らかとなってきた。

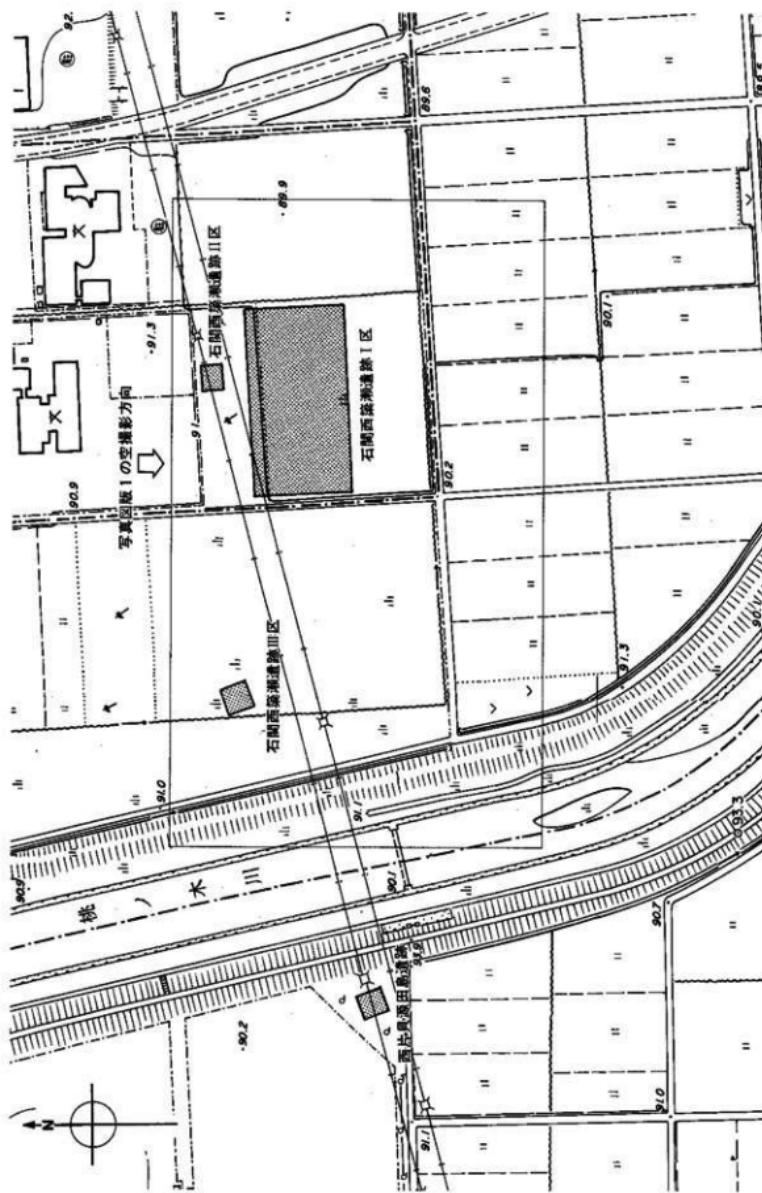
周辺の集落遺跡を見てみると、この付近の広瀬川低地帯にある古墳時代の住居跡は、棗遺跡³で、歴史時代の住居跡は、中野天神遺跡⁴・茶木田遺跡⁵・伊勢遺跡⁶で調査されている。これらの遺跡から南東へ転じると赤城山麓扇状地の先端から広瀬川低地帯との境目の地域となり、箕井八日市場遺跡⁷で古墳時代、今井白山遺跡⁸では縄文時代および、古墳時代から歴史時代、宮田遺跡⁹でも古墳時代から歴史時代の住居跡が検出されている。

今回、発掘調査が実施された石関西築瀬遺跡・西片貝源田島遺跡もこうした広瀬川低地帯の古代の様相を明らかにする一端となろう。

第3表・周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	概要
1	石関西築瀬遺跡	本報告
2	西片貝源田島遺跡	本報告
3	棗遺跡	古墳時代後期の住居跡
4	中野天神遺跡	古墳時代の土坑群・礎郭墓状遺構、歴史時代(9~10世紀)の住居跡、水田畠跡、中世の屋敷跡他
5	茶木田遺跡	歴史時代(8~11世紀)の住居跡他
6	伊勢遺跡	歴史時代(8~10世紀)の住居跡他
7	箕井八日市場遺跡	古墳時代中期の住居跡・古墳・方形区画遺構、平安時代の水田・地震跡他
8	今井白山遺跡	縄文時代後期の敷石住居跡、弥生時代の土坑、古墳前期・歴史時代の住居跡、地震跡他
9	宮田遺跡	古墳時代後期・歴史時代(9~10世紀)の住居跡他
10	桂賀大塚古墳	古墳
11	正円寺古墳	古墳

第4図 各測跡の調査区段定図 (2千5百分の1)



第3章 調査の方法と経過

調査の方法

本遺跡の調査は、試掘調査によって得られた成果に基づき、建築設計により掘削を受ける部分及び、学校建設に伴い移築される、送電線鉄塔の移築先を調査対象区とした。そして、桃の木川東岸側が石関西築造跡、西岸側が西片貝源田島遺跡となる。

本調査は、まず重機を用いて調査区の表土を剥ぎ、遺構確認を行った。その後、グリッド法を用い、国家座標第IV系に従い $10 \times 10\text{m}$ 方眼を設定し、グリッド杭及び水準点を設置し、遺構調査を開始した。個々のグリッド方眼は、遺跡ごとに南北方向に算用数字を、東西方向にアルファベットを付して区別した。

各遺構の調査について住居跡は、中軸線を基準に土層観察用のベルトを十字に残して掘り下げ、遺物はできるかぎり個別に取り上げるよう努めた。カマドも煙道の伸びる方向を主軸として、住居跡と同様に四分割法を用いて土層を記録観察しながら慎重に掘り下げ、遺存の良い灰層についてはサンプルの採取を行った。掘立柱建物跡は、柱痕を確認し、柱間を通すかたちで柱痕を半截し土層を観察したが、今回は、明瞭に検出されなかった。火葬跡は、焼人骨を部位同定することを念頭において、できるかぎり出土位置を記録しながら個別に取り上げ、掘り下げた。その他の遺構についても必要に応じてベルトを残すか、半截して土層観察を行った。

実測図は、全体測量図を石関西築造跡I区では1/200で、II・III区および、西片貝源田島遺跡では1/50で作図し各遺構は1/20を基本とし、カマド・炉址・火葬跡については1/10とした。写真撮影は、隨時白黒35mm・カラースライド35mm・白黒120mm 6×7判の3台で各調査段階を記録した。そして、石関西築造跡については、調査の最終段階でパルーンによる遺跡全体の空中撮影を実施した。

調査の経過（調査日誌抄）

平成6年

12月期

8日 石関西築造跡の調査開始。調査区の確認。

9日 重機による表土除去作業を、I区東側より開始する。白色の軽石を含む暗褐色土層上面を確認面とする。なお、この段階での表土排土の対象は石関西築造跡のI・II区となる。

14日 遺構が検出されないため確認面を下げたところ、褐鉄鉱を含む層の直下より土坑を検出する。

21日 調査区西側では、褐鉄鉱層中で遺構が検出されはじめめる。特に、1・2号掘立柱建物跡はより上面で確認される。

24日 石関西築造跡I・II区の表土排土作業を終了する。

平成7年

1月期

6日 作業員開始。石関西築造跡III区より調査を開始する。調査区内に浸水があるため遺構確認は困難を極め、これと並行して水抜き溝を掘り進める。

7日 10m 方眼グリッド及び、BMの設置を完了する。

10日 比較的浸水の少ないI区西側の住居跡の調査を開始する。6・7号住居跡は、表土除去の段階で遺

物が出土していながらプランは不明瞭なため、遺物を残しながら慎重に掘り下げる。

18日 I 区東半分の遺構確認を開始する。

20日 I・II区の遺構確認を終了し、遺構分布図を作成する。この段階で、I区は住居跡18軒・掘立柱建物跡3棟・土坑10基・溝3条、II区は土坑2基を確認する。

2月期

6日 I区南端で水抜き溝を掘り下げ中に遺物が出土したため、一部調査区を拡張し確認面を下げる。この結果、新たに19号住居跡を検出し、調査を開始する。

9日 石関西築瀬遺跡調査会の会合が開催され、同調査会のメンバーが発掘現場を視察する。18号住居跡、1・2号掘立柱建物跡及び、II区の調査を開始する。

17日 石関西築瀬遺跡III区の表土除去作業を実施する。As-Bと思われる褐色の鉱石層の下から、明瞭ではないが斂状の遺構を3条検出する。

18日 西片貝源田島遺跡の表土除去作業を実施する。火葬跡1基、堅穴状遺構1基を検出する。

21日 石関西築瀬遺跡の空中撮影のための清掃を実施する。

22日 石関西築瀬遺跡の全体測量図を作成する。

23日 空中撮影を実施する。III区の調査を開始する。実際に鉱石を抜いても斂状の高まりははっきとせず、高いところから望むとうっすら3条の陰りが見える。

24日 西片貝源田島遺跡の調査を開始する。1号堅穴状遺構から整然と並べられた円窓が検出され、1号集石と遺構名を改める。

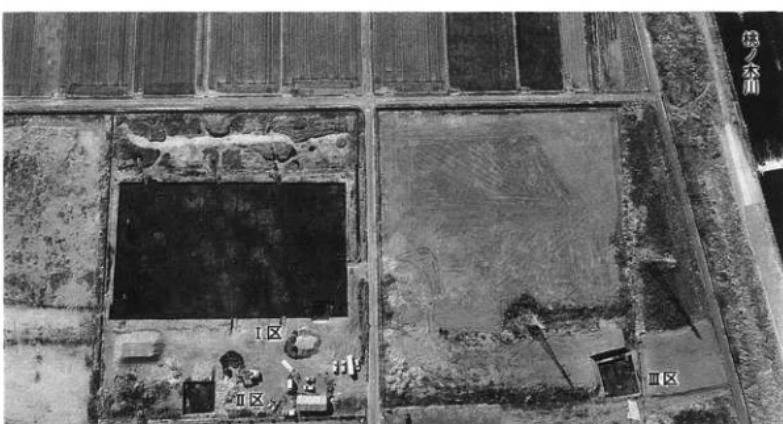
25日 現地説明会準備。

26日 一般を対象に現地説明会を実施する。

27日 近隣の学校及び、施設を対象に現地説明会を実施する。西片貝源田島遺跡の全体測量図を作成。

3月期

1・2日 残務整理、器材の撤収を実施し、石関西築瀬・西片貝源田島遺跡の現場での調査を終了する。



1. 石関西築瀬遺跡全景（空撮）

第4章 石関西築瀬遺跡

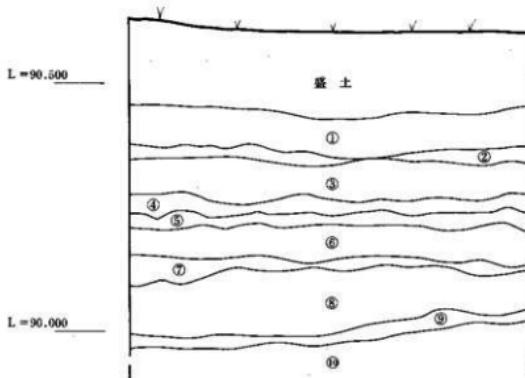
遺跡の概要

本遺跡は、校舎建設部分のI区と、送電線鉄塔建設用地のII・III区からなる。遺構確認面は、第5図中の基本堆積土層⑥層上面とした。I区からは、住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、溝5条、土坑12基を検出した。また、その他に調査区の隨所に噴砂跡が見られ、第6図中の等高線とは別に短く途切れる線がこれにあたる。II区からは、土坑2基を検出している。III区からは、As-Bを多量に含む層の下から鉢状のわずかな高まり3条を検出している。さらに、I・II区同様の遺構確認面まで「Eの字」状にトレンチを掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

基本堆積土層

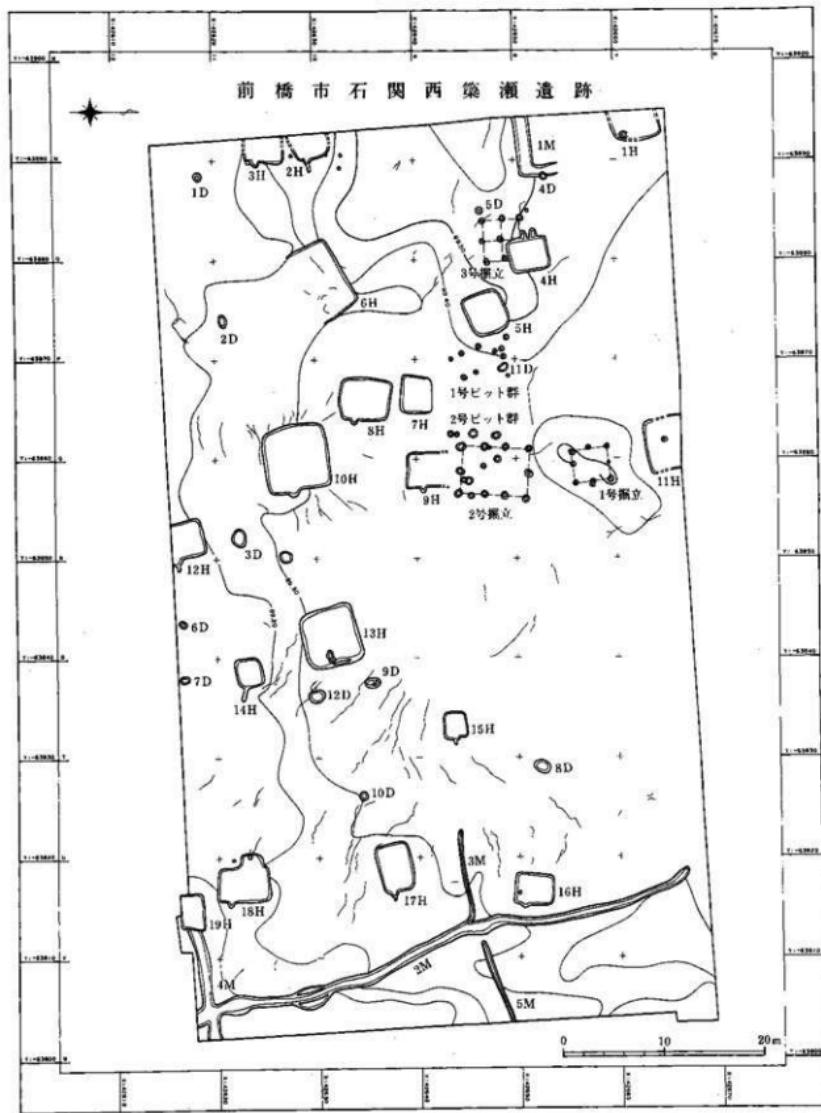
旧河床上に立地する本遺跡では、遺構調査面のいたるところで疊が検出され、深掘りを実施したところで疊層を確認している。この疊層の上に暗褐色～黄褐色また、灰褐色のシルト層が乗っている。I区の随所に見られる噴砂は、このシルト層が上の層を突き破って噴出したものである。また、I区で検出されている住居跡は、概このシルト層まで掘り込まれ床面とし、中には疊層の直上まで掘り込むものもあった。遺構は、シルト層のさらに上の暗褐色土層で確認される。この層の前後で、草などの植物に根に水酸化鉄が沈積して形成された褐鉄鉱、一名「高師小僧」が30～40cm厚さで広がり確認面検出の目安となった。

下記の第5図は、II区の調査区東壁の一部を実測したものである。後出の「自然科学分析」での「地質層序」とは観察地点が異なるため層序は一致していない。



第5図 石関西築瀬遺跡基本堆積土層

第①層	暗褐色土	(やや淡黄色がかる) 白色輕石粒子微量、白色輕石粒子少量、褐色輕石粒子微量、炭化粒子極微量含む
第②層	順滑褐色土	(やや淡黄色がかる) 白色輕石粒子少量、褐色輕石粒子微量含む
第③層	硫褐色土	白色輕石粒子微量、褐色輕石粒子多量含む
第④層	褐色輕石	褐色輕石粒子多量に含む、A面 - B面純層か?
第⑤層	褐色輕石土	(やや灰色がかる) 白色輕石粒子微量、白色輕石粒子多量含む
第⑥層	褐色輕石土	(やや灰色がかる) 白色輕石粒子微量、白色輕石粒子多量含む
第⑦層	褐色輕石土	(やや灰色がかる) 白色輕石粒子多量、褐色輕石粒子多量含む、第⑧層より輕石の量が多い
第⑧層	褐色輕石土	褐色輕石、白色輕石少量、褐色輕石粒子多量含む
第⑨層	褐色輕石土	褐色輕石、白色輕石少量、褐色輕石粒子多量含む
第⑩層	褐色輕石シルト	褐色輕石シルト
第⑪層	褐色輕石シルト	褐色輕石シルト
第⑫層	上半面を遺構調査面とした。	
第⑬層	下半から	第⑮層上半にかけて褐鉄鉱が形成されている。
第⑭層	上半面を遺構調査面とした。	



第6図 石関西築造跡 I区全体測量図



検出された遺構と遺物・I 区

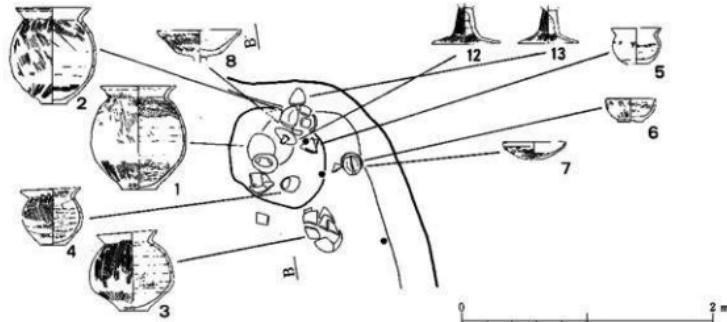
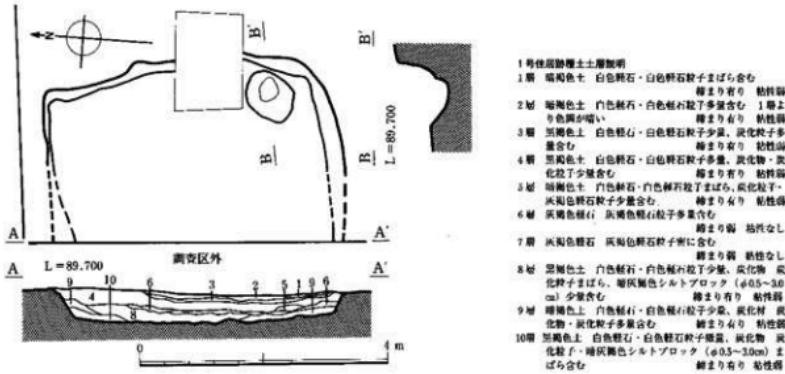
1. 古墳時代中期

住居跡

1号住居跡（挿図 第7・8図、写真図版 24~27・87、遺物観察表 第5表）

位 置/M-6 グリッド。平面形／方形と推測される。規 模／東西に3.04+ a m、南北に4.70m。壁／60~70°の角度で立ち上がり、35~50cm遺存する。床／明灰色シルト層を床面とし、平坦で硬化面は検出されなかった。貯藏穴／南東コーナーに、長径90cm、短径70cm、深さ30cmの規模で掘り込まれ、内側および、周辺には土器が集中している。

本住居跡は、焼失住居である。覆土はほぼレンズ状に堆積し、中位よりやや下に2~10cmの厚さでFPと思われる軽石が密に入り込む層が確認されている。この軽石層のすぐ下からは多量の炭化物・炭化材が検出され、平面的には放射状に散乱している。遺物の量は多く、炭化材層の下から出土し、特に貯藏穴周辺に集中している。また、No.9・10はいずれも高壙の壊部で、2点が重なり正位床着の状態で出土し、破損した高壙の再利用を想定させる。



第7図 1号住居跡

検出された遺構と遺物・I 区

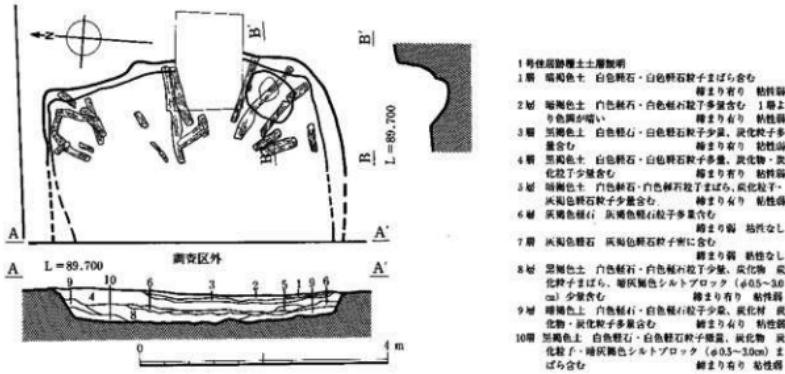
1. 古墳時代中期

住居跡

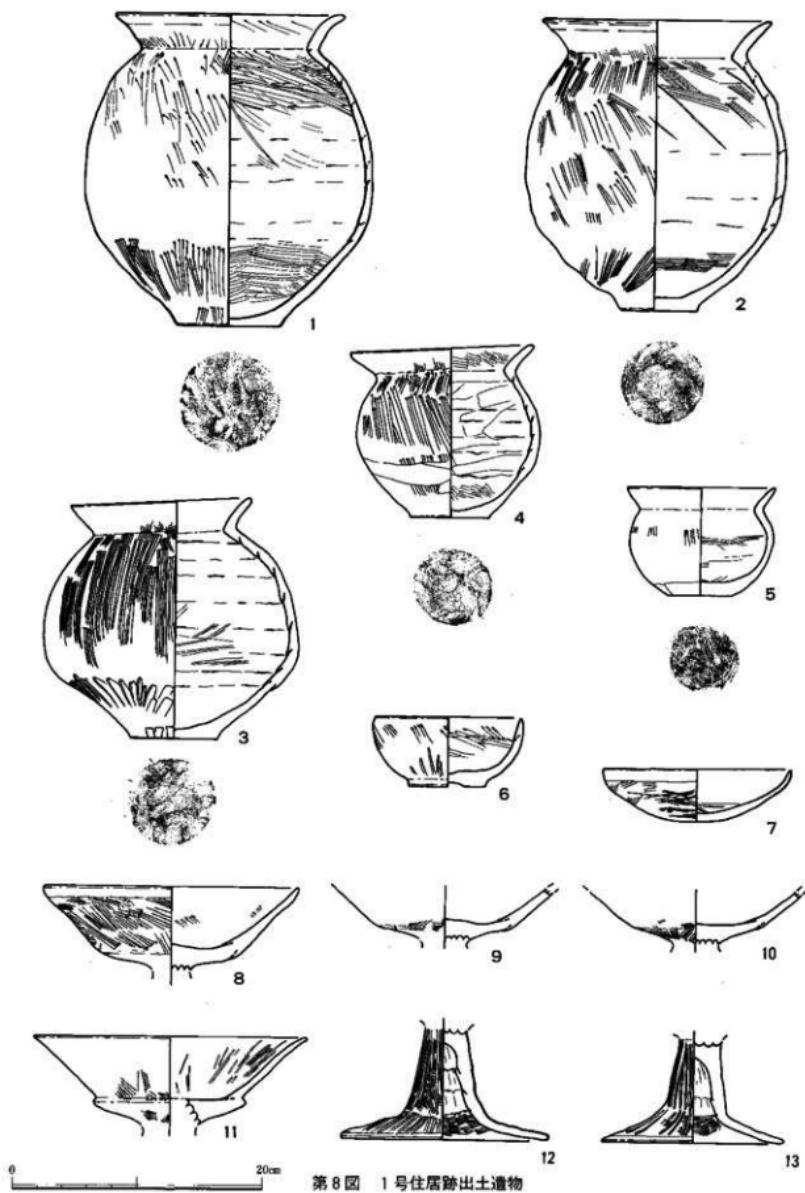
1号住居跡（挿図 第7・8図、写真図版 24~27・87、遺物観察表 第5表）

位 置/M-6 グリッド。平面形／方形と推測される。規 模／東西に3.04+ a m、南北に4.70m。壁／60~70°の角度で立ち上がり、35~50cm遺存する。床／明灰色シルト層を床面とし、平坦で硬化面は検出されなかった。貯藏穴／南東コーナーに、長径90cm、短径70cm、深さ30cmの規模で掘り込まれ、内側および、周辺には土器が集中している。

本住居跡は、焼失住居である。覆土はほぼレンズ状に堆積し、中位よりやや下に2~10cmの厚さでFPと思われる軽石が密に入り込む層が確認されている。この軽石層のすぐ下からは多量の炭化物・炭化材が検出され、平面的には放射状に散乱している。遺物の量は多く、炭化材層の下から出土し、特に貯藏穴周辺に集中している。また、No.9・10はいずれも高壙の壊部で、2点が重なり正位床着の状態で出土し、破損した高壙の再利用を想定させる。



第7図 1号住居跡



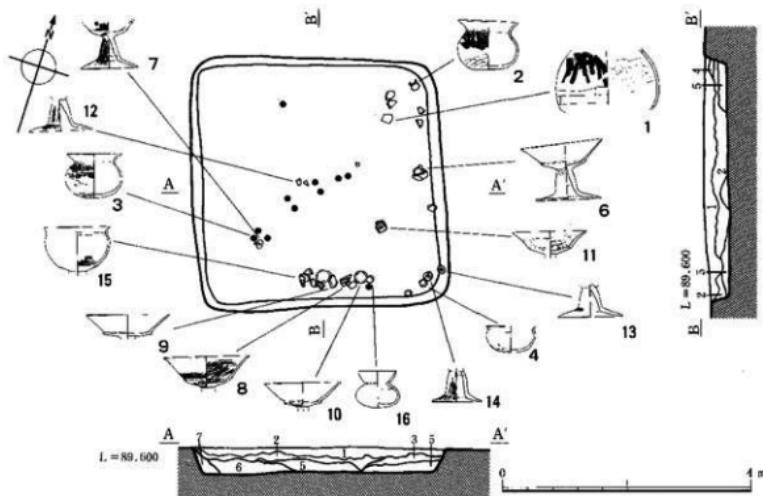
第8図 1号住跡出土遺物

四
十
五
年
老
店

5号住居跡（挿図 第9～11図、写真図版 28～31・88、遺物観察表 第6表）

位 置/O-8グリッド、平面形／南北にわずかに長いが、ほぼ正方形を呈する。規 模／東西に3.78m 南北に3.92m。壁／60～75°の角度で立ち上がり、35～40cm造存する。床／暗褐色から褐色シルト層を床面にし、平坦で硬化面は検出されなかった。また、床面のすぐ下は礫層となる。 炉／中央部西壁寄りの床面に、わずかに焼土含む暗褐色土の堆積を確認したが、火床面は捉えられず、炉であることは確認できなかった。

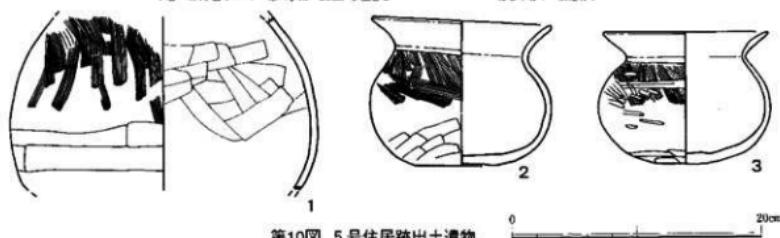
本住居跡は、遺物の出土量が多く、南壁から東壁沿いに集中的に見つかっている。また、多数の炭化材が検出され、焼失住居と思われるが、炭化材の方向に規則性は認められなかった。遺物は、この炭化材の上からも下からも検出され、径10～30cmの甕も同様に出土しているが、土器の存在は確認されなかった。



第9図 5号住居跡

5号住居跡土層剖面

1層	褐色	上	白色細石粒子まばら、焼化灰多量含む	縫合り隙	粘性弱
2層	褐色	中	白色細石粒子・焼化灰少量含む	縫合り右側	粘性弱
3層	褐色	下	白色細石粒子難観、礫(φ10～50mm)少量含む	縫合り右側	粘性弱
4層	褐色	中	褐色褐色シルト層、焼化灰まばら含む	縫合り隙	粘性弱
5層	褐色	中	炭化灰・灰化物多量含む	縫合り右側	粘性弱
6層	褐色	中	多量含む	縫合り右側	粘性弱
7層	褐色	シルト	礫(φ10～20mm)少量含む	縫合り右側	粘性弱

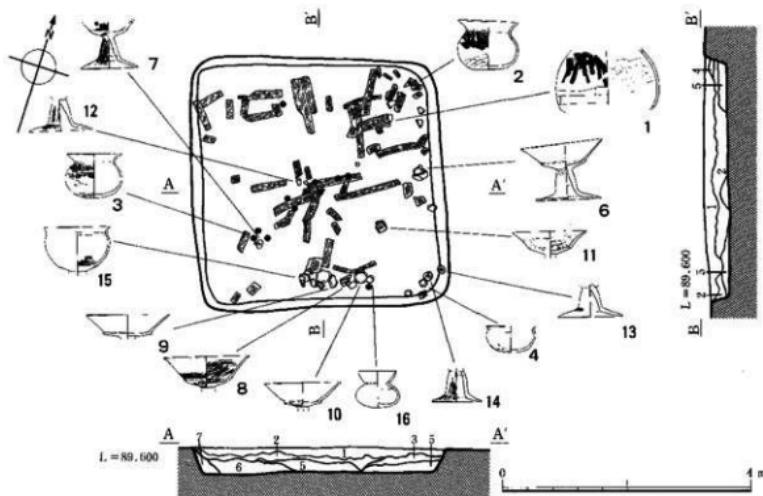


第10図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡（挿図 第9～11図、写真図版 28～31・88、遺物観察表 第6表）

位 置/O-8グリッド、平面形／南北にわずかに長いが、ほぼ正方形を呈する。規 模／東西に3.78m 南北に3.92m。壁／60～75°の角度で立ち上がり、35～40cm造存する。床／暗褐色から褐色シルト層を床面にし、平坦で硬化面は検出されなかった。また、床面のすぐ下は礫層となる。 炉／中央部西壁寄りの床面に、わずかに焼土含む暗褐色土の堆積を確認したが、火床面は捉えられず、炉であることは確認できなかった。

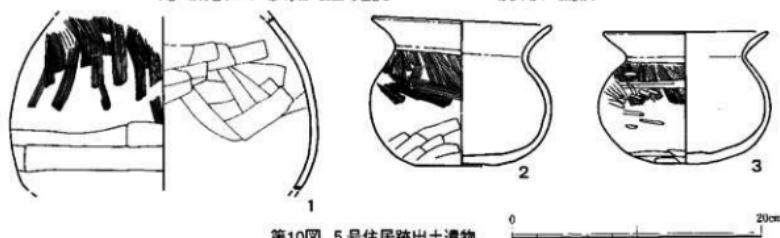
本住居跡は、遺物の出土量が多く、南壁から東壁沿いに集中的に見つかっている。また、多数の炭化材が検出され、焼失住居と思われるが、炭化材の方向に規則性は認められなかった。遺物は、この炭化材の上からも下からも検出され、径10～30cmの甕も同様に出土しているが、土器の存在は確認されなかった。



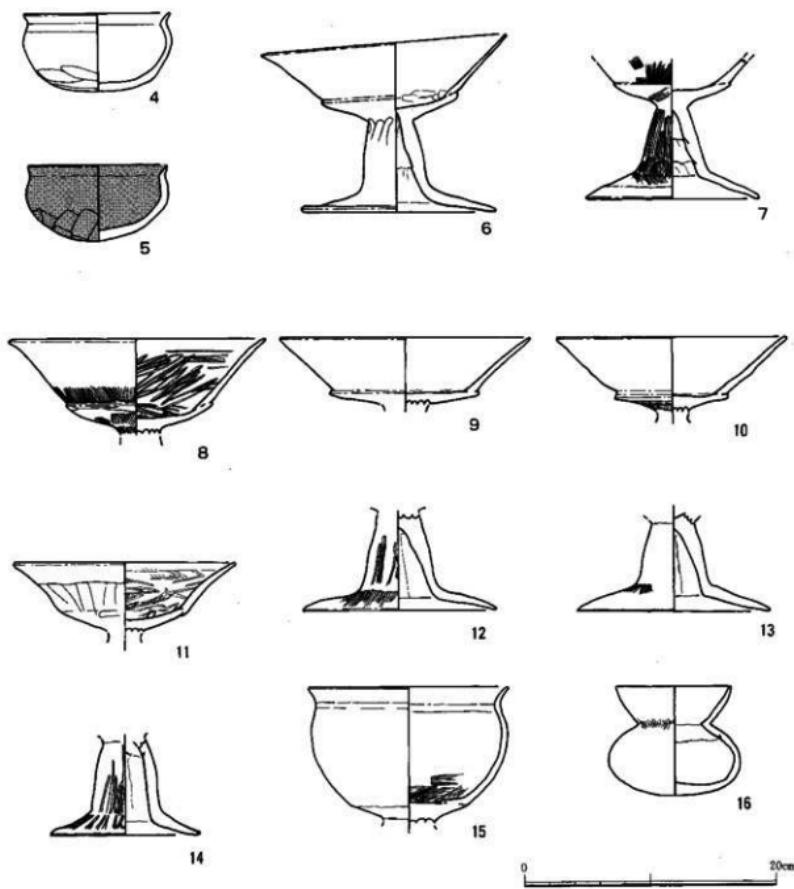
第9図 5号住居跡

5号住居跡土土質剖面

1層	褐色	上 白色細石粒子まばら、焼化灰多量含む	縫合り隙 細孔隙
2層	褐色	中 白色細石粒子・焼化灰少量含む	縫合り右側 粗孔隙
3層	褐色	下 白色細石粒子難観、礫(φ10～50mm) 少量含む	縫合り右側 粗孔隙
4層	褐色	褐色褐色シルト層、焼化灰・灰化物多量含む	縫合り隙 細孔隙
5層	褐色	中 焼化物・灰化物多量含む	縫合り右側 粗孔隙
6層	褐色	下 褐色シルト層 (φ10～20mm) 多量含む	縫合り右側 細孔隙
7層	褐色	下 褐色シルト層 (φ10～20mm) 少量含む	縫合り右側 粗孔隙



第10図 5号住居跡出土遺物

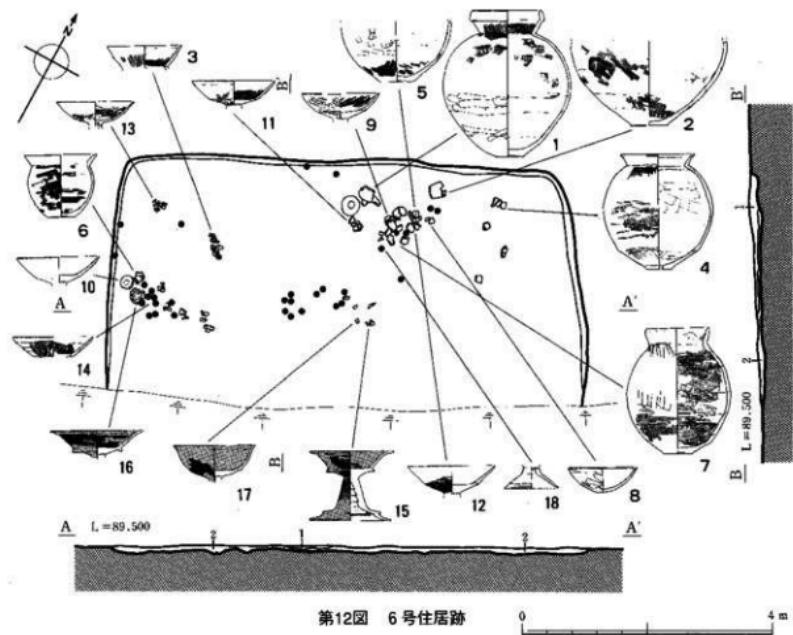


第11図 5号住居跡出土遺物

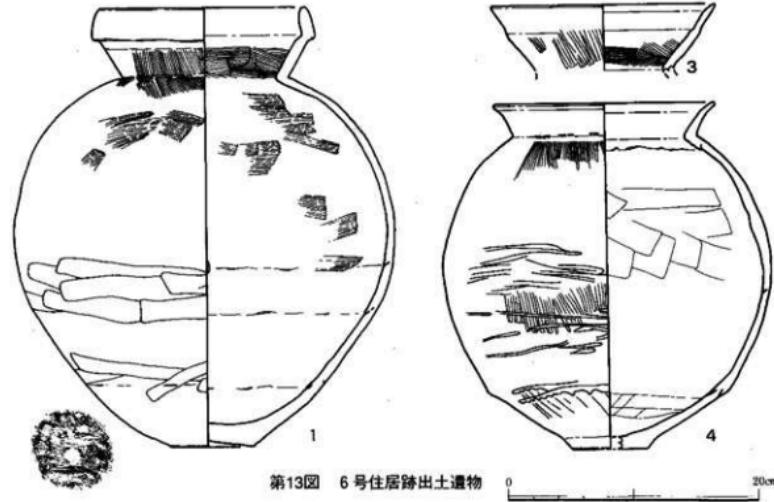
6号住居跡（挿図 第12～14図、写真図版 32～35・89・90、遺物観察表 第7表）

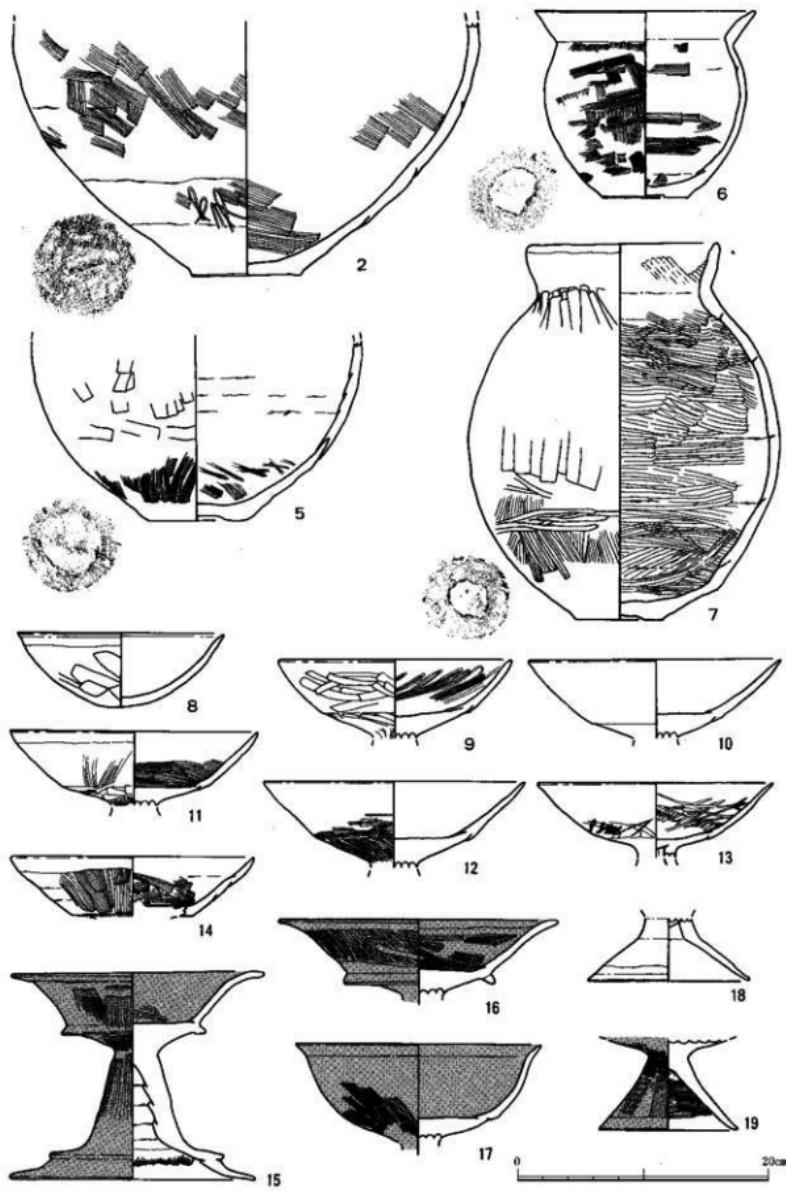
位 置/N-9・10、O-9・10グリッドにまたがる。平面形／方形と推測される。規 模／東西に7.67m、南北に4.04+a m。壁／遺存の最も良いところで10cmを測る。床／シルト層までは掘り込まれず、暗褐色土層を床面とし、平坦で、硬化面は確認されなかった。

本住居跡は、南側を大きく削平され、残存深度は浅いが、遺物量は豊富であった。これらの遺物は北壁寄りに壺、西壁よりに高杯が集中する傾向を示す。No.1の壺は、本住居跡から出土した壺の中でも最も大型のもので、下半を床下に埋設した状態で出土している。



6号居住跡土層剖面
1層 黒褐色土、白色灰石粒子、微化鉄少量含む 種まき有り 粘性弱
2層 黒褐色土、白色灰石粒子微量含む 種まき有り 粘性有り



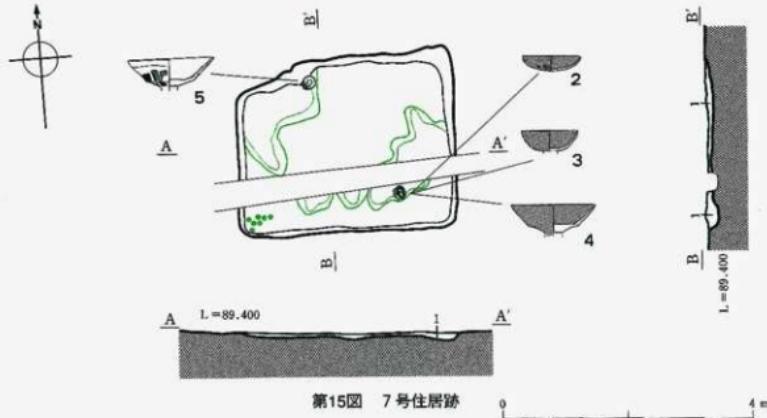


第14図 6号住居跡出土遺物

7号住居跡（挿図 第15・16図、写真図版 36~38・91、遺物観察表 第8表）

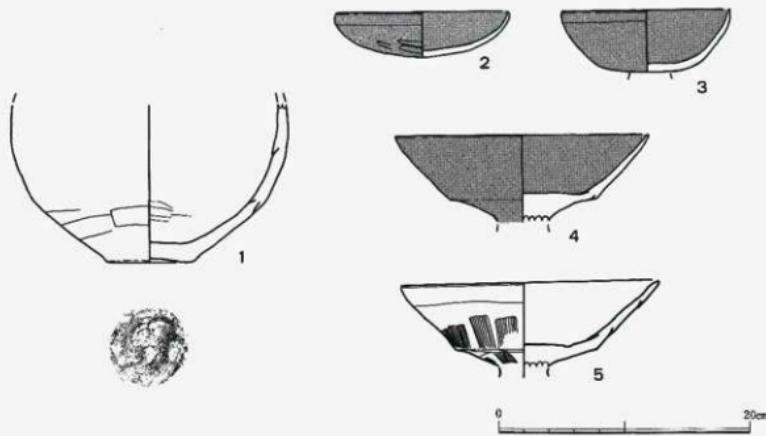
位 置/P-8・9 グリッドにまたがる。平面形／東西に長い長方形。規 模／東西に3.46m、南北に2.82m。壁／ほとんど検出されなかった。

本遺構は、削平を受けているのであろうか遺物が遺構確認面で検出され、この面を床面と捉え調査を行った。床を硬く付き固められた状態は確認されなかつたが、遺物出土面の下を方形に浅く掘り込まれ、底部は不定形で住居の掘り方のようであった。遺物の出土状態は、2点の高壊部があたかも床に置かれたように同じレベルで正位にある。この内一方は赤彩され、内側に同じく赤彩された2点の壊が重なる。



第15図 7号住居跡

7号住居跡埋土土層説明
1層 褐褐色土、黄褐色シルトまばら、白色軽石粒子微量含む、鉢まり有り、粘性有り



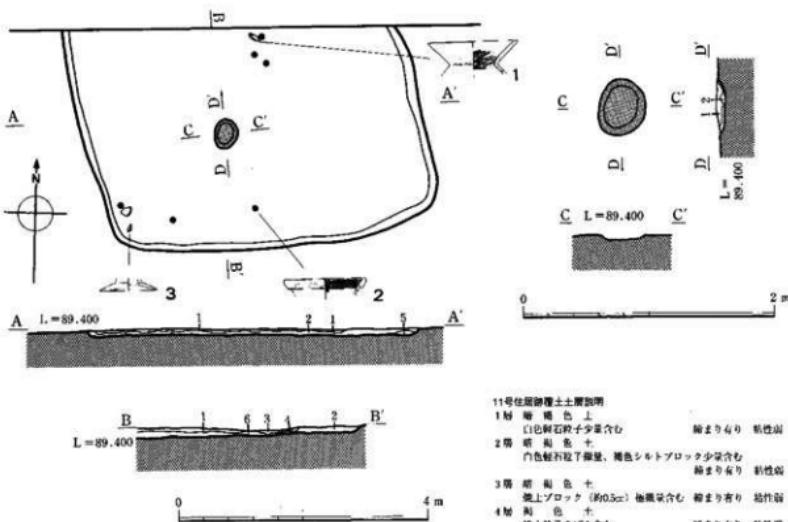
第16図 7号住居跡出土遺物



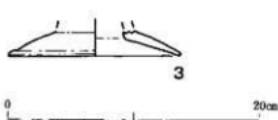
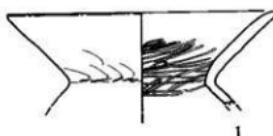
11号住居跡（挿図 第17・18図、写真図版 39・40・92、遺物観察表 第9表）

位置/P・Q-7グリッドにまたがる。平面形／方形と推測される。規模／東西に5.42m、南北に、3.80m。壁／わずかに8~10cm遺存する。床／暗褐色土から暗褐色シルト層を床面とし、平坦で硬化面は確認されなかった。炉／南壁より2m内側に位置する。地床炉で地山のシルトが赤変硬化している。

本住居跡は焼失住居で、遺構中央部に炭化材が集中的に出土し、その大半が東西方向を向いている。遺物の出土量は極めて少なく、特に集中する箇所は見られない。



第17図 11号住居跡

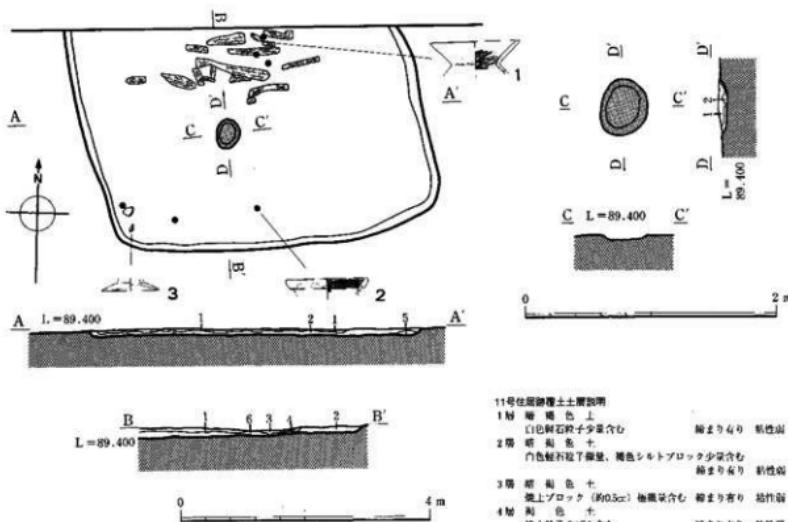


第18図 11号住居跡出土遺物

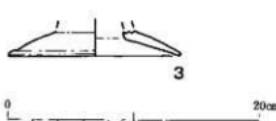
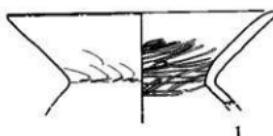
11号住居跡（挿図 第17・18図、写真図版 39・40・92、遺物観察表 第9表）

位置／P・Q-7グリッドにまたがる。平面形／方形と推測される。規模／東西に5.42m、南北に、3.80m。壁／わずかに8~10cm遺存する。床／暗褐色土から暗褐色シルト層を床面とし、平坦で硬化面は確認されなかった。炉／南壁より2m内側に位置する。地床炉で地山のシルトが赤変硬化している。

本住居跡は焼失住居で、遺構中央部に炭化材が集中的に出土し、その大半が東西方向を向いている。遺物の出土量は極めて少なく、特に集中する箇所は見られない。



第17図 11号住居跡

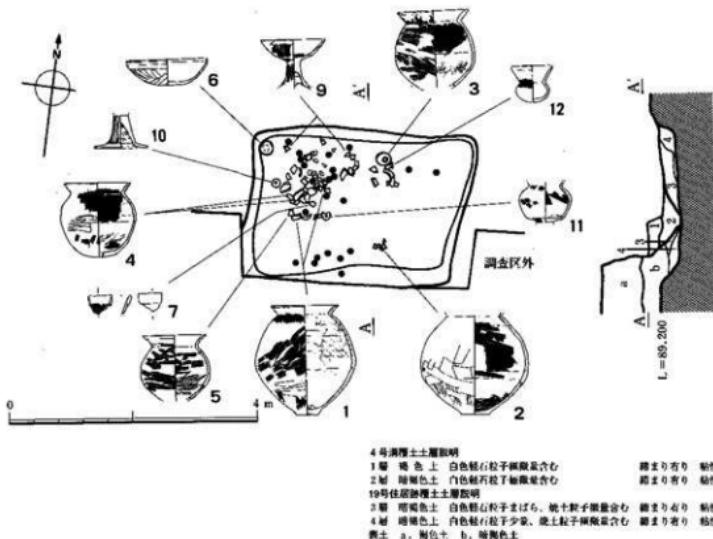


第18図 11号住居跡出土遺物

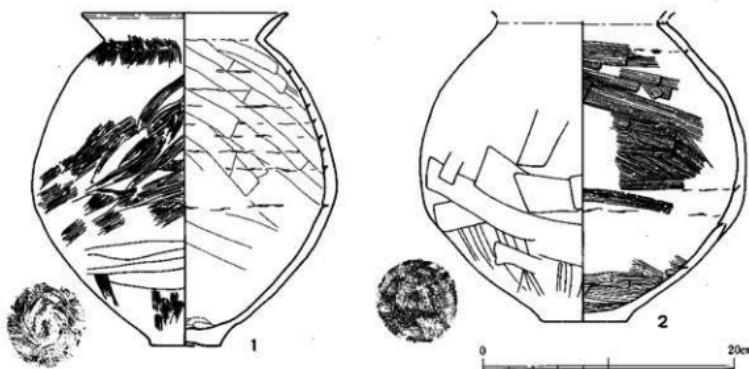
19号住居跡（挿図 第19～21図、写真図版 41・42・93、遺物観察表 第10表）

位 置/U-11グリッド。平面形／東西に長い長方形。規 模／東西に3.50m、南北に2.35m。壁／40～60°の角度で立ち上がり、20～30cm遺存する。床／暗褐色シルト層を床面とし、平坦で硬化面は検出されなかった。重 複／4号溝に切られる。

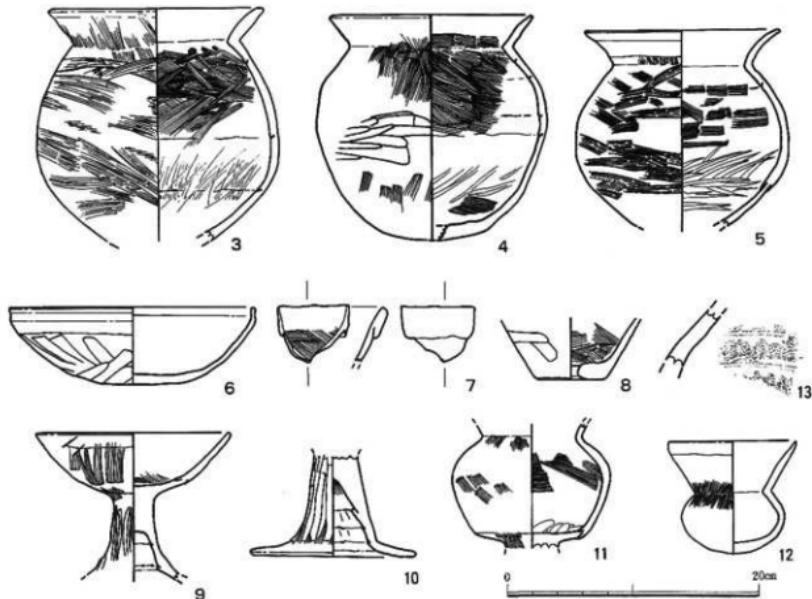
遺物量は多く、主に覆土第2層から出土し、北西の隅に最も集中する。



第19図 19号住居跡



第20図 19号住居跡出土遺物



第21図 19号住居跡出土遺物

土坑

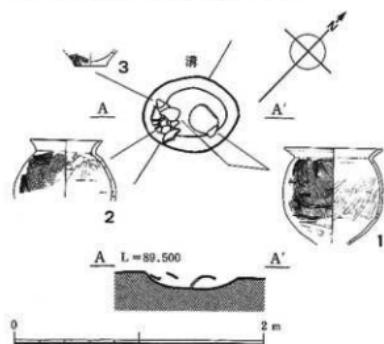
4号土坑（挿図 第22・23図、写真図版 2・94、遺物観察表 第11表）

位置/N-7グリッド。平面形／楕円形。規模／長軸に76cm、短軸に60cm、残存深度14cm。重複／1号坑に切られる。

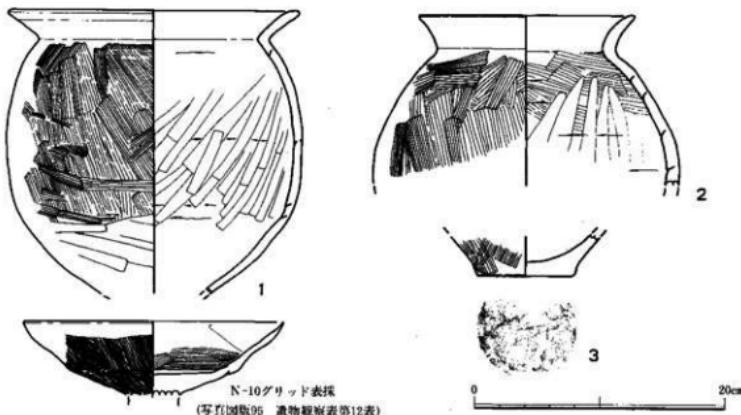
覆土は暗褐色土の単層で、土師器壺片が4～6個体分出土している。これらの遺物は、完形に接合されるものではなく、雑然とした出土状態からも、埋設されたというより投棄されたという印象を受ける。



2. 4号土坑遺物出土状況 (北から)



第22図 4号土坑



第23図 4号土坑出土遺物・遺構外出土遺物

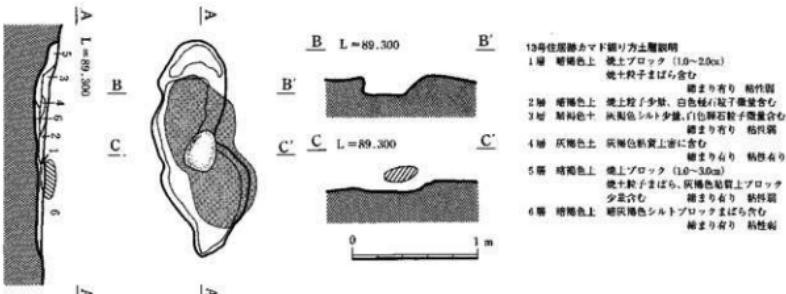
2. 古墳時代後期

住居跡

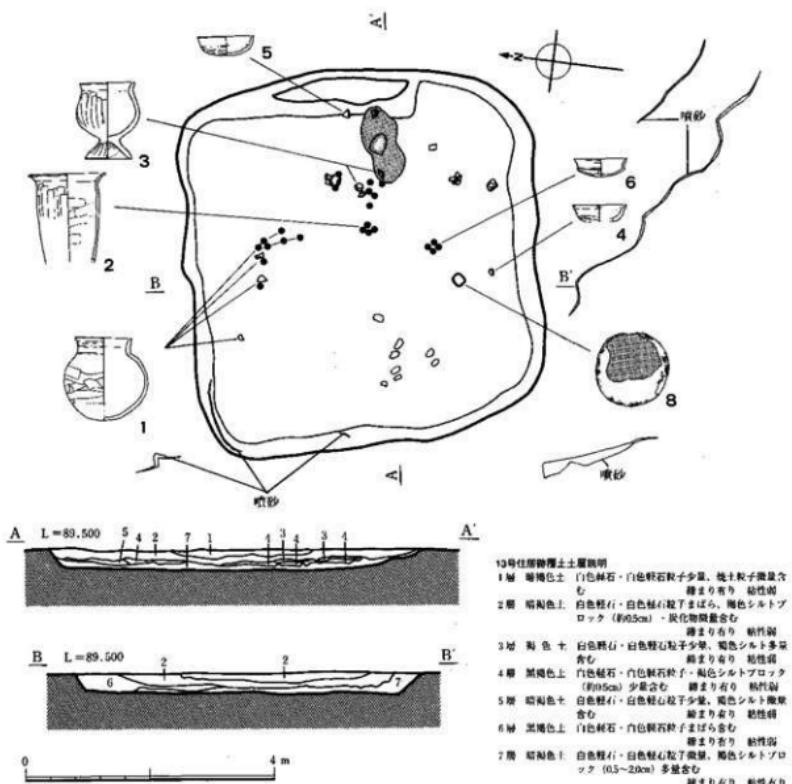
13号住居跡（挿図 第24～27図、写真図版 43～46・96、遺物観察表 第13表）

位 置/R-9・10、S-9・10グリッドにまたがる。平面形／東西に長い長方形。主 軸/N-80°-E。規 模／東西に5.95m、南北に5.73m。壁/45°-55°の角度で立ち上がり25-35cm遺存する。床/褐色シルト層に築かれ、平坦で硬化面は検出されなかった。カマド/東壁面中央部に火床面が検出されているが、袖および煙道の掘り込みは確認されなかった。この火床面の上から長径32cmの円窓が出土している。火熱痕は見られなかったが、カマド構築材の一部であろうか。さらに、火床面よりも一回り大きい掘り方が確認されている。

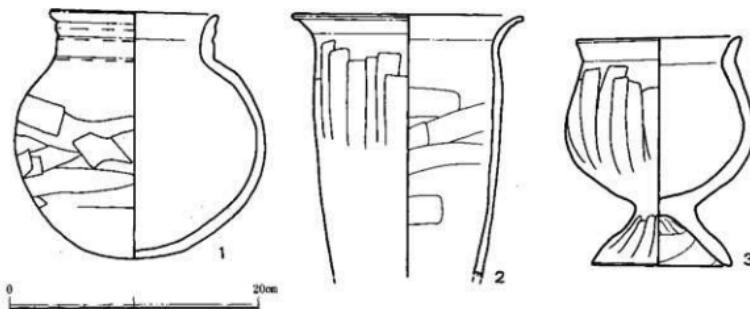
本住居跡は北西の隅を噴砂に切られる。この噴砂は遺構掘り下げ中に検出されたもので、遺構確認面には達していないかった。また住居南側から西側に近接して、噴砂が北西から南東にかけて走る。遺物は、主に住居の東半分から出土している。また、嵩縮み石であろうか15cm前後の細長い凹縫が、西壁よりに集中して出土している。



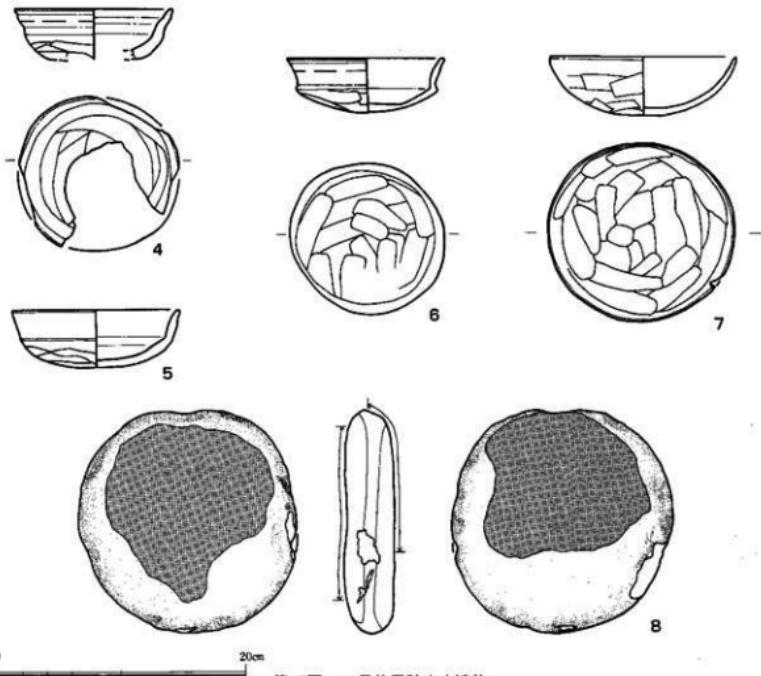
第24図 13号住居跡カマド掘り方



第25図 13号住居跡



第26図 13号住居跡出土遺物

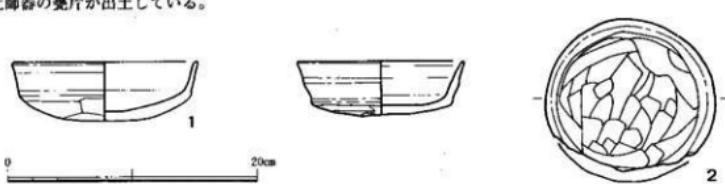


第27図 13号住居跡出土遺物

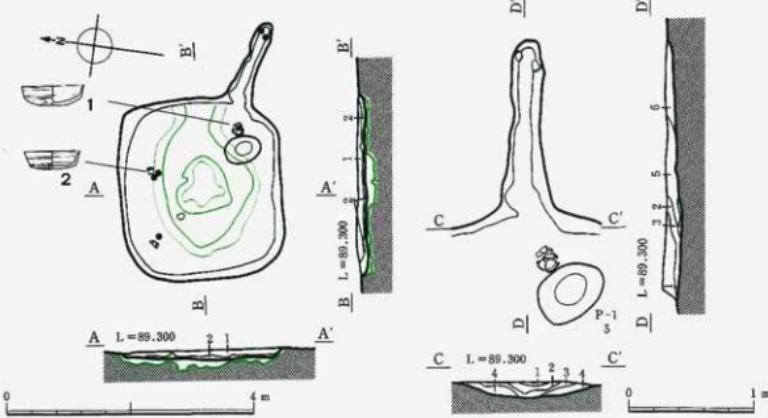
14号住居跡（挿図 第28・29図、写真図版 47～49・97、遺物観察表 第14表）

位 置 / S-10グリッド。平面形／東西に長い長方形。主 軸 / N-103°-E.。規 模／東西に2.95m、南北に2.60m。壁／わずかに8～16cm遺存する。床／褐色シルト層に掘り込まれ、半壺である。暗褐色土と褐色シルトブロックにより貼床され、良く締まっているが、硬化面は明瞭に検出されなかった。掘り方／東壁中央部を除き壁に沿って馬蹄形に深掘りする。また、中央部を別に深掘りするため「Oの字」状の高まりが残される。カマド／東壁南側、住居のコーナー部近くに付設される。煙道は長さ1.40mを測り、真東より13°南に傾く。袖および、火床面は検出されなかつたが、手前に深さ約5cmの皿状の掘り込みが確認されている。

本住居跡からの遺物の出土量は少なく、正位床着の状態では完形の壺2点が出土した他、煙道の先端部から上師器の壺片が出土している。



第28図 14号住居跡出土遺物



第29図 14号住居跡

14号住居跡土層説明

- 1層 塗褐色土 白色輕石粒子まばら、褐色シルトブロック (0.5~1.0cm) 少量含む 線まり有り 黏性弱
- 2層 塗褐色土 褐褐色シルトブロック多量、焼土粒子微量含む 線まり有り 黏性弱
- 3層 黒褐色土 烧成粒子・灰多量、褐褐色シルトブロックまばら、焼土粒子少々含む 線まり有り 黏性弱
- 4層 塗褐色土 褐褐色シルト・まばら含む 線まり有り 黏性弱
- 5層 塗褐色土 烧成ブロック (1.0~2.0cm)、焼土粒子・炭化粒子少々、褐褐色シルト筋状に少々含む 線まり有り 黏性弱
- 6層 塗褐色土 褐褐色シルトまばら、焼土粒子微量含む 線まり有り 黏性弱

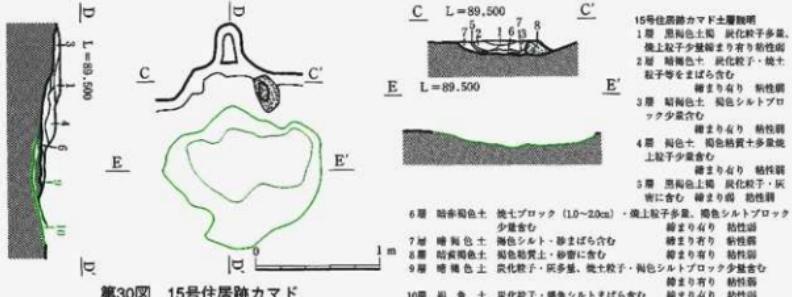
14号住居跡カマド土層説明

- 1層 塗褐色土 白色輕石粒子少々含む 線まり有り 黏性弱
- 2層 塗褐色土 褐褐色シルトブロック多量、焼土粒子微量含む 線まり有り 黏性弱
- 3層 黒褐色土 烧成粒子・灰多量、褐褐色シルトブロックまばら、焼土粒子少々含む 線まり有り 黏性弱
- 4層 塗褐色土 褐褐色シルト・まばら含む 線まり有り 黏性弱
- 5層 塗褐色土 烧成ブロック (1.0~2.0cm)、焼土粒子・炭化粒子少々、褐褐色シルト筋状に少々含む 線まり有り 黏性弱
- 6層 塗褐色土 褐褐色シルトまばら、焼土粒子微量含む 線まり有り 黏性弱

15号住居跡（挿図 第30~33図、写真図版 50・98・99、遺物観察表 第15表）

位 置 / S-8 グリッド。平面形 / 東西に長い長方形。主 軸 / N=86°-E。規 模 / 東西に2.68m、南北に2.30m。壁 / わずかに12~16cm遺存する。床 / 暗褐色シルト層に掘り込まれ、平坦である。硬化面は検出されなかった。カマド / 東壁ほぼ中央部に付設され、煙道部は、燃焼部より浅く細く掘り込まれる。右袖だけがわずかに遺存し、黄褐色シルトを補材として用いている。火床面は検出されなかった。

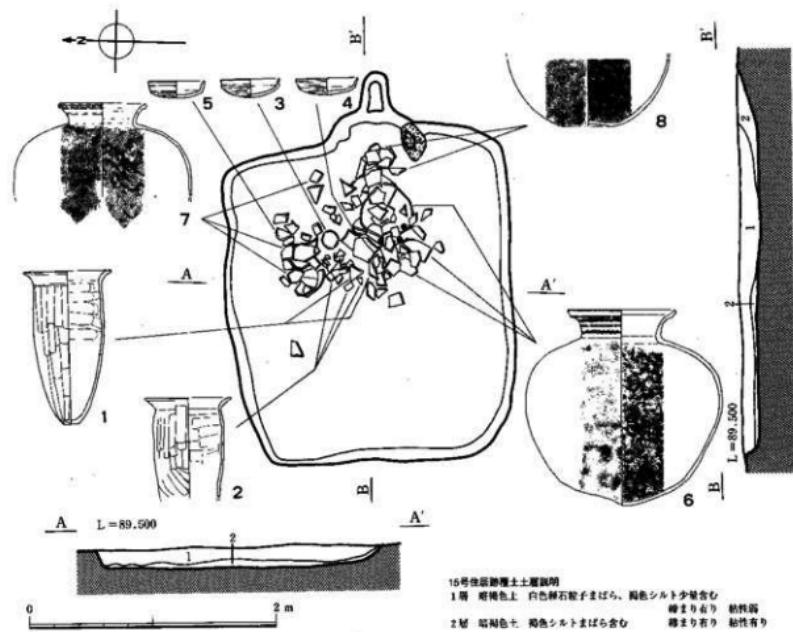
本住居跡は、遺物の出土量が多く、カマドの手前に集中している。遺物は床面に散乱したような状態で検出され、遺構の埋没段階で沈んだものであろうか一部床面より深い位置からも出土している。また、No. 6 の須恵器壺の底部は、下半が埋没した状態であったが正位で原形をとどめている。これらの遺物を取り上げ終るとその部分は掘り方のように不定形な底部を持つ皿状の掘り込みとなる。



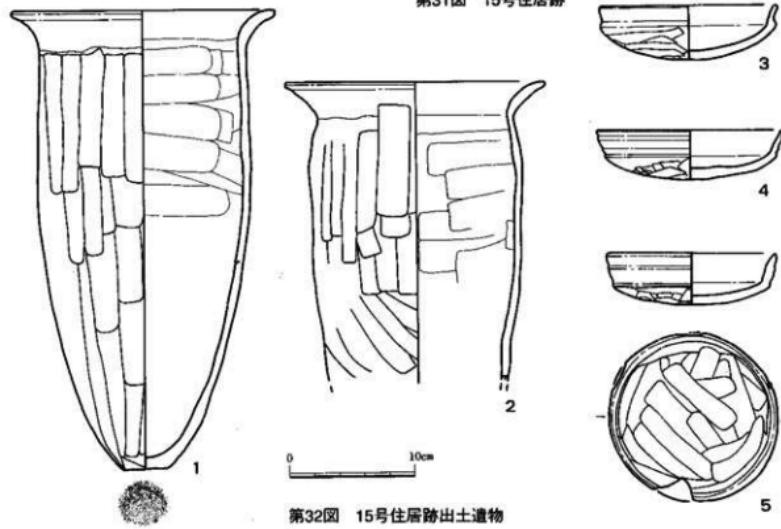
第30図 15号住居跡カマド

15号住居跡カマド土層説明

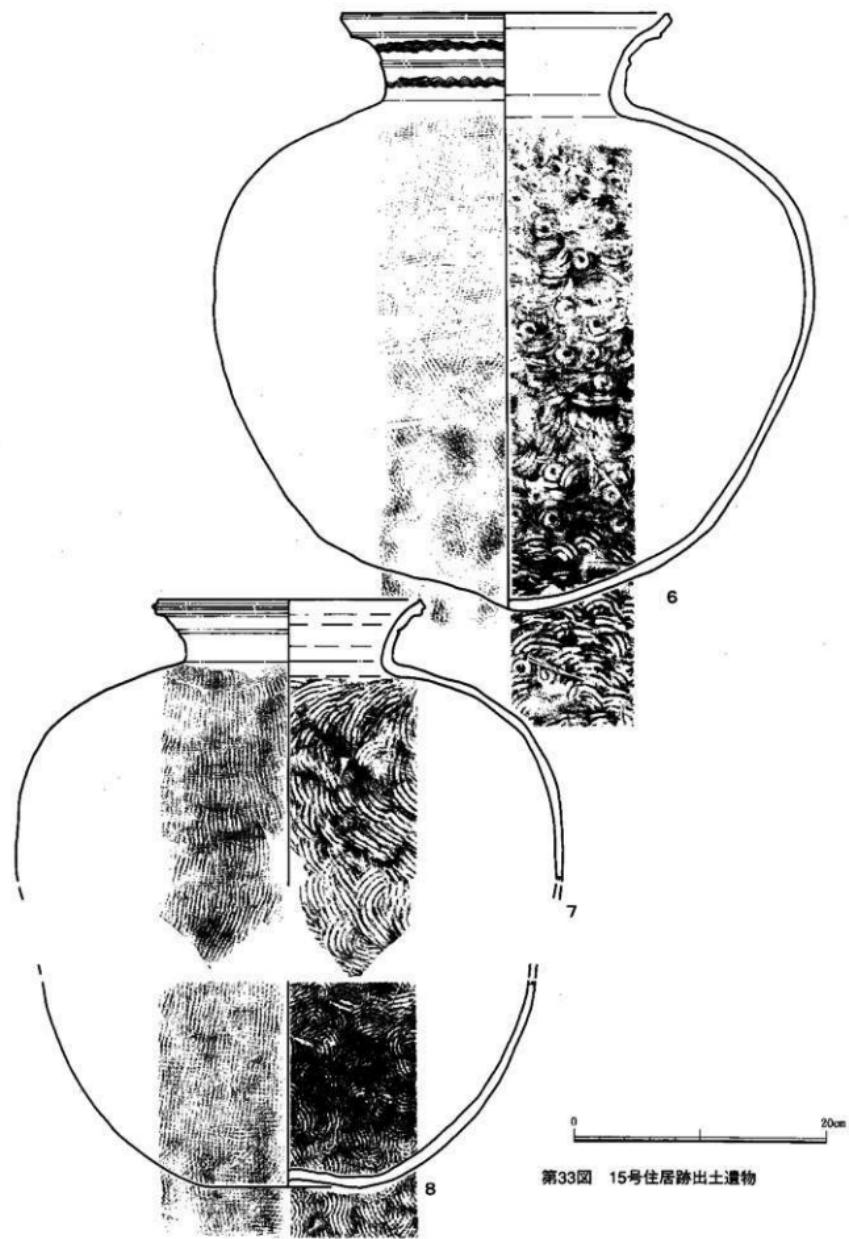
- 1層 塗褐色土 炭化粒子多量、焼土粒子少々含む 線まり有り 黏性弱
- 2層 塗褐色土 焼成粒子・焼土粒子・灰多量含む 線まり有り 黏性弱
- 3層 塗褐色土 焼成粒子・褐色シルトブロック少々含む 線まり有り 黏性弱
- 4層 塗褐色土 焦化粘土・少々含む 線まり有り 黏性弱
- 5層 黑褐色土 灰多量、炭化粘土・灰多量含む 線まり有り 黏性弱
- 6層 塗褐色土 焼成粒子・褐色シルトブロック (1.0~2.0cm)、焼土粒子少々含む 線まり有り 黏性弱
- 7層 塗褐色土 褐褐色シルト・まばら含む 線まり有り 黏性弱
- 8層 塗褐色土 焼成粘土・少々含む 線まり有り 黏性弱
- 9層 塗褐色土 炭化粒子・灰多量、焼土粒子・褐色シルト少々含む 線まり有り 黏性弱
- 10層 塗褐色土 炭化粘土・褐色シルトまばら含む 線まり有り 黏性弱



第31図 15号住居跡



第32図 15号住居跡出土遺物



第33図 15号住居跡出土遺物

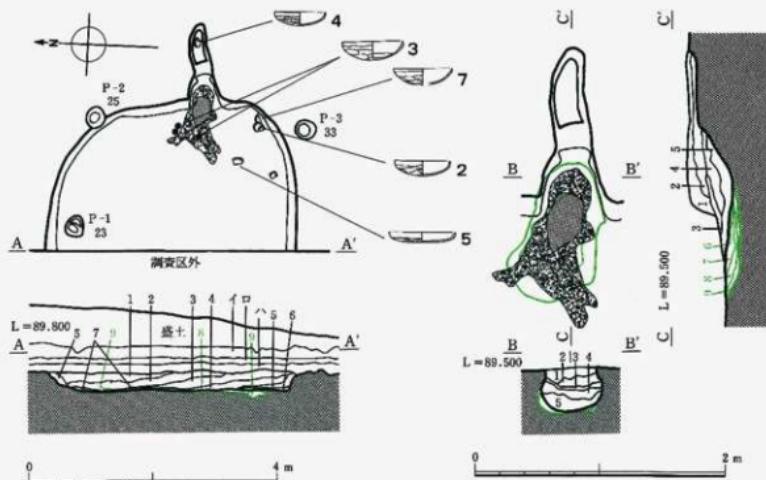
3. 歴史時代

住居跡

2号住居跡（挿図 第34・35図、写真図版 51～54・100、遺物観察表 第16・17表）

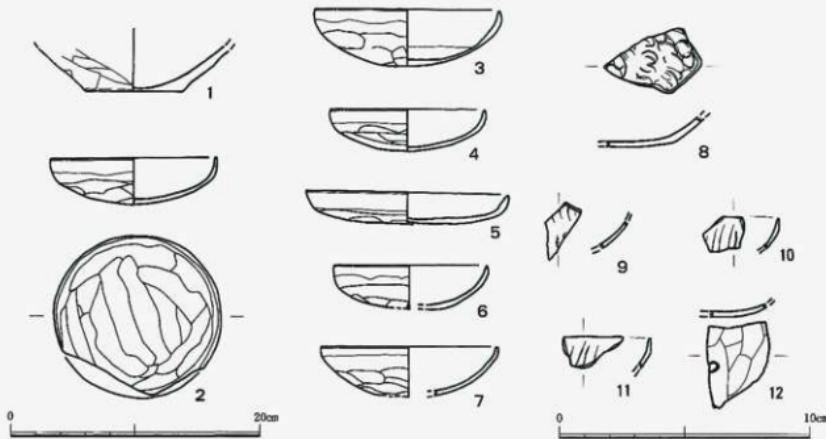
位 置／M-9・10、N-10グリッドにまたがる。平面形／隅丸方形と推測される。主 軸／N-84°-E。規 模／東西に2.40+αm、南北に4.05m。壁／50～70°の角度で立ち上がり25～35cm遺存する。床／褐色シルト層に掘り込まれ、平坦である。暗褐色土と褐色シルトブロックにより貼床され、良好に締まっているが、硬化面は検出されなかった。掘り方／北側を深く掘り込んでいる。カマド／東壁中央部よりやや南に付設される。燃焼部は、下半を広く上半すさまる様に掘り込まれ、30°の角度で緩やかに煙道へと立ち上がる。煙道部は60cmの長さで浅く掘り込まれ、先端から壊が正位で出土している。

本住居跡床面の直上からは、密な灰および、炭化粒子の層が検出されている。炭化材は含まれないが、焼失住居の可能性も考えられる。また、覆土の大半が南側からの堆積で、地山の傾斜を考えると不自然である。遺物は主にこの灰層から出土し、壊がその大半を占め、いずれもカマド周辺および、南壁側に集中する。



第34図 2号住居跡

2号住居跡土質剖面		
1層	暗褐色土 白色粘石粒子少 褐色シルト少 含む	縫まり有り 粘性弱
2層	暗褐色土 白色粘石粒子無 炭化粒子・純土粒子無 含む	縫まり有り 粘性弱
3層	暗褐色土 白色粘石粒子少 褐色シルト少 含む	縫まり有り 粘性弱
4層	暗褐色土 白色粘石粒子無 炭化粒子少 褐色シルトブロ ック多 含む	縫まり有り 粘性弱
5層	褐 色 土 褐色シルトブロ ック多 含む	縫まり有り 粘性弱
6層	褐 色 土 炭化粒子多 含む	縫まり有り 粘性弱
7層	褐 色 土 炭化粒子密 に含む	縫まり弱 粘性弱
8層	褐 色 土 褐色シルトブロ ック (φ1.0-3.0cm) まばら含む	縫まり強 粘性弱
9層	暗褐色土 褐色シルトブロ ック (φ1.0-3.0cm) 少 含む	縫まり有り 粘性弱

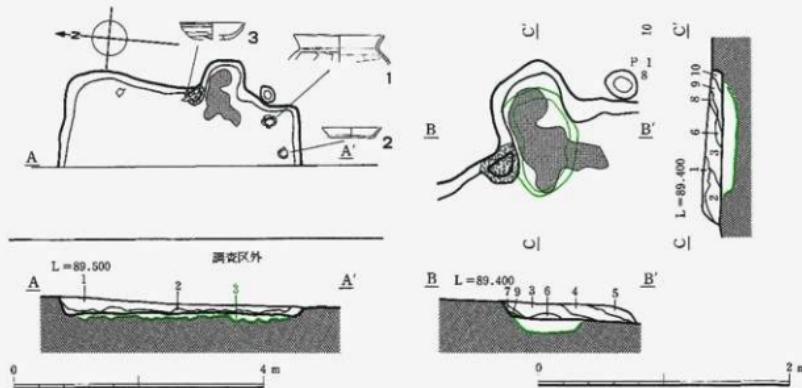


第35図 2号住居跡出土遺物

3号住居跡（挿図 第36・37図、写真図版 56・57・101、遺物観察表 第18表）

位 置/M・N-10グリッドにまたがる。平面形／方形と推測される。主 軸/N-97°-E. 規 模／東西に1.48+a m、南北に3.85m。壁／50~65°の角度で立ち上がり15~30cm遺存する。床／暗褐色シルト層に掘り込まれ、この掘り込みの凹凸をなくす程度に貼床されている。硬化面は検出されなかった。カマド／東壁中央よりやや南側に付設される。燃焼部は方形に掘り込まれ、燃焼部左寄りに火床面が広がり、左側の地山を袖状に造り出している。櫛道は削平され残っていない。

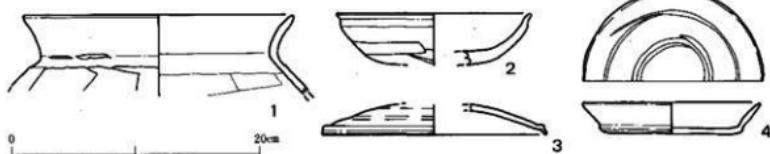
遺物の出土量は少ない。口縁部から頭部までしかないリング状の甕が、カマド右脇から正位で出土している。10号住居跡からも、同様の状態の甕の出土があるが、いずれもこれに伴うピットは検出されなかった。



第36図 3号住居跡

3号住居跡土層説明
 1層 硫褐色土 白色シルト、炭化粒子・白色石子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 2層 黄褐色土 白色粘石子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 3層 黄褐色土 白色粘石子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 4層 黄褐色土 炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 5層 黄褐色土 白色粘石子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 6層 黄褐色土 粒状多量、炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 7層 黄褐色土 粒状多量炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 8層 黄褐色土 土上にブロック (10~30cm) 炭化粒子・炭化物少
 9層 黄褐色土 炭化粒子・灰層、炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 10層 黄褐色土 炭化粒子・灰層、炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱

3号住居跡カマド土層説明
 1層 細褐色土 白色粘石子少量、炭化粒子少量、炭化物微量含む
 線まり有り 粘性弱
 2層 細褐色土 白色粘石子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 3層 黄褐色土 上
 4層 黄褐色土 炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 5層 黄褐色土 土上
 6層 黄褐色土 粒状多量、炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 7層 黄褐色土 粒状多量炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 8層 黄褐色土 土上にブロック (10~30cm) 炭化粒子・炭化物少
 9層 黄褐色土 炭化粒子・灰層、炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 10層 黄褐色土 炭化粒子・灰層、炭化粒子少量含む
 線まり有り 粘性弱

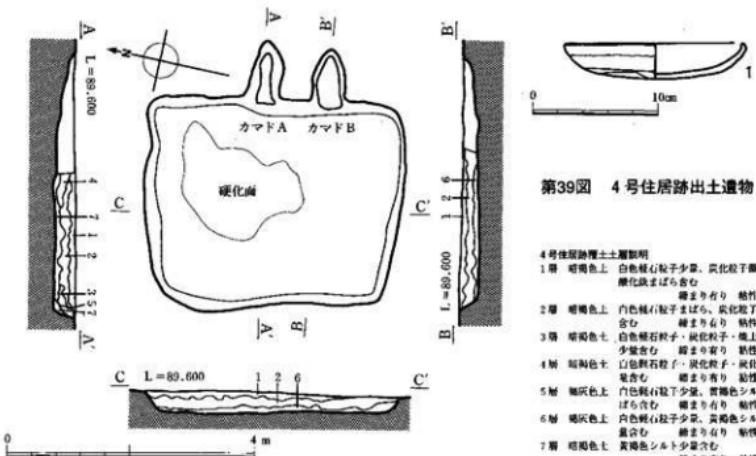


第37図 3号住居跡出土遺物

4号住居跡 (挿図 第38~40図、写真図版58~60・102、遺物観察表 第19表)

位 置 / N - 7° 8'、M - 7° 8' グリッドにまたがる。平面形 / 南北に長い長方形。主 軸 / カマド A、N - 96° - W、カマド B、N - 98° - W。規 模 / 東西に3.25m、南北に4.15m。壁 / 50~70°の角度で立ち上がり25~35cm遺存する。床 / 黄褐色シルト層に掘り込まれ、暗褐色土と褐色シルトブロックによって貼床され、平坦である。硬化面は住居南西コーナーより光沢のある範囲を検出する。カマド / 西壁中央部に2基付設される。袖および、火床面は検出されていない。2本の煙道が40cmの距離を置いて、幅50~70cm、奥行き90~100cmの規模で舌状に掘り込まれている。プランおよび、土層を観察した限りでは、両者に新旧関係はない、同時期に存在したものと思われる。重 複 / 3号掘立柱建物跡を切る。

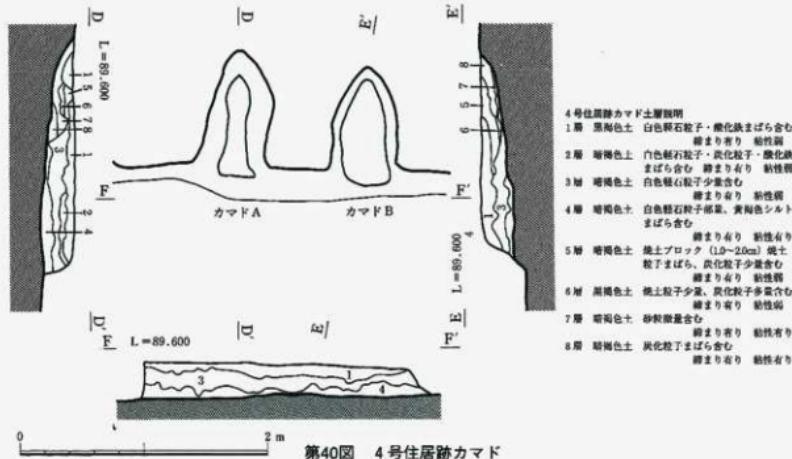
遺物は僅少で、カマド A 附近から壊 1 点が出土しただけである。



第38図 4号住居跡

第39図 4号住居跡出土遺物

4号住居跡土層説明
 1層 塗褐色土 白色絆心粒子少量、炭化粒子微量、
 煙化物少
 線まり有り 粘性弱
 2層 塗褐色土 白色粘石子少量含む
 線まり有り 粘性弱
 3層 塗褐色土 白色粘石子、炭化粒子・地上粒子
 少量含む
 線まり有り 粘性弱
 4層 塗褐色土 白色粘石子・炭化粒子・炭化物少
 量含む
 線まり有り 粘性弱
 5層 塗灰色土 白色絆心粒子少量、黃褐色シルト
 少量含む
 線まり有り 粘性弱
 6層 塗灰色土 白色絆心粒子多量、黃褐色シルト
 多量含む
 線まり有り 粘性弱
 7層 塗褐色土 黃褐色シルト少量含む
 線まり有り 粘性弱



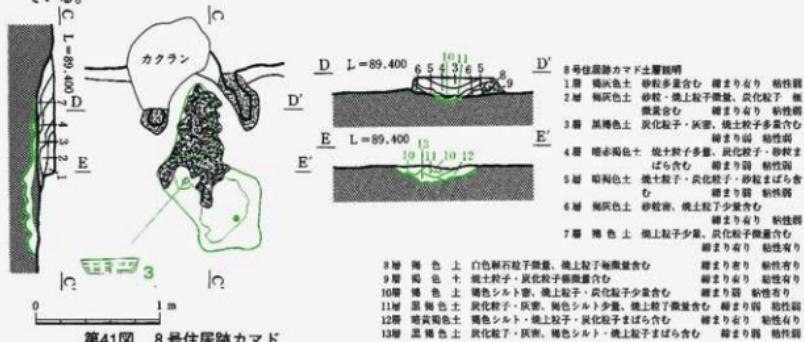
第40図 4号住居跡カマド

8号住居跡 (挿図 第41~43図、写真図版 61~63・103、遺物観察表 第20表)

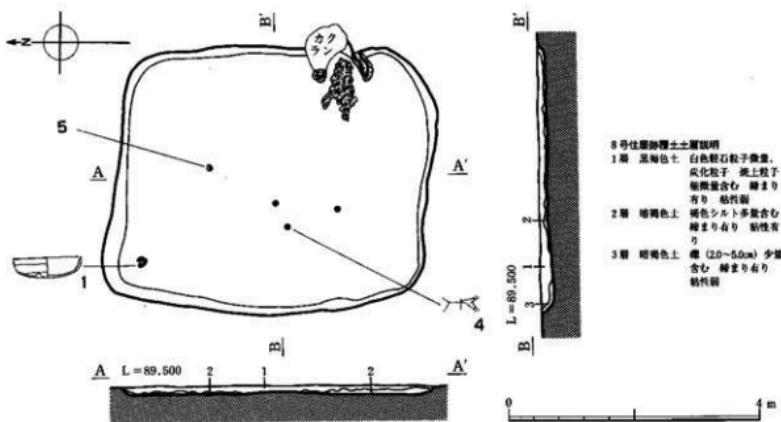
位置 / P-9グリッド。平面形 / 南北に長い長方形。主軸 / N-98°-E。規模 / 東西に4.30m、南北に4.90m。壁 / わずかに15~20cm遺存する。床 / 褐色シルト層に掘り込まれ、暗褐色土と褐色シルトブロックによって貼床され、平坦である。硬化面は検出されなかった。カマド / 東壁南寄りに付設される。搅乱によって煙道部は壊されているが、わずかに袖が残されている。袖材は、炭化粒子、焼土粒子を含む褐色シルトである。

南壁東寄りに焼土および、褐色シルトブロックの散っている箇所を検出する。カマドの付け替えを考慮して調査を行うが、はっきりとしたカマドの痕跡はつかめず、わずかに壁外へ張り出す掘り込みを確認ただけであった。

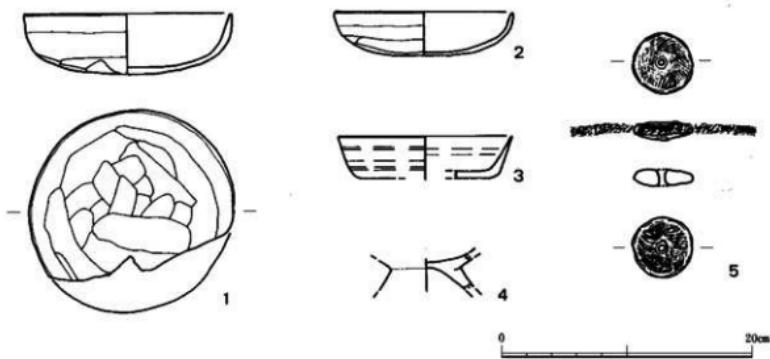
遺物は少なく壺類、台付甕等が出土する。北西コーナー近くの床面から、口径14cmを超える土師器の壺を検出する。また覆土中からは、流れ込みであろうか、弥生期のものと思われる紡錘車状の土製品が見つかっている。



第41図 8号住居跡カマド



第42図 8号住居跡

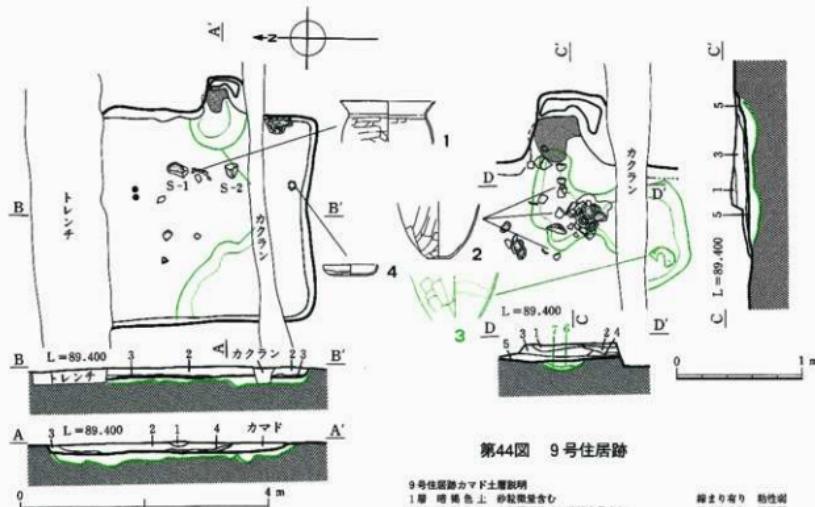


第43図 8号住居跡出土遺物

9号住居跡（拝図 第44・45図、写真図版 64~66・104、遺物観察表 第21表）

位 置 / P - 8 - 9、Q - 8 - 9 グリッドにまたがる。平面形 / 方形と推測される。主 軸 / N - 89° - E。規 模 / 東西に3.45m、南北に3.40 + α m。壁 / わずかに10~15cm遺存する。床 / 暗褐色シルト層まで掘り込まれ、平坦である。暗褐色土と褐色シルトによって貼床され、良く締まっているが、硬化面は検出されなかった。カマド / 東壁に付設され、燃焼部は壁外へ方形に掘り込まれ、煙道部は遺存しない。また、本来の袖の位置とは若干ずれるが、カマド右脇から袖材と思われる黄褐色シルトおよび、砂粒を混ぜ合わせたものが検出されている。他に、径10~40cmを測る円環がカマド周辺に散乱するが、その中でも同一個体である S-1・2は被熱しておりカマドの構材と考えられる。掘り方 / 南側を深掘りする。

遺物は少なく主に第3層から出土している。またNo. 3はカマド付近に埋設された状態で出土している。



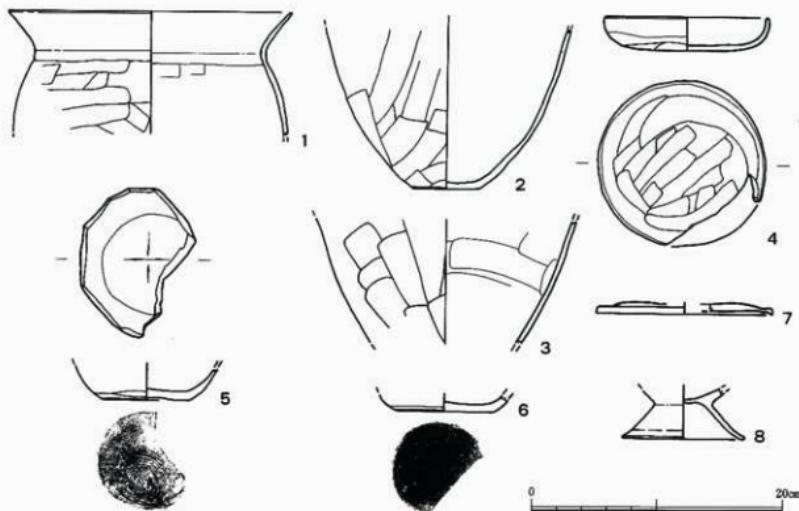
第44図 9号住居跡

9号住居跡土層剖面

- 1層 砂褐色土・白色輕石粒子・焼土粒子少量含む 緩まり有り 粘性弱
- 2層 砂褐色土・白色輕石粒子・褐色シルト少量含む 緩まり有り 粘性弱
- 3層 褐色土・褐色シルトまばら含む 緩まり有り 粘性弱
- 4層 棕褐色土・砂粒多量・焼土粒子少量含む 緩まり有り 粘性弱

9号住居跡カマド土層剖面

- | 1層 | 暗褐色土・砂粒微量含む | 緩まり有り | 粘性弱 |
|----|------------------------------|-------|-----|
| 2層 | 白色輕石粒子・砂粒少量含む | 緩まり有り | 粘性弱 |
| 3層 | 褐色土・砂粒ブロック状に多量・燒土粒子・炭化粒子微量含む | 緩まり有り | 粘性弱 |
| 4層 | 褐色土・砂粒・焼土粒子多量・炭化粒子含む | 緩まり有り | 粘性弱 |
| 5層 | 褐色土・砂粒・焼土粒子・炭化粒子・炭化土・砂粒まばら含む | 緩まり有り | 粘性弱 |
| 6層 | 褐色土・焼土粒子・炭化粒子・炭化土・砂粒まばら含む | 緩まり有り | 粘性弱 |
| 7層 | 褐色土・燒土粒子・炭化粒子・炭化土・砂粒まばら含む | 緩まり有り | 粘性弱 |



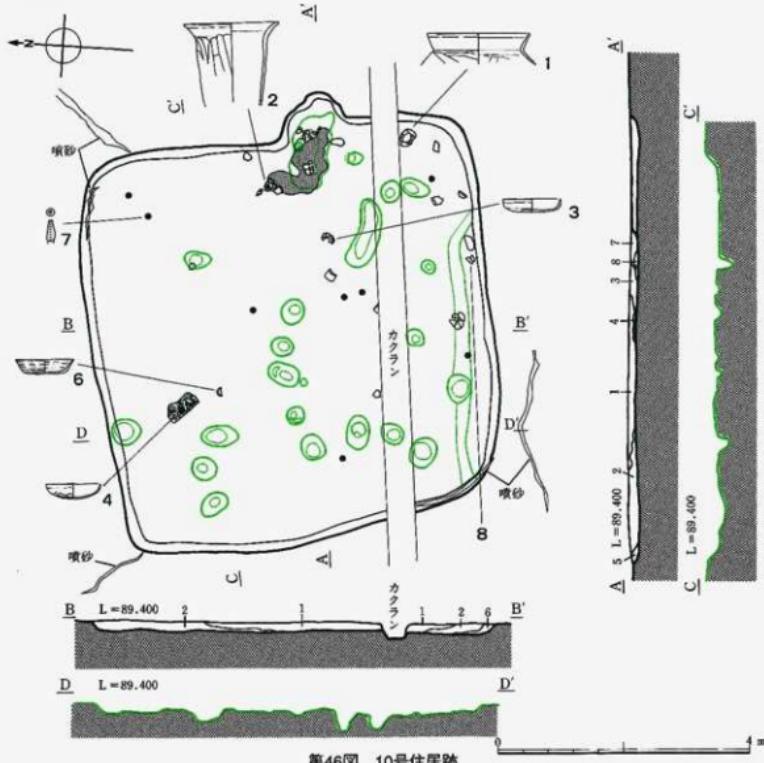
第45図 9号住居跡出土遺物

10号住居跡（挿図 第46～48、写真図版 69～73・105、遺物観察表 第22表）

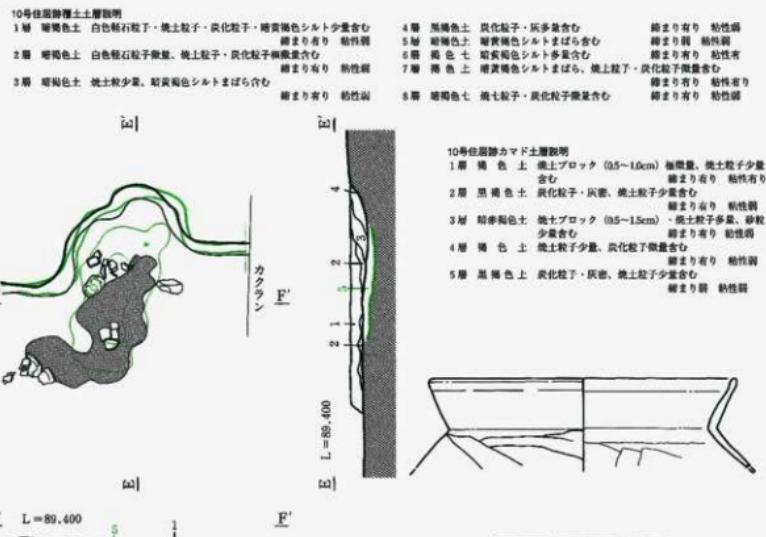
位 置／P - 9・10、Q - 9・10グリッドにまたがる。平面形／若干いびつではあるが、東西に長い長方形を呈する。主 軸／N - 82° - E。規 模／東西に6.55m、南北に6.35m。壁／わずかに10～16cm遺存する。床／褐色から褐灰色シルト層に掘り込まれ、平坦である。暗褐色土と褐灰色シルトブロックによって貼床され、良く縋まっているが、硬化面は検出されなかった。掘り方／20基のピットが検出され、内19基が柱穴を呈するが、床面で柱穴は検出されず、いずれが主柱穴に相当するのかは不明。カマド／東壁中央よりやや南寄りに付設される。煙道・袖は遺存していない。火床面は、左寄りに広がる。

本住居跡は、北東コーナーと対面する南西コーナーを噴砂によって切られている。掘り下げている段階ですでに検出されていた。このため埋没中か、埋没後にに入ったものと考えられる。

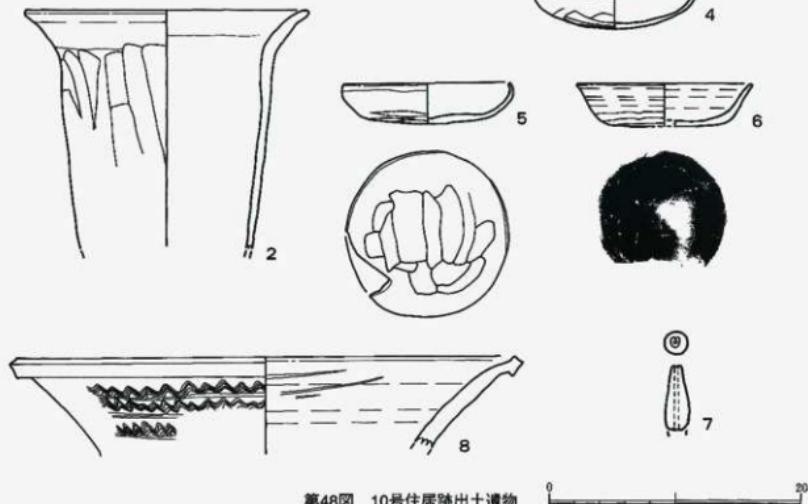
出土遺物は床着のもの、カマド右脇に据えられたNo.1の壺頭部等いずれも8世紀後半の所産と見られるが、カマドから出土しているNo.2の長胴壺は7世紀中葉の所産と見られ、双方が共伴する可能性は極めて少ない。おそらくは後者の長胴壺が、カマドの構材等として持ち込まれたものと推測される。また、No.8須恵器壺は本住居外より流れ込んだものと思われる。



第46図 10号住居跡



第47図 10号住居跡カマド



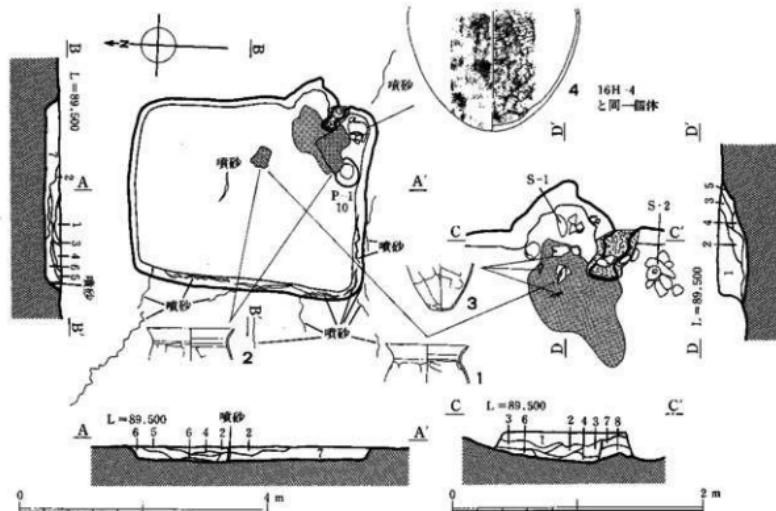
第48図 10号住居跡出土遺物

16号住居跡（挿図 第49・50図、写真図版 74～77・106・108、遺物観察表 第23表）

位 置/U-7・8 グリッドにまたがる。平面形/南北に長い長方形。主 軸/N-93°-E. 規 模/東西に3.15m、南北に3.80m。壁/45°～70°の角度で立ち上がり20～25cm遺存する。床/暗褐色から褐色シルト層に掘り込まれ平坦である。暗褐色土と暗褐色シルトブロックによって貼床され、良く締まるが、硬化面は検出されなかった。ピット/南壁下に円形の浅い掘り込みを検出する。底部に硬化面はなく、性格は不明。カマド/東壁南寄りに付設され、燃焼部は半円形に掘り込まれる。右袖のみ遺存し、黄褐色シルトを主な構材としている。煙道部はほとんど遺存せず、燃焼部の掘り込みの先端が東方へわずかに突出するだけであった。

遺物は、カマド周辺の床面にNo.1～3の土師器窯の細片が、カマド右脇からNo.4の須恵器窯底部が逆位で出土している。また、カマド周辺には円窓の出土も多く、燃焼部内および、出土土器No.4の下からは、袖石と思われる細長い礫S-1・2が出土している。

本住居跡は、南東から北西にかけて噴砂に切られ、黄褐色シルトが覆土を突き破っている様子がセクションベルトから良く観察された。完掘後も南壁から西壁にかけて、噴砂が顕著に見られる。



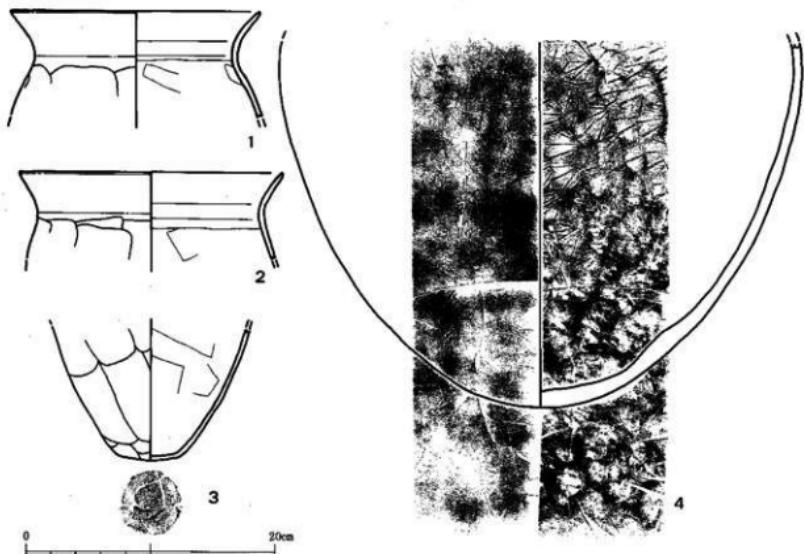
第49図 16号住居跡

16号住居跡土層説明

1層	暗褐色土	青褐色シルトブロック多量、白色軽石粒子微量含む
2層	暗褐色土	青褐色シルト・白色軽石粒子微量含む 締まり有り 粘性弱
3層	暗褐色土	白色軽石粒子少量含む 締まり有り 粘性弱
4層	暗褐色土	青褐色シルトブロックまばら、白色軽石粒子微量含む 締まり有り 粘性弱
5層	暗褐色土	白色軽石粒子少量、氧化鉄粒子少量含む 締まり有り 粘性弱
6層	暗褐色土	白色軽石粒子微量 締まり有り 粘性弱
7層	暗褐色土	青褐色シルト層状にまばら、白色軽石粒子微量含む 締まり有り 粘性弱
8層	暗褐色土	青褐色シルトブロック微量含む 締まり有り 粘性弱

16号住居跡カマド断面図

1層	暗褐色土	白色軽石粒子少量含む 締まり有り 粘性弱
2層	青褐色土	青褐色シルト削面、地上粒子微量含む 締まり有り 粘性弱
3層	暗褐色土	桃子粒子・氧化鉄粒子少量含む 締まり有り 粘性弱
4層	黒褐色土	炭化粘土・灰多量、地上粒子少量含む 締まり有り 粘性弱
5層	暗褐色土	桃子粒子少量、炭化粘土微量含む 締まり有り 粘性弱
6層	暗褐色土	桃子粒子微量 締まり有り 粘性弱
7層	青褐色土	青褐色シルト密に含む 締まり有り 粘性弱
8層	暗褐色土	青褐色シルトまばら含む 締まり有り 粘性弱



第50図 16号住居跡出土遺物

17号住居跡（挿図 第51・52図、写真図版 78・80・107・108、遺物観察表 第24表）

位置/T・U-9グリッド。平面形／東西に長い長方形。主軸/N-77°-E. 規模／東西に4.80m、南北に3.45m。壁/55~70°の角度で立ち上がり20~30cm遺存する。床/褐色シルト層に掘り込まれ、平坦である。暗褐色土と褐色シルトブロックによって貼床され良好に繕まるが、硬化面は検出されなかった。掘り方／東壁から南壁に沿って「L」字状に深掘りされている。カマド／東壁南寄りに付設される。燃焼部は箱形に掘り込まれ、煙道部はそれより浅く細く掘り込まれる。袖の遺存状態は良好黃褐色粘質土によって構築され、細長い円窓を利用した左右の袖石が原位置をとどめている。

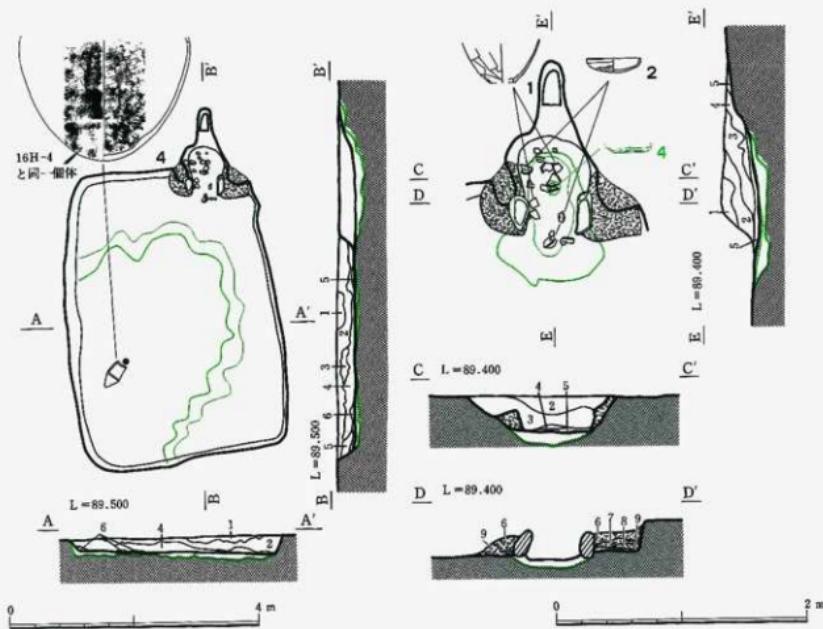
遺物はカマド内から主に出土し、カマド掘り方からも須恵器の环No.3が出土している。また、住居内の床面からは、内面に5本単位の放射状当て具痕のある須恵器壺の胴部片No.4が出土し、16号住居跡のNo.4と接合される。

17号住居跡土質剖面

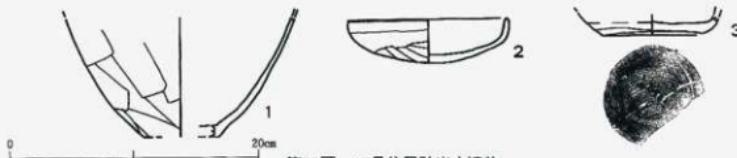
1層 黒褐色土	白色軽石粒少量、燒土粒少量	縫まり有り	粘性弱
2層 黑褐色土	白色輕石粒子少々、燒土粒子、褐色シルトブロック少量	縫まり有り	粘性弱
3層 黑褐色土	白色軽石粒少量	縫まり有り	粘性弱
4層 壱褐色土	白色軽石粒少量、褐色シルトブロック少々	縫まり有り	粘性弱
5層 黑褐色土	白色軽石粒少量、褐色シルトブロック少々	縫まり有り	粘性弱
6層 黑褐色土	白色軽石粒微量、褐色シルト少量	縫まり有り	粘性弱
7層 壱褐色土	褐色粘質土	縫まり有り	粘性弱
8層 壱褐色土	褐色粘質土	縫まり有り	粘性弱
9層 黑褐色土	褐色シルトブロック層に含む	縫まり有り	粘性弱

17号住居跡カマド土質剖面

1層 壱褐色土	白色軽石粒少々、灰褐色シルト少量、燒土粒子微量含む	縫まり有り	粘性弱
2層 壱褐色土	白色軽石粒少量、灰褐色シルト少々、燒土粒子微量含む	縫まり有り	粘性弱
3層 細黄褐色土	青褐色粘質土多量含む	縫まり有り	粘性弱
4層 壱褐色土	地上ブロック(10~30cm)、燒土粒子、燒土粒子少々	縫まり有り	粘性弱
5層 壱褐色土	炭化灰・灰灰、地上ブロック(10~20cm)、燒土粒子少量含む	縫まり有り	粘性弱
6層 壱褐色土	青褐色粘質土層に含む	縫まり有り	粘性弱
7層 壱褐色土	青褐色粘質土・灰褐色シルト少々含む	縫まり有り	粘性弱
8層 壱褐色土	青褐色粘質土少量、灰褐色シルトブロック多量含む	縫まり有り	粘性弱
9層 黑褐色土	灰褐色シルトブロック層に含む	縫まり有り	粘性弱



第51図 17号住居跡

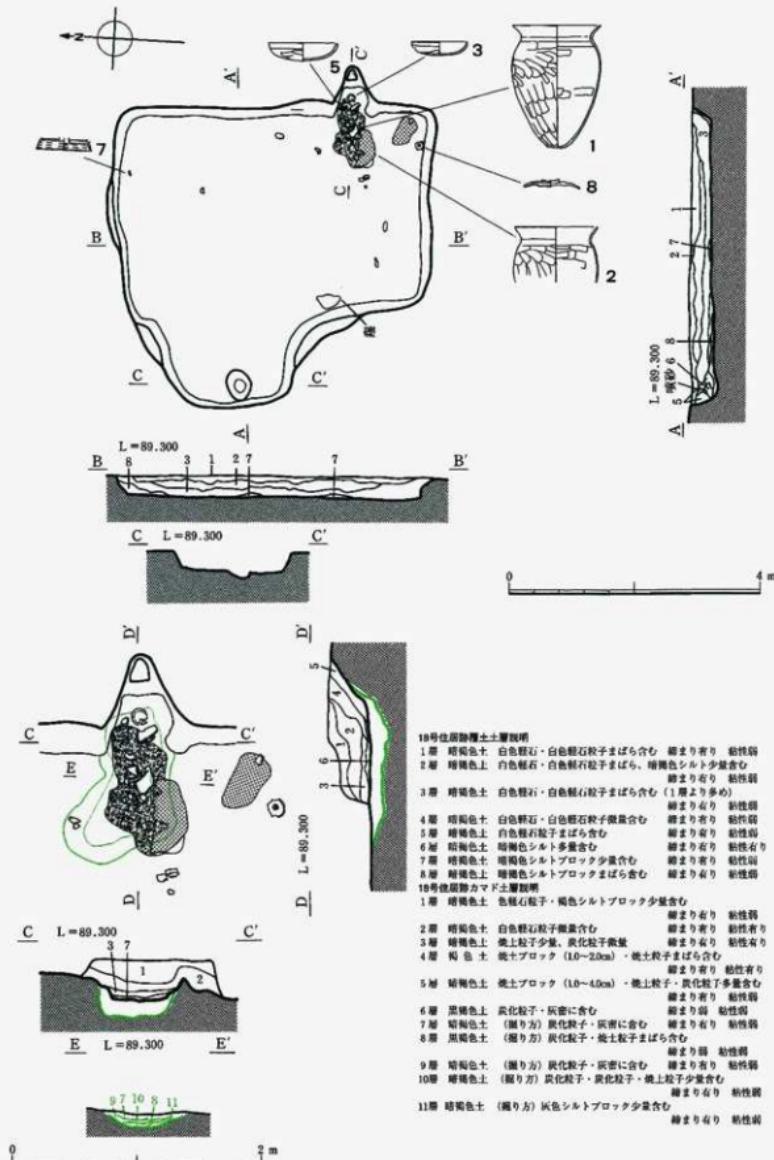


第52図 17号住居跡出土遺物

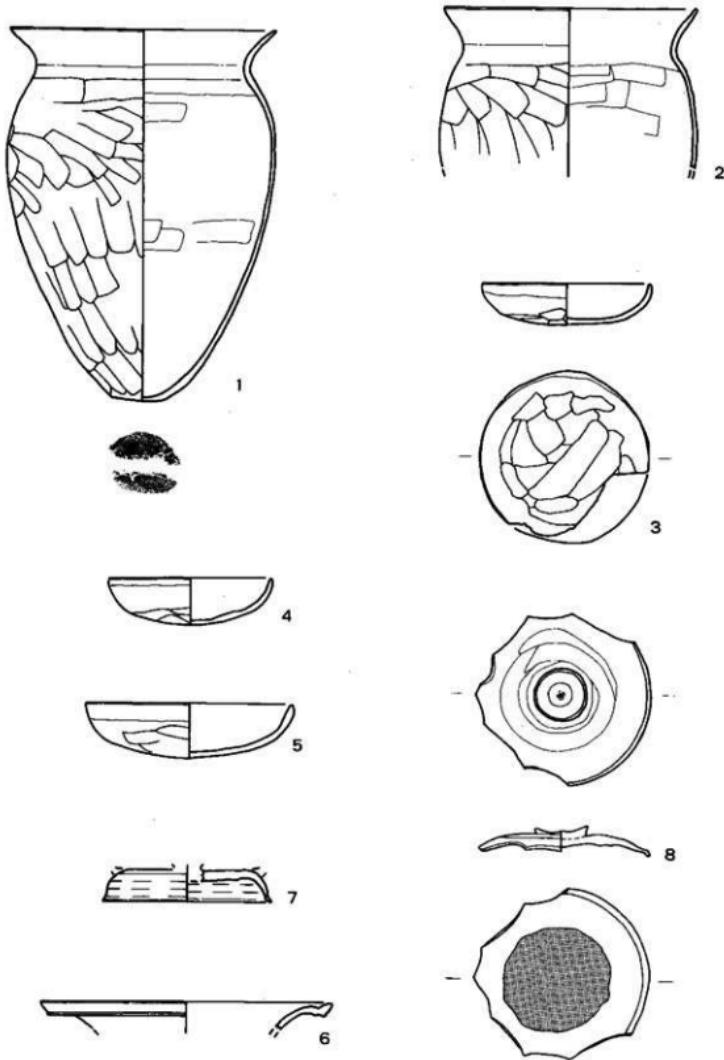
18号住居跡（挿図 53・54図、写真図版 81～83・109、遺物観察表 第25表）

位 置/T・U-10グリッドにまたがる。平面形／南北に長い長方形であるが、西側に張り出しを持つ。主 軸／N-90°-E.、規 模／東西に3.35m、張り出しを含めると4.80m、南北に5.20m。壁／45～70°の角度で立ち上がり30～40cm程度存する。床／褐色シルト層に掘り込まれ、平坦である。暗褐色土と褐色シルトブロックによって貼床され良好に維まるが、硬化面は明瞭に検出されなかった。ピット／張り出し部分の西端から、浅い円形で皿状のピットが検出されている。位置的には、出入り口にかかわるとも思われるが、周辺および底部の硬化は確認されなかった。カマド／東壁南寄りに付設される。燃焼部は広く、煙道部は狭く浅く壁外に掘り込まれる。燃焼部からカマド手前にかけておよび、カマド右脇に灰・炭化粒子の付着範囲が広がる。

遺物はカマド燃焼部からその周辺に多く、灰・炭化粒子の付着範囲とはほぼ一致する。カマド右脇の南壁の立ち上がり部分から、つまみを上にした床着の状態で、須恵器蓋転用硯が出土している。



第53図 18号住居跡



0 1 20cm

第54図 18号住居跡出土遺物

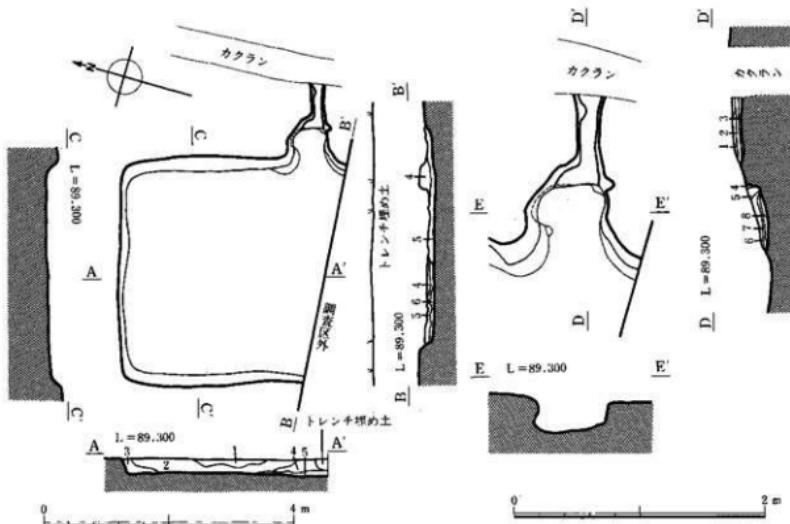
4. その他の時代および、時期不明の遺構

住居跡

12号住居跡（挿図 第55図、写真図版 67・68.）

位置/Q・R-11にまたがる。平面形／南北に長い長方形。主軸/N-74°-E。規模／東西に3.70m、南北に3.70+α m。壁／45~65°の角度で立ち上がり15~25cm遺存する。床／褐灰色シルト層に掘り込まれ、平坦である。暗褐色土と褐灰色シルトブロックによって貼床され織るが、硬化面は明瞭に検出されなかつた。カマド／東壁に付設される。燃焼部は、平面形が方形で、上方を狭く床面を広く掘り込まれる。煙道部は、浅く細長く掘り込まれている。

遺物は、土器片が数点覆土中から出土しただけであった。床面からは径2~4cmの円窓が多数出土している。



第55図 12号住居跡

12号住居跡土層説明

- 1層 褐褐色土、白色輕石粒子微量含む 硬まり有り 粘性弱
- 2層 増強色土 上：白色輕石、白色輕石粒子、灰褐色シルト少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 3層 褐褐色土 上：白色輕石粒子、灰褐色シルト少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 4層 灰褐色土、灰褐色シルトブロックまばら、炭化粒子少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 5層 黑褐色土、白色輕石粒子、灰褐色シルト少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 6層 褐褐色土、灰褐色シルトブロック多量含む 硬まり有り 粘性弱

12号住居跡カマド土層説明

- 1層 褐褐色土、灰褐色シルトまばら含む 硬まり有り 粘性弱
- 2層 増強色土、灰褐色シルトまばら、地上粒子少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 3層 黑褐色土、炭化粒子、灰褐色シルトまばら含む 硬まり有り 粘性弱
- 4層 黑褐色土、炭化粒子、灰褐色シルト少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 5層 灰褐色土、灰褐色シルト少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 6層 黑褐色土、灰褐色シルト多量、地上粒子少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 7層 黑褐色土、灰褐色シルト多量、地上粒子少量含む 硬まり有り 粘性弱
- 8層 黑褐色土、炭化粒子、灰褐色シルト、地上粒子少量含む 硬まり弱 粘性弱

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

(挿図 第56図、写真図版 84.)

位 置 / P - 7, Q - 7 グリッドにまたがる。

主 軸 / N - 9° - E. 規 模 / 桁行 2 間 (3.60 m)、梁行 2 間 (3.30m)。

形 態 / 南北棟側柱式掘立柱建物跡。

柱痕は、検出されなかった。柱間は、桁行総長12尺で6尺等間。梁行は不揃いで総長11尺、西から5尺、6尺である。

2号掘立柱建物跡

(挿図 第57図、写真図版 85.)

位 置 / P - 7 - 8, Q - 7 - 8 グリッドにまたがる。主 軸 / N - 4° - E. 規 模 / 桁行 3 間 (6.20 m)、梁行 2 間 (4.80m)。

形 態 / 南北棟側柱式掘立柱建物跡。

柱痕は、検出されなかった。柱間、桁行は不揃いで北から2.3m、7尺、2.3m。梁行は総長16尺で8尺等間である。

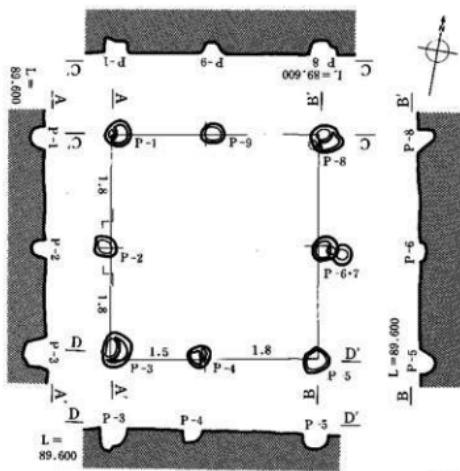
3号掘立柱建物跡

(挿図 第58図、写真図版 86.)

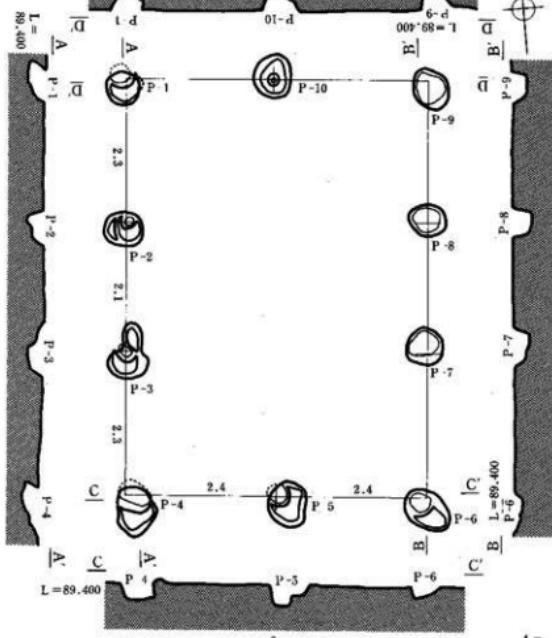
位 置 / N - 7 - 8, O - 8 グリッドにまたがる。主 軸 / N - 86° - W. 規 模 / 桁行 2 間 (4.10 m)、梁行 2 間 (3.70m)。

形 態 / 東西棟総柱式掘立柱建物跡。重複 / 北棟側を4号住居跡に切られる。また、P - 1 - 3は、埴砂によって切られている。

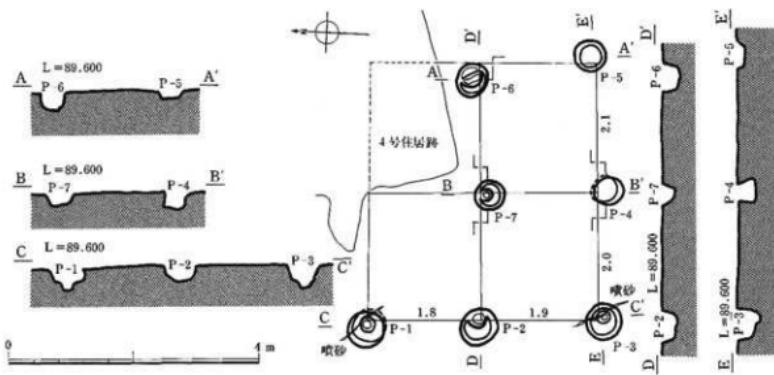
柱痕は不明瞭。柱間は、桁行梁行共に不揃いで、桁行東から7尺、2.0m。梁行北から6尺、1.9mである。



第56図 1号掘立柱跡



第57図 2号掘立柱跡



第58図 3号掘立柱跡

土坑（挿図 第59図、写真図版 3・4、）

本遺構I区検出の土坑は、4号土坑を除いて遺物が出土していない。また、9号土坑が噴砂に切られている他は、遺構との重複はなかった。このため1~3・5~12号土坑をここに一括して掲載する。

第4表・石間西塗瀬遺跡I区土坑表

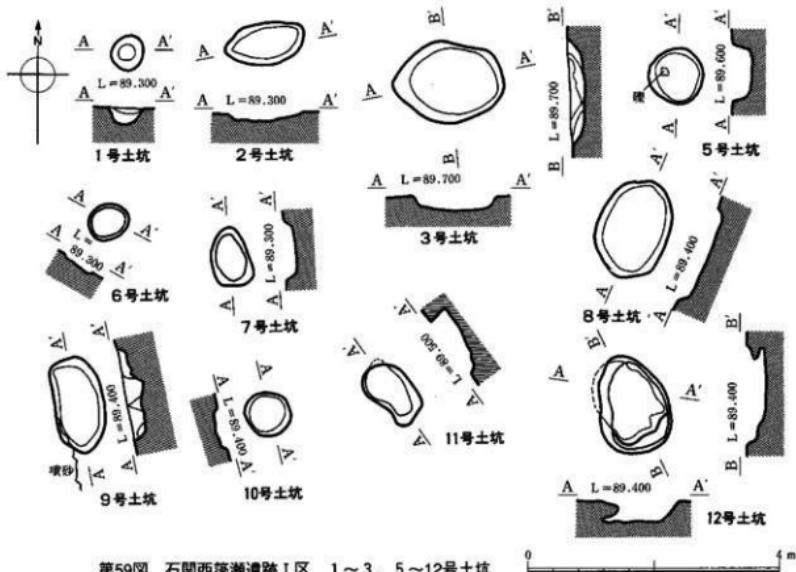
遺構名	位置	形態	長軸・短軸・深さ(cm)	主軸方向	備考
1号土坑	N-11グリッド	円形	55 50 10	N-3°-W	
2号土坑	O-10グリッド	楕円形	128 67 16	N-72°-E	底部に若干の凹凸がある。
3号土坑	Q-10グリッド	楕円形	175 132 23	N-83°-E	底部は平坦である。
5号土坑	N-8グリッド	円形	90 85 32	N-10°-W	
6号土坑	R-11グリッド	円形	65 55 6	N-59°-E	底部は平坦である。
7号土坑	S-11グリッド	楕円形	95 63 19	N-29°-W	底部は平坦である。
8号土坑	T-8グリッド	楕円形	162 112 17	N-21°-E	底部は平坦である。
9号土坑	S-9グリッド	楕円形	153 78 30	N-10°-W	遺構の南西壁を噴砂に切られる。
10号土坑	T-9グリッド	円形	70 73 12	N-67°-W	
11号土坑	P-8グリッド	不定形	107 70 32	N-33°-W	上端線よりも底部が北に伸びる。
12号土坑	S-9グリッド	楕円形	157 118 31	N-26°-W	上端線よりも底部が北西に伸びる。



3. 5号土坑全景（西から）



4. 10号土坑全景（南から）

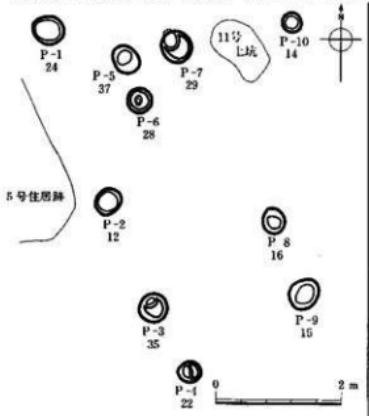


第59図 石間西築造跡I区 1~3、5~12号土坑

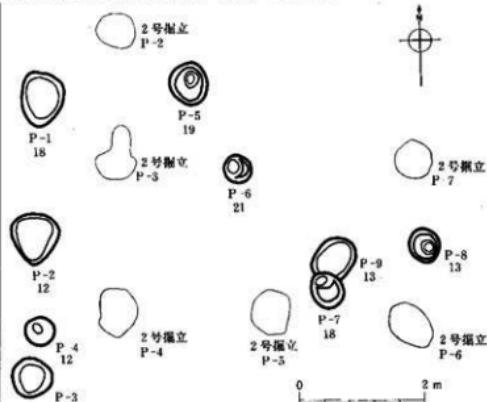


ピット群（挿図 第60・61図）、いずれのピットも柱痕は検出されず、いくつかは柱の存在を思わせる掘り方を確認するがこれ以上の展開は認められなかった。また、削平された痕跡もなく、掘立柱建物跡である可能性は見いだせなかたため、ここで一括してピット群として掲載する。

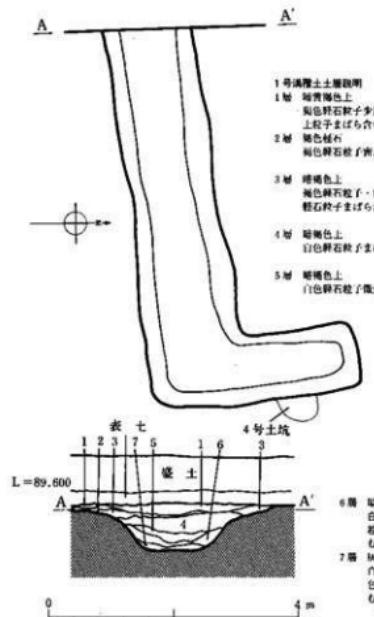
1号ピット群 O・P-8グリッドにまたがって位置する。P-1～P-4および、P-7～P-9列は、ほぼ平行に並ぶ。2号ピット群 P・Q-8グリッドにまたがって位置する。P-1～3は、2号掘立柱建物跡の柵方向に対してほぼ平行に並ぶが、覆土が異なり掘り方も浅く底部は不定形であった。



第60図 1号ピット群



第61図 2号ピット群



第62図 1号溝

溝

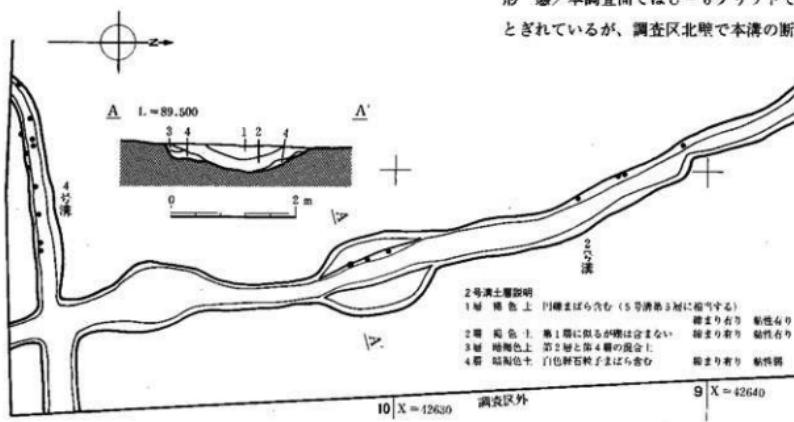
1号溝 (挿図 第62図)

位 置 / M・N - 7 グリッドにまたがる。規 模 / 幅は、1.0~1.6m。調査区壁面で確認される深さは、0.75cm。全体の規模は調査区外に伸びるため不明。形 態 / 底部は平坦で、西から東に向かってわずかに傾斜している。断面形は逆台形。東西方向へ伸び、調査区西壁から5mの地点で、北へほぼ垂直に曲がり徐々に浅くなり1.7mの地点でなくなる。表上除去の段階でも、ほぼ同位置で掘り込みが止まっていることを確認している。重複 / 4号土坑を切る。

本遺跡の遺構確認面より20~45cm上面で確認され、As-Bと思われる褐色軽石粒子を密に含む層より上から掘り込まれている。

2~5号溝 (挿図 第63・64図、写真図版110、遺物観察表第26表)

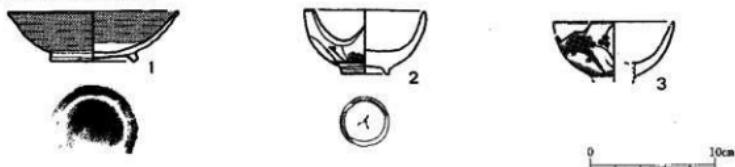
2号溝 位 置 / 調査区の東端のU・Vグリッド列、調査区を南北に縦断する。形 態 / 本調査面ではU - 6グリッドでとぎれているが、調査区北壁で本溝の断



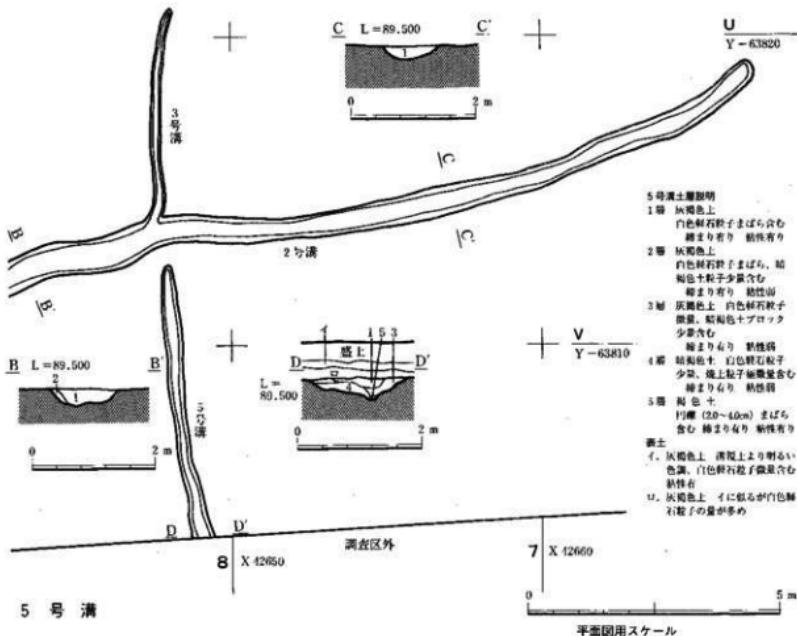
第63図 2、3、4、

面が、確認されている。また、地形の傾斜に沿って北から南へ緩やかに傾斜している。3号溝位置/T・U-8グリッドにまたがる。形態/西から東の方向へわずかに傾斜しながら伸び、東端で南にカーブしながら2号溝に合流する。また、表土堆土の段階で、5号溝と連続し2号溝に直行することを確認している。4号溝位置/U・V-11グリッドにまたがる。形態/西から東の方向へわずかに傾斜しながら伸びて、2号溝に直交する。重複/19号住居跡を切る。5号溝位置/3号溝の延長線上に位置し、U・V-8グリッドにまたがる。形態/西から東の方向へわずかに傾斜しながら調査区外へ伸びる。

これら2~5号溝は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する地形に合わせ、As-Bと思われる褐色軽石粒子を密に含む層より上から掘り込まれている。相互の重複関係は認められず、同時に存在していたものと考えられる。比較的幅が広く掘り込みも深い2・4号溝からは、土止めを目的としたものと思われる、木杭が検出されている。これは、シルト質の湿地であるこの地で、水路として溝を使用することを意識して補強したものと推測される。



第64図 2号溝流れ込み遺物



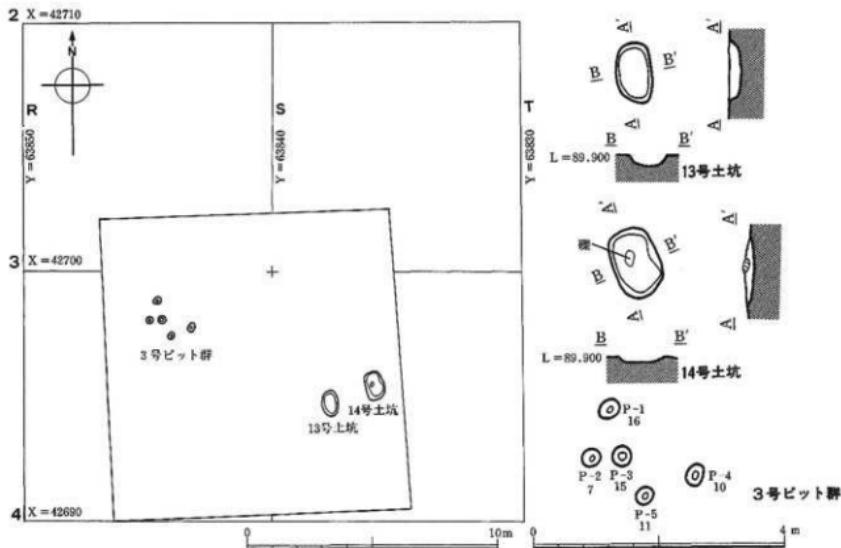
5号溝

検出された遺構と遺物 II・III区

II区（挿図 第65図、写真図版 5～7.）遺構確認面の層序はI区と同じだが、本区の方がわずかに高い位置にあり湧水はほとんどなかった。土坑2基および、小ピット群を検出する。

13号土坑 覆土は単層で、白色粒子を含む暗褐色土が堆積する。遺物は検出されなかった。14号土坑 挖り込みは浅く、平面形は隅丸方形。覆土は単層で、炭化粒子・炭化物を含み締まりは若干弱い。遺構確認面とほぼ同じ高さから円窓が出土している。まったくの自然縛で加工および、使用の痕跡は認められなかった。3号ピット群 いずれも底部は丸底で、断面形は半円形ないし半橢円形である。

III区（挿図 第66図、写真図版 8.）調査区内の軽石を除去し歯の検出に努めたが、明瞭な高まりは検出されなかった。また、それを断ち割ったが歯を盛り上げた痕跡を確認することができなかった。



第65図 石闇西塗跡II区



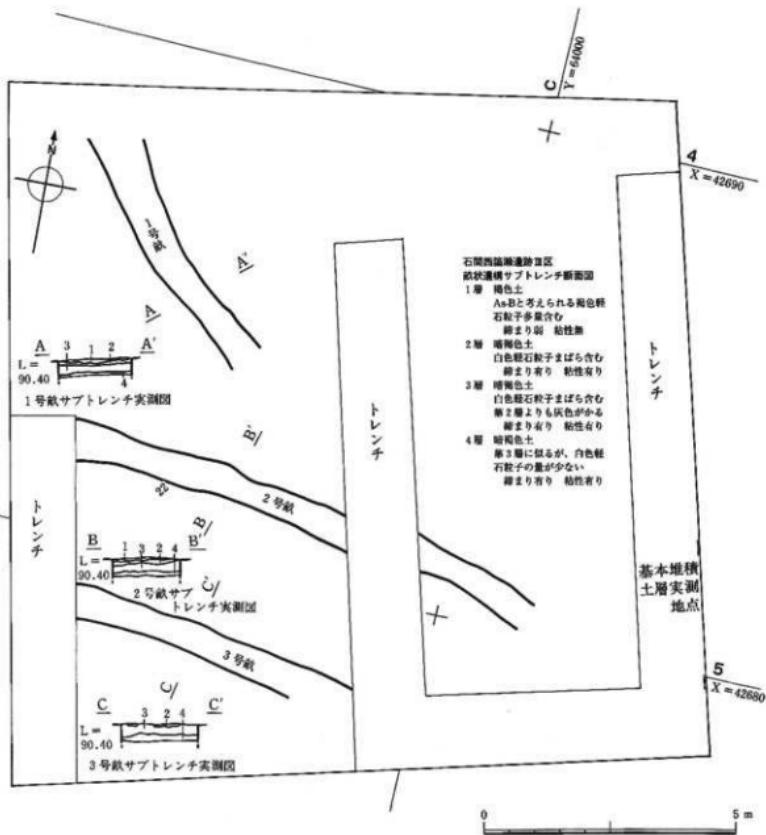
5. II区全景（北西から）



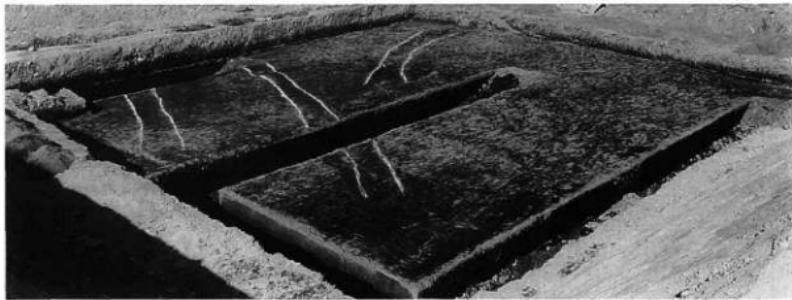
6. 13号土坑全景（北から）



7. 14号土坑全景（北から）



第66図 石関西築造跡Ⅲ区



8. Ⅲ区全景（南東から）

第5表・1号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形・成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成	位位置	
1	土器器 甕	口径 胴部 底径 器高	18.2 23.0 8.1 25.0	ほぼ完形	器形-平底。胴部は、立ち上がり口部外反するが、全体に丸みを帯び中程に最大径を持つ。口縁部は、外反して聞く。成・整形-外面・口縁部は、下から縦位にハケ目。後ヨコナデ。胴部は、上半を斜位に下半を縦位にハケ目。後部分的にハラケズリ。底部はハラケズリ。内面・口縁部は、斜位にハケ目後にヨコナデ。頭部上半を斜位、下半を横位にハケ目。	①角閃石・白色 粒子・石英等② 褐斑・10YR 3/1③微化	床着 貯蔵穴 より40 cm程度
2	土器器 甕	口径 胴部 底径 器高	(18.2) 20.7 5.9 23.3	ほぼ完形	器形-平底。胴部は、立ち上がり口部外反するが、ほぼ球形で中程に最大径を持つ。口縁部は、外反して聞く。成・整形-外面・口縁部ヨコナデ。胴部縦ぎきを斜位に廻す。胴部上方を斜位、胴部中位を斜位にそれぞれ上からハケ目。後、最大径より下位に横位のハラケズリ。胴部下方は、斜位に下から上ハケ目。底部はハラケズリ。内面・胴部上方斜位、下方横位にハケ目。	①角閃石・石英 等②褐斑・10Y R・2/2③微化	貯蔵穴 内
3	土器器 甕	口径 胴部 底径 器高	14.5 20.5 7.0 19.0	ほぼ完形	器形-平底。胴部は、直線的に聞いて立ち上がった上に半球形を伏せたような形で、下半に最大径を持つ。立ち上がり部分と、最大径部分の接合部が厚くなっている。口縁部はわずかに外反するが、済みのため一部内湾する。成・整形-外面・口縁部はヨコナデ。胴部は、わずかに下から縦位のハケ目が残る。胴部上半は縦位のハケ目、下半は所々に接合前のハラケズリが施される。下半の接合部は、縦位に粘土を強く施でつけた痕が残る。底部はハラケズリ。内面・あまり調整されず輪縫痕が若干明瞭に残る。口縁部はヨコナデ。接合部には、複数のハケ目が施される。	①白色粒子・角 閃石・石英等② 褐斑・7.5YR 4/3③微化	貯蔵穴 内およ びその 周辺
4	土器器 甕	口径 胴部 底径 器高	14.7 14.6 6.5 13.5	ほぼ完形	器形-平底。胴部、立ち上がり跡が外反しすぐに直線的に伸び、内湾し中程で最大径を持ち、頭部を生る。口縁部は外反して窪みが、済みのため一部内湾ぎみになる。成・整形-外面・口縁部は、頭部からのハケ目の後ヨコナデ。胴部は、上方を左斜めで、次に最大径部分まで右斜め下にハケ目。特に下半の接合部には、後から横位のハラケズリ。内面・口縁部はハケ目、後ヨコナデ。胴部は、ヘラテテを全体に施すが、輪縫痕も残る。下方に接合前の斜位のハケ目。	①白色粒子・赤 褐色粒子・角 閃石・長石等②褐 斑・10YR 3/4③微化	貯蔵穴 内
5	土器器 甕	口径 胴部 底径 器高	11.8 11.4 5.0 8.7	3/4	器形-平底。胴部内側して立ち上がり、上半で垂れ目を持つ。口縁部は直線的に廻る。成・整形-これまでの4点に比べると丁寧にハケ目をナデ消す。外縁・口縁部、胴部ともヨコナデ。胴部上に斜位のハケ目がわずかに残る。胴部下端、底部ともケズリ。内面・口縁部はヨコナデ。胴部中程に、横位のハケ目。底部は左回りの状態で強く擦でられ、この時の工具の跡が胴部上半にあたって擦が横位に付く。	①角閃石・石 英・白色粒子等② 灰斑・R・4/2③微化	貯蔵穴 内およ びその 周辺
6	土器器 甕	口径 体部 底径 器高	11.6 12.0 6.2 5.6	完形	器形-底部は輪台状。立ち上がり跡が外反するが、体部は内湾し丸みを帯び、口縁部がややすばまる。成・整形-外面・体部上半に斜位のハケ目、下半に縦位のハラミガキ。内面・体部に斜位のハケ目、外面より明瞭に残る。	①白色粒子・角 閃石・赤褐色粒子 等・長石等②褐 斑・7.5YR 4/1③微化	貯蔵穴 南脇 No. 7 の上
7	土器器 甕	口径 器高	15.0 4.3	3/4	器形-丸底。内湾気味に緩やかに立ち上がり、口縁部で直立する。成・整形-外面・全体にハケ目。後口縁部をヨコナデ。内面・底近くにわずかにハケ目が残る。	①白色粒子・角 閃石・褐色粒子等②に ぶい黄・7.5Y R・6/4③微化	貯蔵穴 南脇 No. 6 の下
8	土器器 高甕	口径 環部高	24.0 6.5	坏部	器形-体部は直線的に聞いて立ち上がり口縁部がわずかに内湾する。成・整形-外面・体部は密にハケ目があり、後口縁部のみヨコナデ。内面・わずかにハケ目が残るが、丁寧にヨコナデ。	①砂粒・長石・ 角閃石等②に ぶい黄・10Y R・6/4③微化	貯蔵穴 内
9	土器器 高甕			坏部片	器形-見込み部中央は厚く、わずかに盛り上がる。体部は直線的に聞く。成・整形-底部の接合部分を、右回りの状態にハケ目。	①白色粒子・角 閃石・長石等②に ぶい黄・10 YR・6/4③微化	No. 10 の上
10	土器器 高甕			坏部下子	器形-体部はわずかに内湾して聞く。成・整形-底部の接合部を右回りの状態にハケ目、後に縦部分を横位のハラケズリ。	①白色粒子・角 閃石等②に ぶい黄・10Y R・6/4③微化	床着
11	土器器 高甕	口径 环部高	(21.9) 7.2	坏部 1/3存	器形-体部は、直線的に聞いて立ち上がり口縁部は、わずかに外反する。底部と体部の接合部の後は外に張り出す。成・整形-外面・体部は底部との接合点、底部は舞部との接合点に、それぞれハケ目が入る。内面・体部にハラミガキが施される。	①褐色粒子・白 色粒子・石英・ 角閃石・長石等 ②にぶい赤・5 YR・5/5③微化	貯蔵穴 内

12	上部器 高坏	底径 脚部高	16.6 8.8	脚 部	器形-柱状部は下方に広がり、縫部は外方へ大きく広がる。成・整形-外面・柱状部は斜位のハケ目、後に縫部をヨコナデ。内面・柱状部はシボリ。縫部は、同心円状にハケ目、後に縫部に近いほど丁寧にヨコナデ。	①白色粒子・角 閃石・石英等② にぶい赤褐・5 YR・5/4③酸化	貯藏穴 内
13	上部器 高坏	底径 脚部高	14.6 8.3	脚 部	器形-柱状部は下方に広がるが、基部はわずかにすぼまりエンタシス状。縫部は外方へ大きく広がる。成・整形-外面・柱状部は縫位のヘラミガキ。縫部は放射線状にヘラミガキが施される。内面・同心円状にハケ目、後に縫部に近いほど丁寧にヨコナデ。	①角閃石・白 色粒子・赤褐色粒・ 石英等②7.5 Y R・7/6③酸化	貯藏穴 東縁邊 部

第6表・5号住居跡遺物観察表

番 号	器 種	法量 (cm)	遺存率	器 形 、 成 ・ 整 形 の 特 徴	①粘土②色調 ③焼成	位 置	
1	土器器 窓	胴部	24.8	断部片	器形-縫部は、ほぼ球形である。成・整形-外面・縫部上半に縫位から斜位にハケ目、しかし方向は不統一で横位に入る箇所もある。下半は、横位のヘラケズリ。内面・横位から斜位の不統一なヘラナデ。	①角閃石・砂 岩(径 5 ~ 4 cm) 長石等②にぶい 黄褐・7 / 4 · 10 Y R · 5/4③酸化	炭化材 下
2	土器器 窓	口径 胴部 底径 器高	14.5 14.5 7.0 11.7	完 形	器形-平底で縫部との境目は明瞭でない。縫部は内済して立ち七がり中程に最大径を持つ。口縫部は外反して開く。成・整形-外面・口縫部はヨコナデ、縫部上半は斜位のハケ目が残り、下半は横位のヘラケズリ。内面・口縫部はヨコナデ。	①砂 磨・角 閃 石・赤褐色粒子 等②7 / 6 · 7.5 Y R · 5/4③酸化	炭化材 層中
3	土器器 窓	口径 胴部 器高	13.3 13.5 10.6	ほぼ完形	器形-丸底、内済して立ち上がり中程に最大径を持つ。口縫部は外反して開く。成・整形-外面・口縫部はヨコナデ、縫部上半は斜位のハケ目が残り、部分的にヨコナデしきらに幅 2 ~ 3 mm 程の強くぬけつけた疵が見られる。縫部下半から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面・口縫部はヨコナデ、縫部は下半を中心にはヘラナデが施されている。	①角閃石・白 色粒子等②橙 6 / 6 · 10 Y R ③焼化	覆土中
4	土器器 窓	口径 体部 底径 器高	11.6 11.9 3.2 6.2	ほぼ完形	器形-底部は体部との境目が明瞭ではない。しかし平凹面を有し安定して立つ。体部は内済して立ち上がり上半で最大径を持つ。口縫部は外折して、直線的に開く。成・整形-外面・口縫部はヨコナデ、体部下半から底部にかけてヘラケズリ。内面・口縫部はヨコナデ、体部はヘラナデ。	①白色粒子・赤 褐色粒子・砂 岩・長石等②に ぶい黄褐・10 Y R · 7 / 4 · 10 Y R · 5/4③酸化	炭化材 層中
5	土器器 窓	口径 胴部 器高	11.2 11.4 6.1	2 / 3存	器形-底部は丸底、体部は内済して立ち上がり。上半で最大径を持つ。口縫部は外折して、内湧気味に開く。成・整形-内外縫とも赤彩(赤褐色 にぶい橙・5 Y R · 7 / 4) されている。外縫・口縫部から体部上半にかけてヨコナデ、体部下半から底部にかけてはヘラケズリ。内面・全体にヨコナデ。	①角閃石・白 色粒子・赤褐色 粒子・石英等②浅 黄褐・10 Y R · 8 / 3③焼化	炭化材 層中
6	土器器 窓	口径 底径 器高	19.7 15.6 13.6	ほぼ完形	器形-体部は直線的に開き口縫部に至る。また窓部底部との接合部の縫は外に張り出す。柱状部は下方に広がるが基部はわずかにすぼまりエンタシス状。縫部は外方に広がるが、成・整形-外面・全体に良くヨコナデされているが、縫部と縫部の接合部分にむちかな縫位のハケ目が残る。内面・窓部・縫部は良くヨコナデされている。窓部の底部と体部の接合部分に、強く擦づけた痕が残る。縫部はシボリ。	①角 閃 石・砂 岩・長石等②に ぶい黄褐・10 Y R · 7 / 3③酸化	炭化材 層中
7	土器器 窓	底径 脚部高	13.8 7.2	1 / 2	器形-体部は内湧気味に立ち上がる。底部と体部の接合部の縫は外に張り出す。柱状部は下方に広がり、縫部は内湧気味に大きく外方に広がる。成・整形-外面・全体にハケ目の後縫部の端部をヨコナデ。内面・柱状部はシボリ。縫部はハケ目の後ヨコナデ。	①角閃石・白 色粒子・赤褐色 粒子等②に ぶい黄褐・10 Y R · 7 / 4③酸化	炭化材 層中
8	土器器 窓	口径 窓部高	20.7 7.2	坏 部	器形-底部は上方へ反って接合点に至る。体部は直線的に広がり、口縫部で外反する。接合部の縫は外に張り出す。成・整形-外面・体部下端および、底部中央部に縫位のハケ目の後、口縫部から体部上半にかけて良くヨコナデされる。底部縫部はヘラケズリ。内面・ヨコナデした後、ヘラミガキ。	①白色粒子・石 英等(いずれも 5 ~ 5.5 cm 程度 の粒を含む)②赤 色・10 Y R · 4 / 6③酸化	炭化材 層中
9	上部器 高坏	口径 坏部高	20.0 5.3	坏 部	器形-体部は外反気味に立ち上がるが、歪みのため口縫部の一端がわずかに内済する。接合部の縫は外に張り出す。成・整形-接合部の縫から口縫部まで内外縫ともヨコナデされ、縫部との接合部にハケ目が残る。	①角 閃 石・白 色粒子・石英等② にぶい黄褐・10 Y R · 7/4③酸化	炭化材 層中
10	土器器 窓	口径 坏部高	18.2 6.0	坏 部	器形-見込み部は、中央部ほど肉厚で、体部は直線的に開く。両者の接合部の縫は外に張り出す。成・整形-底部外間にハケ目、後接合部の縫から口縫部までの内外縫をヨコナデ。	①角 閃 石・白 色粒子・石英等② にぶい黄褐・10 Y R · 7 / 2③酸化	炭化材 層中
11	土器器 窓	口径(17.8) 坏部高	3.5	坏 部	器形-体部は内湧気味に上方に反り、屈曲して体部に歪る。体部は外反して開き、口縫部に至る。成・整形-外面・体部上半から接合部までヘラナデした後、口縫部はヨコナデ、接合部を横位のヘラナデを施している。内面・わずかにハケ目が残るが、全面にヘラミカシされた口縫部をヨコナデ。	①白色粒子・石 英等(いずれも 5 ~ 5.5 cm 程度 の粒を含む)②に ぶい黄褐・7.5 Y R · 6/4③酸化	炭化材 層中

12	土師器 高环	底径 7.7 唇部高 15.4	舞 部	器形－柱状部は下方に広がる。底部は内湾気味に大きく外方に広がる。 成・整形－外面・柱状部は縦位のヘラミガキ。底部は内側から放射状のハケ目後の後、端部をヨコナダ。内面・柱状部はシボリの後ヘラケズリ。底部はヨコナダ。	①角閃石・白色 粒子等②灰・黄 褐色・10 Y R 5/2 ③酸化	炭化材 層中
13	土師器 高环	底径 7.4 唇部高 15.4	舞 部	器形－柱状部は下方に広がる。底部は大きく外方に広がる。 成・整形－外面・底部は内側から放射状にハケ日。端部をヨコナダ。内面・柱状部はシボリの後ヘラケズリ。底部はヨコナダ。	①角閃石等をわ ずか含む②にぶ い黄褐色・10 Y R・7/4 ③酸化	炭化材 層中
14	土師器 高环	底径 7.7 唇部高 12.0	舞 部	器形－柱状部は下方に広がる。底部は外方に広がる。 成・整形－外面・底部は縦位に、底部は放射状にヘラミガキ。 内面・柱状部はシボリの後ヘラケズリ。底部はヨコナダ。	①石英・角閃石 等②灰褐色・5 Y R 6/4 ③酸化	炭化材 層中
15	上舞器 脚付彌	口径 16.0 唇部 15.5 器高 10.5	壳 部	器形－脚部は内側して立ち上がり上半で最大径を持つ。口縁部は外折し、外反して開く。 成・整形－外面・口縁部は良くなじみでヨコナダ。底部は上半を部分的にヨコナダ。	①角閃石・白色 粒子・石英等② 黄褐色・7.5 Y R 7/6 ③酸化	炭化材 層中
16	土師器 堆	口径 9.2 唇部 10.4 器高 8.8	ほぼ完形	器形－丸底。底部は内湾して立ち上がり下半で最大径を持つ。口縁部は内湾気味に開く。 成・整形－外面・底部と脛部にハケ目が残るが、全体に良くなじみ消されている。 口唇部はヨコナダ。内面・脣部は下半だけをヘラナダ。口縁部はヨコナダ。	①角閃石・石英 等②黄褐色・2.5 Y R・8/3 ③ 酸化	炭化材 層中

第7表・6号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形、成、姿形の特徴	①胎土②色調 ③焼成	位置
1	土師器 壳	口径 30.8 底径 6.0 器高 35.6	ほぼ完形	器形－底部は輪台状に中央部が窪む。脣部ははば直線的に立ち上がり、内湾し中程で最大径を持つ脣部に至る。口縁部は上半を外側に折り返し、その部分が内側へ凹む。 成・整形－外面・口縁部は内側に立ち上がり部分に下からのハケ日の後、口唇部から脣曲部にかけてヨコナダ。脣部は上半に所々ハケ目が残り、下部は脣位のヘラケズリが施される。内面・脣部は下半に横位のハケ日の後、口唇部から脣曲部にかけてヨコナダ。脣部は上半にハケ目が残る。	①石英・赤褐色 粒子・白色粒子 等②灰褐色・10 Y R・8/3 ③酸化	脣部下 半まで 脣下に 埋没
2	土師器 壳	脣部 37.3 底径 8.8	脣部下 半・底 部	器形－平底。脣部は立ち上がり脣外反するが、全体に丸みを帯びる。 成・整形－底部はヘラケズリ。脣部は全体にハケ日の後、所々ヘラミガキを施している。内面・ハケ日は脣部に施される。	①角閃石・石 英・赤褐色粒子 等②灰褐色・2.5 Y R・7/4 ③酸化	第2層 中
3	土師器 壳	口径 17.8	口縁部	器形－口縁部は直線的に立ち上がり、「く」の字状にわずかに屈曲し口唇部で外反する。 成・整形－外面は下からの、内面は横位のハケ日の後、口唇部から脣曲部にかけてヨコナダ。	①角閃石・石 英・赤褐色粒子 等②灰白・2.5 Y R・8/2 ③酸化	第2層 中
4	土師器 壳	口径 (26.2) 底径 (8.5) 器高 28.0	1/3存	器形－底部は平底だがわずかに中央部が窪む。脣部は立ち上がり脣外反し、直線的に開いて下半の接合部で屈曲する。脣曲部から内湾し中程に最大径を持つ脣部に至る。口縁部は外反して開く。 成・整形－外面・口縁部は上から脣部を構成するハケ日。後、口縁部はヨコナダ。脣部中程は脣位のハケ日の後横位に強く擦り抜ける。下半の接合部は上から強く擦りつけた後脣曲部の外に張り出し気味になつたところを横位にヘラケズリ。 内面・脣部上半と下端を横位のヘラナダ。	①角閃石・長 石・雲母等②に ぶい黄褐色・10 Y R・7/3 ③酸化	第2層 中
5	土師器 壳	脣部 (26.5) 底径 7.8	脣部下 半・底 部	器形－底部は輪台状。脣部は内湾気味に立ち上がり、最大径に至る。全体に丸みを帯びる。 成・整形－外面・脣部中程は上からのヘラナダ。接合部は横位のヘラナダ。下方は下からのハケ日。内面・脣部下方に巴状のハケ日、接合部の黏土で覆われた焼口に細いハケ甘が入る。	①白色粒子・角 閃石・赤褐色粒子 等②明黄褐色・10 Y R・7/6 ③ 酸化	第2層 中
6	土師器 壳	口径 (17.6) 脣部 (16.0) 底径 6.8 器高 14.9	1/3存	器形－底部は輪台状。脣部は内湾気味に立ち上がり上半で最大径を持つ。 成・整形－外面・口縁部はヨコナダ。脣部上半は脣位のハケ日の後、下半は横位のハケ日の後。さらに上半から下半にかけて部分的にナダ。 内面・口縁部はヨコナダ。脣部は横位のハケ日の後、ヨコナダ。脣部は全面に横位のハケ日が密に施される。	①白色粒子・角 閃石・雲母等② にぶい黄褐色・10 Y R・7/4 ③ 酸化	床着
7	土師器 壳	口径 15.2 脣部 24.9 底径 6.7 器高 29.3	ほぼ完形	器形－底部は輪台状。脣部は直線的に開き、下半の接合部でわずかに屈曲する。脣曲部から内湾し中程に最大径を持つ。口縁部は外反気味に開く。 成・整形－外面・口縁部はヨコナダ。脣部上半は脣位のハケ日の後、脣部中程はヘラナダ。下方の接合部は脣位のハケ日の後、ヨコナダ。脣部は全面に横位のハケ日が密に施される。	①白色粒子・石 英・角閃石等② 灰褐色・5 Y R 6/6 ③酸化	第2層 中

8	土師器 坏	口径 (16.6) 器高 6.0	2/3存	器形 - 丸底。体部は内湾し、口唇部がわずかに外反する。成・整形 - 外面・底部から体部にかけてヘラケズリの後、口唇部はヨコナデ。	①白色粒子・角閃石・赤褐色粒子・石英等②灰質地・10 Y R・6 / 2③焼化	床 着
9	土師器 高坏	口径 18.8 环部高 6.3	坏 部	器形 - 体部はわずかに内湾して立ち上がる。成・整形 - 外面・体部および底部はハラナデの後、口唇部はヨコナデ。内面・口唇部をヨコナデした後、体部から口唇部にかけてヘラミガキ。	①角閃石・赤褐色粒子・石英等②にぶい黄鐵・10 Y R・7 / 4③焼化	床 着
10	土師器 高坏	口径 20.1 环部高 6.3	坏 部	器形 - 体部は直線的に開き、口唇部は先端になりわずかに内湾する。成・整形 - 体部内外面ともヨコナデ。	①角閃石・白色粒子・石英・砂隕等②にぶい黄鐵・5 Y R・7 / 4③焼化	床 着
11	土師器 高坏	口径 20.0 环部高 6.3	坏部の み2/3存	器形 - 体部は直線的に開き、口唇部は先端になりわずかに内湾する。成・整形 - 外面・体部は下からのハケ目の後、口唇部をヨコナデ。环部は放射状のハケ目の後、体部との接合時にナデ。内面・体部下半の接合部にハケ目の後、体部上半はヨコナデ。	①角閃石・白色粒子・石英等②にぶい黄鐵・10 Y R・7 / 4③焼化	床 着
12	土师器 高坏	口径 21.0 环部高 12.0	坏部の み2/3存	器形 - 体部はほぼ直線的に開き、口唇部はわずかに内傾する。成・整形 - 外面・体部下半は模倣、环部底部は凹状にハケ目の後、口唇部はヨコナデ。内面・体部全体をヨコナデ。	①角閃石・白色粒子・石英等②にぶい黄鐵・10 Y R・7 / 4③焼化	第2層 中
13	土师器 高坏	口径 18.3 环部高 5.5	坏部の み2/3存	器形 - 壁部の底と体部の接合部の縫があり明瞭ではない。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。成・整形 - 外面・体部は内湾気味でヨコナデし、接合した後接合部を中心にハラナデし、体部下半をヘラミガキ。内面・ヨコナデの後、ヘラミガキ。	①白色粒子・石英・角閃石等②明赤褐・2.5 Y R・5 / 6③焼化	第2層 中
14	土师器 高坏	口径 19.6	坏部の み1/2存	器形 - 体部は、直線的に開いて立ち上がり、中にわずかに外反し、口唇部で内湾する。成・整形 - 外面・环部底部は放射状に、体部は下からハケ目の後、口唇部をヨコナデ。内面・体部をヨコナデし、接合部を中心にハケ目。	①角閃石・白色粒子・石英等②にぶい黄鐵・1.5 Y R・6 / 4③焼化	床 着
15	土师器 高坏	口径 20.3 环部高 16.7	2/3存	器形 - 口縁部は大きく外反する。环部の縫の部分は、外方へ突帯を造り出している。柱状部は下方に広がり、脛部は二段に分かれ大きく広がり、縫の部分は外に張り出る。成・整形 - 外面・环部底部および柱状部に柱状のハケ目、环部底部は複数のハケ目の後、部分的に横位のハケ目。口縁部・突帯部および脣部ヨコナデ。内面・环部の体部と底部の接合部を強く擦いでつける全体をヨコナデ。柱状部はシボリ。脣部の縫部分にハケ目、縫部をヨコナデ。赤彩・外面部および、环部内面(赤彩色調/赤褐色)・2.5 Y R・4 / 8)。	①角閃石・白色粒子・石英等②浅黄鐵・10 Y R・8 / 4③焼化	床 着
16	土师器 高坏	口径 22.3 环部高 5.8	坏 部	器形 - 体部は直線的に開き口縁部で大きく外反する。环部底部と体部の接合部に後付けの突帯がある。成・整形 - 外面・环部の体部および、底部にハケ目の後、口縁部および、接合部突帯をヨコナデ。内面・体部の接合部を中心にハケ目の後、口縁部をヨコナデ。赤彩・环部内外面。(赤彩色調/赤・10 R・4 / 8)。	①角閃石・白色粒子・石英等②にぶい黄鐵・10 Y R・7 / 4③焼化	床 着
17	土师器 高坏	口径 19.6 环部高 7.5	坏 部	器形 - 体部は丸みを帯び、口縁部は外折する。成・整形 - 下半を中心にハケ目、口縁部はヨコナデ。赤彩・环部内外面。(赤彩色調/赤・10 R・4 / 8)。	①角閃石・白色粒子・云母等②浅黄鐵・10 Y R・8 / 3③焼化	床 着
18	土师器 高坏 または 脚付壺	底径 13.0 脚部高 5.0	脚 部	器形 - 上方で外折し、「ハの字」状に開く。环部との接合部には、ほぞが残る。成・整形 - 脚部下端をヨコナデ。	①白色粒子・角閃石・石英等②にぶい黄鐵・7.5 Y R・6 / 4③焼化	床 着
19	土师器 高坏 または 脚付壺	底径 11.0 脚部高 5.8	脚 部	器形 - 「ハの字」状に開く。成・整形 - 内外面ともハケ目の後、下端をヨコナデ。赤彩・外表面。(赤彩色調/赤・10 R・5 / 6)。	①角閃石・白色粒子・石英・角閃石等②灰白・10 Y R・8 / 2③焼化	壁上中

第8表・7号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	遺存率	器 形 、 成 ・ 整 形 の 特 徴		位 置
				①崩十2色調 ②焼成	①角閃石・白色粒子・石英等②にぶい黄鐵・10 Y R・7 / 3③焼化	
1	土师器 壺	口径 (22.2) 底部 6.6	1/5存	器形 - 底部は中央部がへこむが明瞭な輪台状は呈さない。体部は全体に丸みを帯びる。成・整形 - 外面・体部下半の接合部をナデ。	①角閃石・白色粒子・石英等②にぶい黄鐵・10 Y R・7 / 3③焼化	第1層 中
2	土师器 壺	口径 13.8 器高 3.7	3/4存	器形 - 丸底。体部の立ち上がりは緩やかで、口縁部が内湾する。成・整形 - 外面・底部から体部下半をヘラケズリの後、口縁部をヨコナデ。内面・体部上半をヨコナデ。赤彩・外表面。(赤彩色調/赤・10 R・7 / 6)。	①白色粒子・石英・角閃石等②灰白・7.5 Y R・7 / 6③焼化	No. 3 の上

3	上部器 环	L径 底径 等高	13.3 3.3 5.0	ほぼ定形	器形 - 底部は明瞭ではないが平らな面を持つ。体部上方で内溝し、口縁部は直立する。成・整形 - 内外面とも特に口縁部を丁寧にヨコナデ。素彩・内外面(赤色調/赤・10R・5/6)。	①角閃石・白色 粒子等②後青 緑・10YR 8/4③酸化	No.2の 下、No. 4の上
4	土師器 高环	L径 环底径 环部高	20.2 11.5 7.0	环部のみ ほぼ定形	器形 - 体部は直線的に開き口縁部でわずかに内溝する。成・整形 - 外面、环部底部から体部にかけてナデ、口縁部はヨコナデ。内面・体部全体にヨコナデ。素彩・内外面(赤・10R・5/6)。	①角閃石・石 英・白閃石等② 浅黄緑・7.5 Y R・8/4③酸化	No.3 の下、 床着
5	土師器 高环	L径 环底径 环部高	20.6 11.7 6.7	环部のみ ほぼ定形	器形 - 体部は直線的に開く。成・整形 - 外面、体部下半は巻位のハケ目、後口縁部をヨコナデ。环部底部は放射状にハケ目、後端部をハラケズリ。内面・体部上半をヨコナデ。	①角閃石・白色 粒子・石英等② に赤・黄・7.5 YR・7/3③酸化	床 着

第9表・11号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①粘土②色調 ③焼成	位置
1	土師器 壺	L径 (21.6)	口縁部分	器形 - 口縁部は直線的に開く。成・整形 - 外面、壺部から口縁部下半にかけて強く擦でつけた後、ヨコナデ。内面・口縁部はヨコナデの後、下半をハラミガキ。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒 子等②に赤・黄 ・7.5 YR 5/4③酸化	第2層 中
2	土師器 瓶	L径 (19.5)	口縁部分	器形 - 口縁部は折り返される。成・整形 - 外面、口縁部を折り返した後指で押さえつける。内面・横位のハケ目。	①白色・灰・角 閃石・赤褐色粒 子等・赤紫灰・2, 5 YR・4/1 ③酸化	床 着
3	土師器 高环	L径 (13.7)	断面部	器形 - 剥離部は大きく外方に開く。成・整形 - 剥離部は内外面ともヨコナデ。	①角閃石・白色 粒子等②に赤 ・黄・10YR 7/3③酸化	床 着

第10表・19号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①粘土②色調 ③焼成	位置	
1	土師器 壺	口径 底径 等高	16.6 24.5 24.5	3/4#	器形 - 底部は輪台状を呈する。壺部は立ち上がり斜面反するが、内溝気味になり中央に最大径を持つ。口縁部は外反気味に開く。成・整形 - 外面、口縁部は下からのハケ目の後ヨコナデ。壺部上半と下からのハケ目の後ナデ。接合部は最大径部分あたりを念入りに斜め下に難なハケ目。その後最大径部分よりやや下方を横位にケズリ。下端には接合前に難位のハケ目。底部は中央の瘤みに圧強に強く擦でつける。内面・口縁部はヨコナデ。壺部内面は特に上半を丹念にナデす。	①白色粒子・角 閃石・石英等② に赤・黄・10 YR・7/4③ 酸化	床 着
2	土師器 壺	壺部 底径	(26.0) 7.1	1 2存	器形 - 平底。壺部は立ち上がり斜面反するが、全体に丸みを帯びてはだみ最大径を持つ。成・整形 - 外面、壺部下半の接合部を中心にして横位に強く擦でつけた後、横位にケズリ。底部はハラケズリ。内面・上半は縮かい、底部付近は細いハケ目がそれぞれ横位に現れる。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒 子等②に赤・黄 ・10 YR 6/3③ 酸化	床 着
3	土師器 壺	口径 壺部	17.2 19.4	ほぼ定形 底部を欠く	器形 - 剥離部は直線的に開き、下半で内溝し最大径を持つ。上半は丸みを帯びる。口縁部は直線的に開く。成・整形 - 外面、口縁部はヨコナデの後下からのハケ目の後、瘤部から下へのハケ目の後、全体を横位のハケ目。内面・口縁部はヨコナデ。剥離部上半はハケ目、下半は斜位にナデす。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒 子等②に赤・黄 ・10 YR 7/3③ 酸化	床 着 堆 位
4	土師器 壺	L径 剥離部 等高	16.2 18.4 18.1	ほぼ定形	器形 - 丸底。壺部は丸みを帯び、上半に最大径を持つ。口縁部はわざかに外反して開く。成・整形 - 外面、斜位のハケ目の後、ヨコナデ。壺部は巻位から斜位のハケ目の後、接合部の疊り上がった部分を横位に強く擦でつける。内面・口縁部はヨコナデ。剥離部上半はハケ目、下半は斜位にナデす。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒 子・石英・白色 針状粒等②に 赤・黄・10 Y R・7/2③ 酸化	床 着
5	土師器 壺	口径 壺部	15.5 16.9	2.3存 底部を欠く	器形 - 剥離部はほぼ球形で中程に最大径を持つ。口縁部は外反して開く。成・整形 - 外面、剥離部上半は斜位のハケ目の後、上半の所々および、中程から下半の接合部にかけて工具を嵌めて暫に入りに横位にハケ目。口縁部は下から斜位のハケ目の後、ヨコナデ。内面・剥離部上半は横位のハケ目、下半は斜位にナデす。	①白色粒子・角 閃石・赤褐色粒 子・石英・白色 針状粒等②に 赤・黄・10 Y R・7/4③ 酸化	床 着
6	土師器 浅鉢	口径 等高	19.7 6.2	ほぼ定形	器形 - 丸底だが安定している。体部は内溝して立ち上がり、口縁部は上方につまみ出される。成・整形 - 外面、底部から体部にかけてハラケズリの後、口縁部はヨコナデ。内面・口縁部をヨコナデ。	①白色粒子・角 閃石・赤褐色粒 子・石英・白色 針状粒等②に 赤・黄・10 Y R・7/4③ 酸化	床 着

7	土師器 盤		口縁部片	器形-口縁部は折り返されている。成・整形-外面・口縁部は折り返した部分を指で押さえつけ、口唇部はヨコナデ。内面・横位から斜位のハケ目の後、口唇部をヨコナデ。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒子等②にぶい黄 緑・10YR・7/3 ③液化	床 着	
8	土師器 盤	底径	5.5	底部片	器形-半孔式。体部は直線的に開く。成・整形-外面・所々撫でられる。内面・密なハケ目。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒子等②にぶい黄 緑・10YR・7/4 ③液化	覆土 2 層中
9	土師器 高環	LJ径 (15.5) 環部高 5.2	1/3存	器形-环部は接合部に明瞭な縞を持たず、体部は緩やかに内凹して開く。脚部柱状部は下方に止まり、根部はさらにも広がる。成・整形-外面・环部は体部との接合部を下から、脚部との接合部を内側からばら状にハケ目の後、口縁部をヨコナデ。脚部柱状部は縦位のヘラミガキ。内面・环部接合部を中心にはハケ目の後、口縁部をヨコナデ。柱状部はシボリ。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒子等②にぶい黄 緑・10YR・7/4 ③液化	床 着	
10	土師器 高環	直径 13.3 脚部高 8.1	脚部のみ	器形-柱状部は下方に広がり、根部は外方に大きく広がる。成・整形-外 面・柱状部はハケ目の後、縦位のヘラケズリ。根部は縦位をヨコナデ。内 面・柱状部はシボリ。根部はハケ目の後縦部をヨコナデ。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒子等②にぶい黄 緑・10YR・7/4 ③液化	床 着	
11	土師器 脚付盤	脚部	12.3	裏部のみ	器形-脚部裏部は上半に最大径を持ち口縁部は外反して開く。成・整形-外 面・脚部は所々ハケ目、脚部との接合部は密にハケ目が施される。内 面・裏部は底部と脚部の接合部をナデ、上半はハケ目。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒子等②にぶい黄 緑・10YR・7/4 ③液化	床 着
12	土師器 壇	口径 10.1 脚部 高さ 8.2 9.1	ほぼ完形	器形-丸底。脚部は扁平球形を呈する。口縁部は直線的に開き、口唇部が わずかに内凹する。成・整形-外面・颈部を境に、脚部は上から、口縁部 は下から縦位のハケ目。口縁部はヨコナデ。	①角閃石・白色 粒子を含む②明 石尾・10YR・ 7/2 ③液化	床 着	
13	須恵器 壇カ		口縁部片	繊維波状文と沈線文が平行に施される。	①暗灰色粒子等 ②灰・N・6/③ 達元堅致	覆土中	

第11表・4号土坑遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	遺存率	器 形 、 成・整 形 の 特 徴	①胎土②色調 ③焼成	位 置
1	土師器 壇	口径 23.5 脚部 (23.9)	1/3	器形-脚部下半は直線的に立ち上がり、上半は内凹し、脚部中程に最大径 を持つ。口縁部は外反して開く。成・整形-外面・口縁部はヨコナデ。脚 部は上方より縦位から斜位にハケ目。後部分的に横位のハケ目。内面・脚 部中程を下から斜位にヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	①角閃石・白色 粒子等②にぶい 黄緑・7.5YR・7/4 ③液化	覆土中
2	土師器 壇	口径 (17.1) 脚部 (24.4)	口縁～ 脚部	器形-脚部は良く張り、口縁部は外反して開く。成・整形-外面・口縁部 はヨコナデ。脚部は上から縦位のハケ目、脚部を部分的に横位のハケ目。 内面・口縁部はヨコナデ。脚部は横位のハケ目。後縦位にヘラナデ。	①暗灰色粒子・ 角閃石等②黄 緑・2.5YR・ 6/1 ③液化	覆土中
3	土師器 壇	底径 7.4	底部片	器形-平底。成・整形-外面・脚部は明瞭ではないがハケ目が施されてい る。底部はヘラケズリ。	①角閃石等②に ぶい黄緑・10YR・ 6/3 ③液化	覆土中

第12表・造構外出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	遺存率	器 形 、 成・整 形 の 特 徴	①胎土②色調 ③焼成	位 置
1	土師器 高環	口径 21.0 環部 高 6.0	2/3	器形-体部は直線的に開き、上半は内凹し、口縁部はわずかに内凹。 成・整形-体部と底部は削りされ、体部内面はヨコナデされ、後の接合 時に接合部を中心に横位のハケ目。外面のハケ目も接合時のものと思われる。 底部は横位に後、内側から放射状に、体部もその流れで下から縦位に施さ れる。最後に口縁部内外面をヨコナデ。	①角閃石・白色 粒子・赤褐色粒子 等・2.5YR・6/1 ③液化	N-10 グリッ ド表掛

第13表・13号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	遺存率	器 形 、 成・整 形 の 特 徴	①胎土②色調 ③焼成	位 置
1	土師器 壇	口径 13.4 脚部 高さ 20.0 19.8	3/4	器形-丸底。脚部は球形。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、明瞭な凹縞が 2条平行して走る。口縁部はやや外反する。成・整形-脚部外縫はヘラケ ズリ。口縁部は外反面ともヨコナデ。	①白色粒子・石 英・赤褐色粒子 等・角閃石等② 12.5YR・6/4 ③液化	床 着
2	土師器 壇	口径 16.4	口縁～ 脚部片	器形-脚部は長期で張ることなく頸部に至る。口縁部は外反して開く。 成・整形-外面・口縁部はヨコナデ。脚部は縦位のヘラケズリ。内面・脚 部は横位のヘラナデ。	①白色粒子・石 英等②にぶい黄 緑・10YR・6/3 ③液化	床 着

3	土師器 台付壺	口径 胴部 肩高	13.0 15.0 11.1 18.6	ほぼ完形	器形・脚部は丸みを帯び下平に最大径を持つ。口縁部は短く、口唇部は外反する。肩部は「弓の半」形に開く。成・整形・外面・口縁部はヨコナダ。脚部は脚部・脚部は上から腹位にハラケズリ。内面・口縁部はヨコナダ。脚部は強く施でつけた後、端部をヨコナダ。	①角 磬 (1.0 ~ 4.0cm)・石灰・白灰子・角四石等②に多い 種・7.5YR・6/4 ③焼化	床 着
4	土師器 壺	口径 肩高	12.8 4.1	1/2	器形・口縁部と底部の境に後を持ち、上半に段を持つ。成・整形・外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・全周をヨコナダ。	①白色粒子・角四石・赤褐色粒子等②に多い 種・7.5YR・6/4 ③焼化	床 着
5	土師器 壺	口径 肩高	(13.6) 4.6	1/2	器形・底部は深めで丸みを帯びる。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。成・整形・外面・口縁部はヨコナダ。底部はハラケズリ。内面・口縁部から全体部下平にかけてヨコナダ。	①白色粒子・角四石・赤褐色粒子等②に多い 種・7.5YR・6/4 ③焼化	床 着
6	土師器 壺	口径 肩高	12.5 4.3	ほぼ完形	器形・底部は深めで丸みを帯びる。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに外反して開く。成・整形・外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・口縁部はヨコナダ。	①暗灰色粒子・赤褐色粒子等②に多い 種・7.5YR・6/6 ③焼化	床 着
7	土師器 壺	口径 肩高	14.6 4.7	ほぼ完形	器形・底部は深く丸みが強い。成・整形・外面・体部から底部にかけてハラケズリ。口唇部はヨコナダ。内面・全面をヨコナダ。	①白色粒子・角四石・赤褐色粒子等②に多い 種・7.5YR・6/6 ③焼化	床 着

第14表・14号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①胎土②色調 ③焼成	位置	
1	土師器 壺	口径(14.8) 肩高 4.7	2/3	器形・底部は深めで丸みを帯びる。口縁部は直線的に立ち上がる。成・整形・外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・全面をヨコナダ。	①白色粒子・角四石・石英等②に多い 種・7.5YR・6/4 ③焼化	覆土2層中	
2	土師器 壺	口径 肩高	13.3 4.3	3/4	器形・底部と口縁部の拵目に後を持つ。口縁部は直線的に立ち上がり、中程で我を持ち先細りになる。成・整形・外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・全周をヨコナダ。	②白色粒子・角四石・赤褐色粒子等②に多い 種・7.5YR・6/3 ③焼化	覆土2層中

第15表・15号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①胎土②色調 ③焼成	位置	
1	土師器 壺	口径 胴部 肩高	21.2 17.0 3.7 37.0	2/3	器形・底部は不安定な平底。脚部は長削で中程でわざかに張る。口縁部は外反して開く。成・整形・外面・口縁部はヨコナダ。脚部は腹位のハラナダ。	①白色粒子・石英・赤褐色粒子等②に多い 種・7.5YR・5/2 ③焼化	床 着
2	土師器 壺	口径 脚部	20.9 17.1	上半1/2	器形・脚部は長削で、頸部がわずかにくびれる。口縁部は外反して開く。成・整形・外面・口縁部はヨコナダ。脚部は上方傾斜・中程斜位のハラケズリ。内面・口縁部はヨコナダ。頸部はハラナダ。	①白色粒子(0.3mm) ②赤褐色粒子等②に多い 種・7.5YR・6/3 ③焼化	床 着
3	土師器 壺	口径 肩高	14.1 4.3	完形	器形・底部は丸みを帯び、底部と口縁部との後に明瞭な棱を持つ。口縁部は外反する。成・整形・外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・見込み部中央を残してヨコナダ。	①角 磬・白色 粒子・石英等② 灰岩・10YR・ 8/2③焼化	床 着
4	土師器 壺	口径 肩高	14.8 4.0	ほぼ完形	器形・底部と口縁部の境に後を持ち、口縁部はわざかなる平行する2条の段を持つ。成・整形・外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・見込み部中央を残してヨコナダ。	①角 磬・白色 粒子・石英等② 灰岩・2.5YR・ 7/1③焼化	床 着
5	土師器 壺	口径 底径	13.4 4.1	ほぼ完形	器形・底部と口縁部の境に明瞭な棱を持つ。口縁部上半で段を持ち外反する。成・整形・外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・見込み部中央を残してヨコナダ。	①角 磬・白色 粒子等②灰岩・ 10YR・5/1③焼化	床 着
6	頃忠器 壺	口径 胴部 肩高	(26.0) 46.8 47.5	3/4	器形・底部は大きく突り出し上半に最大幅を持つ。口縁部は外反し口縁部は後をもって屈曲する。成・整形・外面・口縁部は1本の隆線に複数の平行する横線を施す。内面・脚部の当て具痕は同心円文。口縁部はヨコナダ。脚部はヨコナダ。	①白色粒子・白 色灰岩・白色 小颗粒②灰岩・ N-S・3/3③還元 燒成	床 着
7	頃忠器 壺			1/3上半	器形・脚部上半は直角張り出し、口縁部は外反して開く。成・整形・外面・脚部は平行引きの後、部分的に複数の平行する横線を施す。口縁部は1本の沈線に区画され、ヨコナダ。内面・脚部の当て具痕は同心円文。上半と下方で出で具を使い分け下方のものがより細かい。口縁部はヨコナダ。	①白色粒子・暗 灰岩等②灰岩・ N-S・5/3③還元 燒成	床 着

8	須志器 裏		1/3下半	器形-丸底。成・整形-外面・平行叩きの後、部分的に複数の平行する線を施す。内面・同心円文。	①白色粒子・暗灰色粒子②灰・N・5 ③造元堅致	床 着
---	----------	--	-------	---	-------------------------	-----

第16表・2号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成	位置
1	土師器 裏	底径 8.0	底部片	器形-平底。成・整形-外面・側部および、底部をハラケズリ。内面・ハナダ。	①暗灰色粒子・ 赤褐色粒子・白 色粒子等②に よい質感・10YR 7/4③焼化	覆土中
2	土師器 环	口径 13.5 器高 3.7	3/4	器形-底部は丸みを帯び、口縁部は直立する。成・整形-外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・見込み部中央を残しヨコナダ。	①暗灰色粒子・ 白色粒子・角閃 石等②に よい質感・7.5YR 6/4③焼化	床 着
3	土師器 环	口径 14.8 器高 4.5	2/3	器形-底部は浅めで丸みを帯びる。口縁部は直立する。成・整形-外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・見込み部中央を広く残してヨコナダ。	①暗灰色粒子・ 白色粒子・角閃 石等②に よい質感・7.5YR 6/6③焼化	床 着
4	土師器 环	口径 (12.5) 器高 3.4	1/2	器形-底部は丸みを帯び、口縁部は直立する。成・整形-外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・見込み部中央を残しヨコナダ。	①暗灰色粒子・ 白色粒子・角閃 石等②に よい質感・SYR 6/6③焼化	床 着
5	土師器 环	口径 (16.2) 器高 2.6	1/3	器形-底部は浅く偏平で、口縁部は開き気味に立ち上がる。成・整形-外 面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・見込み部中央を残してヨコナダ。	①暗灰色粒子・ 白色粒子・角閃 石等②に よい質感・2SYR 6/6③焼化	床 着
6	土師器 环	口径 (12.3) 器高 3.5	1/4	器形-底部は丸みを帯び、口縁部は直立する。成・整形-外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・ほぼ全面をヨコナダ。	①暗灰色粒子・ 白色粒子・角閃 石等②に よい質感・SYR 6/6③焼化	床 着
7	土師器 环	口径 14.2 器高 4.0	1/2	器形-底部は丸みを帯び、口縁部は直立する。成・整形-外面・底部はハラケズリ。口縁部はヨコナダ。内面・ほぼ全面をヨコナダ。	①暗灰色粒子・ 角閃石・石英等 ②に よい質感・ SYR・6/6③焼化	床 着

第17表・2号住居跡暗文、墨書き器観察表

番号	部位	施文状態	器形および成・整形	胎土	色調	焼成	位置
8	底部片	底部から体部にかけて螺旋状暗文。	平底。底部をハラケズリ。	白色粒子・角閃石・石英等を含む	に よい質 7.5YR5/4	焼化	覆土中
9	口縁～ 体部片	体部に放射状暗文。	口縁部をヨコナダ。	白色粒子・角閃石等を含む	に よい質 7.5YR5/3	焼化	覆土中
10	体部～ 底部片	上方は放射状暗文、下方は螺旋状 暗文。	丸底カ。下方をハラケズリ。	角閃石・白色粒子・石英等を含む	に よい質 7.5YR5/3	焼化	覆土中
11	口縁～ 体部片	体部に放射状暗文。	口縁部をヨコナダ。	暗灰色粒子・角閃石等を含む	に よい質 7.5YR5/3	焼化	覆土中
12	底部片	底部に墨痕。	扁平な丸底。底部をハラケズリ。	暗灰色粒子・白色粒子・角閃石等を含む	に よい質 7.5YR5/3	焼化	覆土中

第18表・3号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成	位 置
1	土師器 裏	口径 21.6	口縁～ 底部	器形-側部は良く振り出す。口縁部は外反して立ち上がる。成・整形-外 面・口縁～底部はヨコナダ。後側部は横位のハラケズリ。腹部にハラケズリの際につけた痕が残る。内面・側部はハラナダ。後口縁～底部はヨコナ ダ。	①白色粒子・暗 灰色粒子・角閃 石等②に よい質・2SYR 6/6③焼化	床 着 カマド 右脇
2	土師器 环	口径 (15.6) 底径 (10.5) 器高 4.3	1/4	器形-底部は扁平で、体部との境が明瞭ではない。口縁部は外反し口唇部 をつまみ出される。成・整形-外面・体部下凹および、底部はハラケズリ。 口縁部はヨコナダ。内面・口縁部から体部をヨコナダ。	①白色粒子・長 さ・水・薄・角 閃石等②に よい質・SYR 6/4③焼化	床 着

3	須恵器 壺	底径 (18.0)	1/6	器形 - 天井部は丸みを帯びて張る。口縁部は直下に屈曲し、口唇部は斜く外反して開く。成・整形 - 外面・天井部内壁を削輪ハラケシリ。	①灰色粒子・角 閃石等②に赤い 黄灰・10YR 6/4 ③未還元	覆土 2 層中
4	土師器 壺 または 皿+	口径 14.2 底径 11.6 高さ 2.5	4/5	器形 - 平底。底部と体部の境目に後を持ち、体部は外反気味に立ち上がり直線的に開く。成・整形 - 外面・底部はハラケシリ。体部はヨコナデ。内面・体部ヨコナデの後、見込み部中央と体部との境目にリング状にヘラミガキ。	①白色粒子・赤 色斑紋等②に 赤い橙・2.5YR 6/8 ③酸化	覆土中

第19表・4号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①粘土②色調 ③焼成	位置
1	土師器 壺	口径 (14.4) 器高 2.9	1/4	器形 - 口縁部はわずかに内傾する。成・整形 - 外面・底部はハラケシリ。口縁部はヨコナデ。内面・見込み部中央を残してヨコナデ。	①白色粒子・角 閃石等②未明確 2.5YR・5/6 ③酸化	カマド 内

第20表・8号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①粘土②色調 ③焼成	位置
1	土師器 壺	口径 16.3 器高 4.9	2/3	器形 - 底部は深く丸みを帯びる。体部は底部との境を意識させる緩やかな屈折をもって立ち上がる。成・整形 - 外面・底部はハラケシリ。口縁部はヨコナデ。内面・見込み部中央を残してヨコナデ。	④暗灰色粒子・角 閃石・白色粒子・石英等②に 赤い橙・5.5YR 6/6 ③酸化	床 壁 床 窓
2	土師器 壺	口径 (14.3) 器高 3.5	1/4	器形 - 壁部は丸みを帯び、体部上半から口縁部にかけて直線的に伸びる。成・整形 - 外面・底部はハラケシリ。口縁部はヨコナデ。内面・見込み部中央を残してヨコナデ。	④暗灰色粒子・角 閃石・白色粒子等②に 赤い橙・7.5YR 6/6 ③酸化	覆土 2 層中
3	須恵器 壺	口径 (14.0) 底径 (10.0) 器高 3.4	1/6	器形 - 体部は直線的に立ち上がり、II井部に向かって先細る。成・整形 - 体部内外面ともロクロナデ。体部下端は削輪ハラケシリ。	①暗灰色粒子・ 白色粒子等②に 赤い橙・N/6 ③還 元窯	掘り方 裏
4	土師器 台付壺			器形 - 脚部は「ハの字」状に開く。成・整形 - 腹部・脚部とともに施されている。	①白色粒子・角 閃石・共石等② 黄灰・2.5YR 5/1 ③酸化	覆土 2 層中
5	土製品・封緘車+直筒4.7・最大厚1.7・孔径0.5/完全形			全面に純文が施される。 ①角閃石・白色粒子・石英等②に 赤い黄灰・10YR 6/3 ③酸化		覆土 2 層中

第21表・9号住居跡遺物観察表

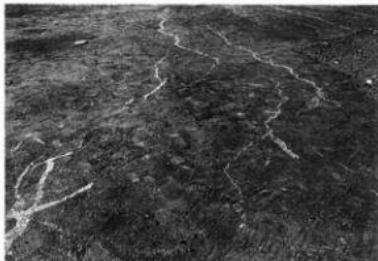
番号	器種	法量 (cm)	遺存率	器形、成・整形の特徴	①粘土②色調 ③焼成	位置
1	土師器 壺	口径 (22.8)		器形 - 脚部はあまり張り出さない。口縁部は直線的に開く。成・整形 - 外 面・口縁から頸部にかけてヨコナデの後、腹部を横位のハラケシリ。内 面・口縁から頸部にかけてヨコナデ。脚部はハラナデ。	①暗灰色粒子・角 閃石・白色粒子・石 英等②に赤い 黄灰・10YR 7/4 ③酸化	覆土 4 層中
2	土師器 壺	底径 (5.2)		器形 - 平底。脚部は内側して立ち上がる。成・整形 - 外面・脚部は斜位の ハラケシリ。腹部ハラケシリ。内面・ハラナデ。	②角 閃石・石 英・暗灰色粒子等 ③黑褐・10YR 2/3 ③酸化	カマド 周 囲
3	土師器 壺			成・整形 - 外面・肩位のハラケシリ。炭化粒子の付着が見られる。内面・ ハラナデ。	④角 閃石・白 色粒子等②に 赤い水滴・2.5YR 5/3 ③酸化	カマド 掘り方 裏壁
4	土師器 壺	口径 13.2 器高 2.7	3/4	器形 - 底部は浅く扁平で、II井部は直立する。成・整形 - 外面・底部はハ ラケシリ。口縁部はヨコナデ。内面・見込み部中央を残してヨコナデ。	⑤白色粒子・角 閃石・白色粒子等J 灰口・5Y・8/2 ③ 還元窯	覆土 3 層中
5	須恵器 壺	底径 6.9		器形 - 体部は内湾気味に立ち上がる。成・整形 - 底部は目転糸切りの後、 底部縁辺部および、体部下端を削輪ハラケシリ。見込み部に焼成後のもの と思われる十文字の網目刻がある。	⑥白色粒子・角 閃石・白色粒子等J 灰口・5Y・8/2 ③ 還元窯	覆土 3 層中
6	須恵器 壺	底径 7.7		成・整形 - 底部は目転糸切りの後、底部縁辺部および、体部下端を削輪ハ ラケシリ。	⑦白色粒子・角 閃石・白色粒子等J 灰口・2.5Y・5/1 ③還元窯	床 壁
7	須恵器 壺	底径 (14.0)		器形 - 天井部は平たく、口縁部は直下に屈曲する。成・整形 - ロクロナデ。	⑧暗灰色粒子・ 白色粒子等②黄 灰・2.5Y・5/1 ③還元窯	カマド 覆土中

まとめ

今回の発掘調査で調査された遺構は住居跡を主体とし、本遺跡が古代の集落の一端であることが明らかとなった。年代は大まかに3区分され、古墳時代中期を初現とし断続的に歴史時代（奈良時代）まで続いている。ここで注目すべきは、この広瀬川低地帯で5世紀中葉の住居跡が検出されたことであろう。各時代の遺構の内訳および、分布状況は下図（第67図）の通りである。

遺物について若干触れてみる。古墳時代中期6号住居跡から出土した甕（No.1）は、その口縁部に特徴を持つ（第13図、図版89、第7表参照）。このタイプの甕は県内でも出土例が少ない。また、16号住居跡No.4および、17号住居跡No.4は、互いに接合される須恵器の甕で、内側の当て具痕の特徴（第49図、図版107、第23表参照）から北陸系のものと推測され、県内でもあまり類例を見ない。

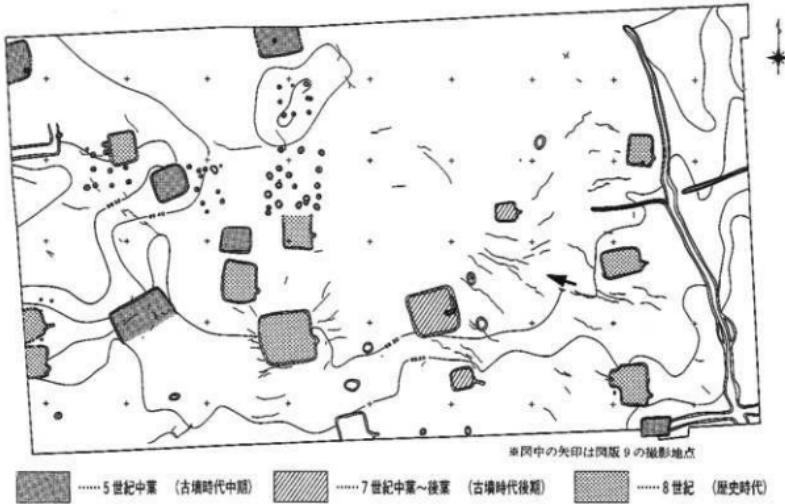
地震跡について、I区では、地震の際に発生する液状化現象によって生じた噴砂が検出されている。周辺の遺跡では、弘仁9年（818年）の赤城南麓の地震跡が数多く報告されている（第2章参照）。今回の調査で噴砂が、8世紀代の遺構の覆土を切ることは確認されている。明確に噴砂の発生時期を特定することはできないが、おそらくは同様の地震によるものと思われる。



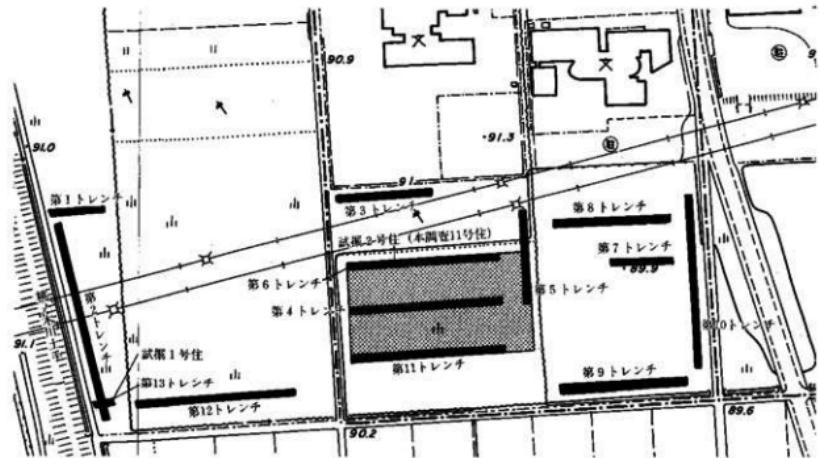
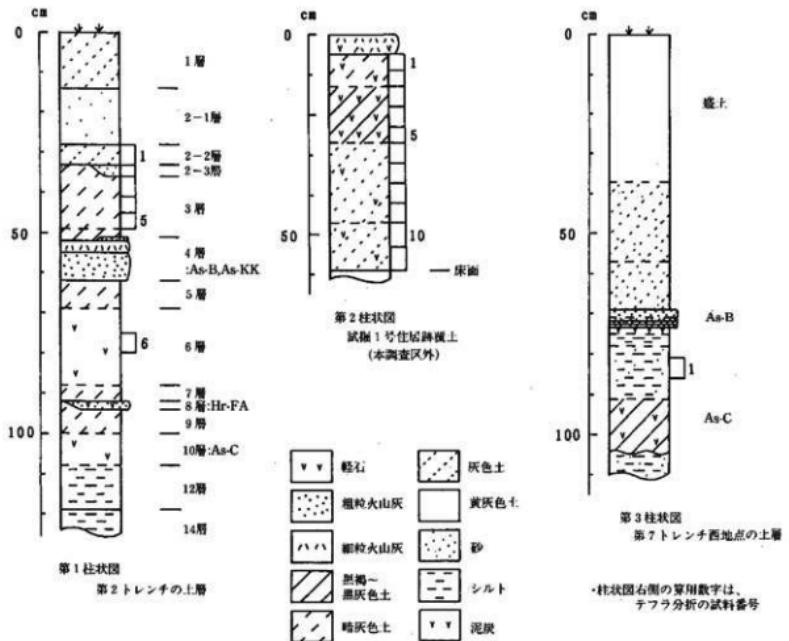
9. 噴砂検出状況（南東から）

（参考文献）

- 桜岡正信「?世紀代以降の土師器窯の変遷とその要因について」『群馬考古手帳 Vol.2』群馬土器総会 1991
坂口一「群馬県における古墳時代中期の土器編年——共伴関係による土器形式組列の検討——」「研究紀要 4」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987



第67図 石関西築造跡I区の集落変遷図



第68図 テフラ分析土層柱状図と試掘トレンチ設定図 (2千5百分の1)

自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 石関西築造跡の地質とテフラ

1. はじめに

桃の木川左岸に位置する石関西築造跡の発掘調査では、良好な上層の断面が認められた。そこで地質調査を行い地質層序の記載を行うとともに、テフラ検出分析を合わせて行って示標テフラの層位の把握を行い、土層の堆積年代に関する資料の収集を試みた。地質調査の対象とした地点は、第2トレンチ、試掘1号堅穴住居址、第7トレンチ西地点、第7トレンチ東地点の4地点である。

2. 地質層序

(1) 第2トレンチ

ここでは、下位より黄色シルト層（層厚5cm以上、14層）、灰色シルト層（層厚11cm、12層）、黄灰色軽石に富む灰色土（層厚8cm、10層）、黄灰色軽石混じり暗灰色土（層厚6cm、9層）、白色軽石混じりで陶汰の良くない黄色火山灰層（層厚2cm以上、8層）、灰色土（層厚4cm、7層）、白色軽石混じり黄灰色土（層厚19cm、6層）、暗灰色土（層厚7cm、5層）、成層したテフラ層、灰色細粒火山灰層（層厚0.5cm、以上4層）、黒灰色土（層厚3cm）、暗灰色土（層厚13cm、以上3層）、陶汰の良い黄色砂層（層厚3cm、2-3層）、灰色土（層厚5cm、2-2層）、黄灰色砂質土（層厚14cm以上、2-1層）、灰色作土（層厚14cm、1層）の連続が認められる（第68図 第1柱状図）。

これらの土層のうち、8層は層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳淡川テフラ層（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に同定される。また4層のうち成層したテフラ層は、下部の黄灰色粗粒火山灰層（層厚7cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚3cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、新井、1979）に同定される。さらにその上位の灰色細粒火山灰層は、層相から1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと考えられる浅間船川テフラ（As-Kk、早田、1991、未公表資料）に同定される。

(2) 試掘1号堅穴住居址

古式土器が検出されたこの堅穴住居址の覆土は、下位より黄灰色軽石混じり灰色土（層厚12cm）、黄灰色軽石混じり灰色土（層厚20cm）、黄灰色軽石に富む黒灰色土（層厚14cm）、黄灰色軽石混じり暗灰色土（層厚8cm）、白色軽石混じり黄色細粒火山灰層（層厚5cm、軽石の最大径25mm、石質岩片の最大径22mm）の連続が認められる（第68図 第2柱状図）。これらの土層のうち、最上部の白色軽石混じり黄色細粒火山灰層は、層相からHr-Faに同定される。

(3) 第7トレンチ西地点

この地点では、下位より暗灰色砂質シルト層（層厚6cm）、黄灰色軽石に富む黒褐色土（層厚13cm）、灰色砂質シルト層（層厚13cm）、暗灰色砂質シルト層（層厚3cm）、黒泥層（層厚2cm）、成層したテフラ層、灰色砂質土（層厚12cm）、灰色砂質土（層厚20cm）、盛土（層厚37cm）が認められる（第68図 第3柱状図）。

これらの土層のうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色細粒火山層（層厚0.2cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、桃色粗粒火山灰層（層厚2cm）から構成されている。このテフラ層は、その層相からAs-Bに同定される。

(4) 第7トレンチ東地点

ここでは、黒泥層（層厚3cm）の上位にAs-Bの堆積が認められた。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

第2トレンチ、試掘1号堅穴住居址、第7トレンチ西地点の3地点において採取された試料10点についてテフラ検出分析を行い、示標テフラの検出を試みた。分析の手順は次の通りである。

1) 試料10gを秤量。

2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 80°Cで恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第27表に示す。第2地点では試料番号5に、スponジ状によく発泡した灰色軽石（最大径2.1mm）と発泡の良くない白色軽石（最大径2.3mm）が比較的多く認められた。岩相から前者はAs-Cに、後者はHr-FAに各々由来するものと考えられる。また、試料番号3および1には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径4.4mm）が比較的多く含まれている。この軽石は、その特徴から下位にあるAs-Bに由来するものと考えられる。なお、これらの試料には1783（天明3年）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A、荒牧、1968、新井、1979）に由来する白色軽石は認められなかった。したがって、第2トレンチで検出されたウネ状造構は、As-Kk降灰後でAs-A降灰前に形成された可能性が考えられる。

古式土師器が検出された試掘1号堅穴住居址では、床面からHr-FAまでのいずれの試料にもスponジ状に比較的よく発泡した灰色軽石（最大径4.1mm）が比較的多く含まれている。造構の基盤にあたる上層についての分析はできなかったものの、その産出状況から、造構の構築はAs-c降灰以降の可能性が大きいと考えられる。

第7トレンチ西寄り地点試料番号1には、発泡の良くない白色軽石（最大径4.8mm）とスponジ状によく発泡した灰色軽石（最大径3.7mm）が比較的多く認められた。岩相から前者はHr-FAに、後者はAs-Cに各々由来するものと考えられる。土層の状況から、この試料付近にHr-FAの降灰履歴があると考えられる。

4. 小結

石闘西塗瀬遺跡において地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）、様名二ツ岳浜川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間柏川テフラ（As-Kk、1128年）が検出された。これら示標テフラとの関係から、第2トレンチで検出されたウネ状造構はAs-Kkの降灰以前、また試掘1号堅穴住居址はAs-C降灰前後以降に構築された可能性が大きいと考えられた。

文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の小標テフラ層、考古学ジャーナル、no.157,p.41-52。
荒牧重雄（1968）浅間火山の歴史、地団研専報、14.p. 1-45。
町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
坂口一（1986）様名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器、群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡、今井神社古墳群、荒砥青柳遺跡」,p.103-119。
早田勉（1989）6世紀における様名火山の2回の噴火とその災害、第四紀研究、27,p.297-312。
早田勉（1991）浅間火山の生い立ち、佐久考古通信、no.53,p.2-7.

第27表 石関西築造跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石		
		量	色調	最大径
2 Tr	1	++	淡褐色	4.4
	3	++	淡褐色	2.1
	5	++	灰, 白	2.1, 2.3
1号住居址	1	++	灰	3.0
	3	++	灰	3.7
	5	++	灰	3.8
	7	++	灰	3.8
	9	++	灰	4.1
	11	++	灰	3.2
7 Tr	1	++	白, 灰	4.8, 3.7

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。最大径の単位はmm。

II. 石関西築造跡の植物珪酸体分析

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プランツ・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

試料は、第2トレーナーで10点、第7トレーナー西地点で5点、第7トレーナー東地点で1点の計16点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図（第68図）に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プランツ・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピース添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42kHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-3}g$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はスキの値を用いた。その値は2.94（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表28および第69・70図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ウシクサ族（スキ属やチガヤ属など）、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、Aタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

穀の表皮細胞由来：オオムギ族

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

はめ縫バズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

5. 考察

（1）稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

1) 第2トレンチ

2-2層（試料1）から12層（試料9）までの層準について分析を行った。その結果、2-2層（試料1）からHr-FA直下の9層（試料7）までの各層からイネが検出された（第68図 第1柱状図）。このうち、2-2層（試料1）、3層上部（試料2、2'）、5層（As-B直下、試料4）、6層（試料5）、7層（試料6）、9層（Hr-FA直下、試料7）では、密度がいずれも5,000個/g以上と高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。3層下部（試料3）では、密度が1,400個/gと低い値であることから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などからの混入の危険性も否定できない。

2) 第7トレンチ西地点

As-B直下層（試料1）からAs-C直下層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）からAs-C混層（試料4）までの各層からイネが検出された（第68図 第3柱状図）。このうち、As-B直下層（試料1）およびその下層（試料2、3）では、密度がおよそ5,000個/g以上と高い値であ

る。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-C混層（試料4）では、密度が800個／gと低い値であることから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などからの混入の危険性も否定できない。

3) 第7トレンチ東地点

As-B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は2,300個／gと比較的低い値である。しかし、同層は直上をAs-B層で覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属などがある。このうち、本遺跡の試料からはオオムギ属が検出された。

オオムギ族（穂の表皮細胞）は、第2トレンチの3層上部（試料2）から検出された。密度は1,600個／gと比較的低い値である。オオムギ族については標本の検討が十分とは言えないが、ここで検出されたのはムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井、1989）である。したがって同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の発明については今後の課題としたい。

(3) 植物珪酸体分析からみた植生・環境

上記以外の分類群では、全体的に棒状珪酸体やウシクサ族型が多量に検出され、ウシクサ族（スキ属など）やヨシ属、ネザサ節型なども検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、9層（Hr-FA直下層）より上位ではおむねイネが卓越しているが、3層下部ではヨシ属が優勢であり、第7トレンチのAs-B直下層などではウシクサ族（スキ属など）も多くなっている。

以上の結果から、9層（Hr-FA直下層）より上位ではおむね継続して稲作が行われていたと考えられるが、その周辺などではヨシ属やウシクサ族（スキ属など）、ウシクサ族型の給源植物なども生育していたものと推定される。

6.まとめ

以上のことから、本遺跡では標名ニツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）直下の9層の時期には稲作が開始されていたものと考えられ、その後もおむね継続して行われて現在に至ったものと推定される。また、3層上部ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

参考文献

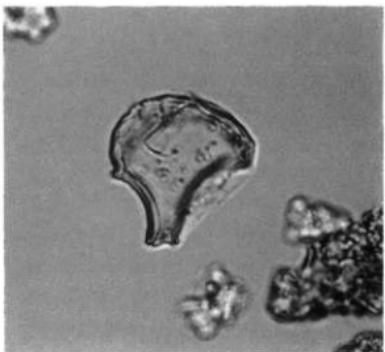
- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプランツ・オパール分析の現状と問題点。植生史研究 第2号：p.27-37
藤原宏志（1976）プランツ・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学。9:p.15-29
藤原宏志（1979）プランツ・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および葬馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*Oryza sativa L.*）生産量の推定-。考古学と自然科学。12:p.29-41.
藤原宏志・杉山真二（1984）プランツ・オパール分析法の基礎的研究(5)-プランツ・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学。17:p.73-85.

杉山貞二・石井克己 (1989) 群馬県子持村、FP直下から検出された炭化物の植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析. 日本第四紀学会要旨集, 19p.94-95.

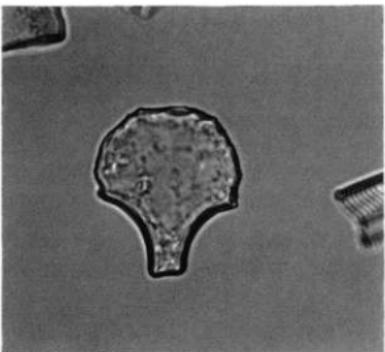
植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

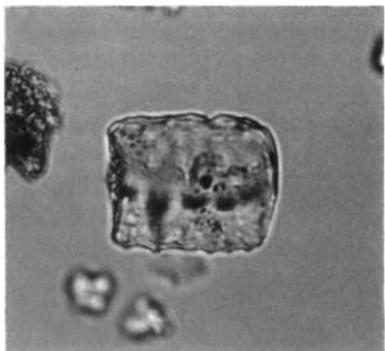
No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	第2トレンチ	2
2	イネ	第7トレンチ東	1
3	イネ(側面)	第2トレンチ	1
4	オオムギ族(穎の表皮細胞)	第2トレンチ	2
5	ヨシ属	第2トレンチ	3
6	ウシクサ族(ススキ属など)	第7トレンチ西	4
7	シバ属	第2トレンチ	1
8	キビ族型	第7トレンチ西	4
9	ウシクサ族型	第7トレンチ西	1
10	イネ科Aタイプ	第2トレンチ	8
11	ネザサ節型	第2トレンチ	5
12	表皮毛起源	第2トレンチ	1



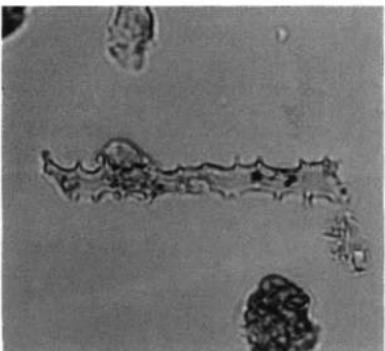
10. No.1 イネ



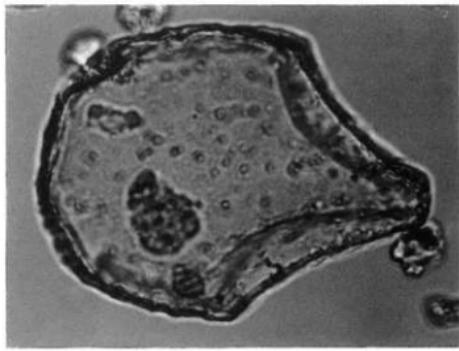
11. No.2 イネ



12. No.3 イネ



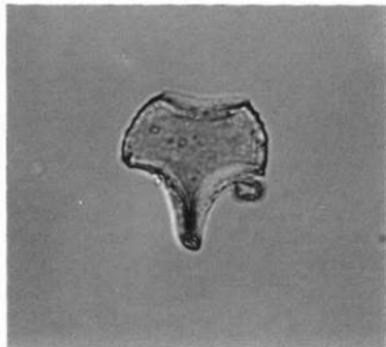
13. No.4 オオムギ族



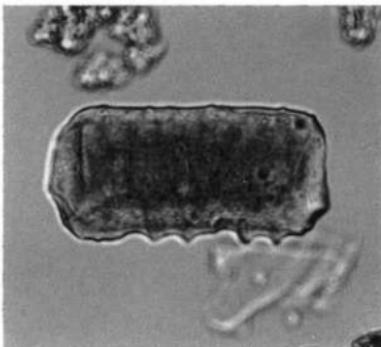
14. No.5 ヨシ属



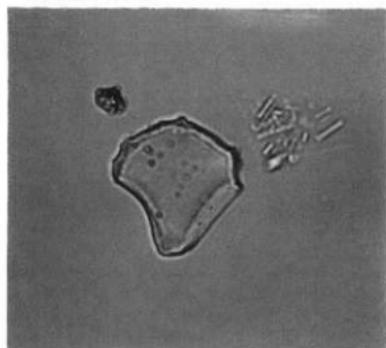
15. No.6 ウシクサ族



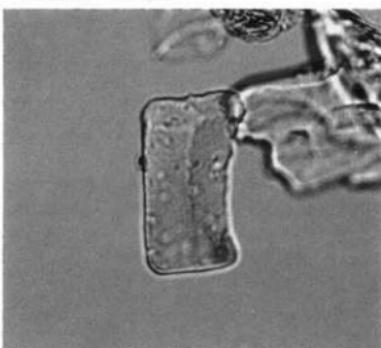
16. No.7 シバ属



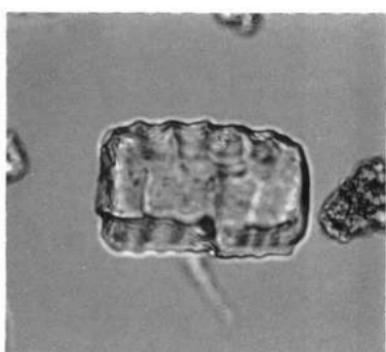
17. No.8 キビ族型



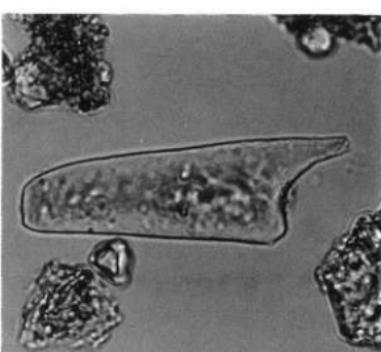
18. No.9 ウシクサ族型



19. No.10 イネ科A タイプ



20. No.11 ネザサ節型

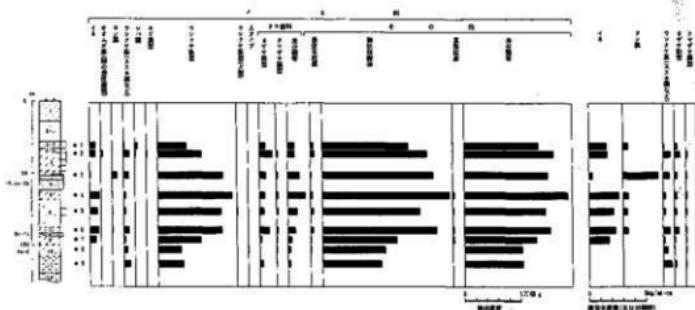


21. No.12 表皮毛起源

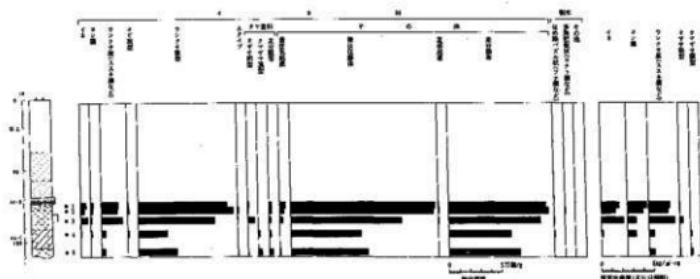
第28表 石関西塙瀬遺跡の植物珪酸体分析結果

分類群 \ 比例	第1トレンチ									第2トレンチ西側					割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	
イネ オムギ族(穀の熟度類別)	53	55	54	54	51	75	81	68		59	47	73	8		23
コシ草 ヨシ草族(穀の熟度類別)	8	15	49	8	7	7				29	23	15	15		46
クサカケ族(ススキ属など)	8	55	36	49	23	30	32	14	36	68	159	159	204	43	45
クサカケ族(ススキ属など)	31	8	6												208
イモ科										7	23				8
ワタカケ族	260	304	654	584	697	557	576	384	206	234	859	918	741	360	370
ワタカケ族(大型)									7						8
ハナツブ										6					15
タケノコ											16	7			8
キヌサ型	61	118	77	63	53	48	96	21	8	37	15	8	73		23
クマザサ型	16	33	14	15	14	15	15	7	8	7			15		15
ホタルイ草型	63	63	36	106	159	93	74	34	21	22	29	31	32	33	36
その他の草型	31	36	7	15	27	30	7	8			59	47	29		23
根状茎類	756	323	1072	970	1125	856	1006	658	560	519	1373	1306	1054	673	725
茎葉類	8	8	15	7	15	14					7	15	7		23
花被類等	657	703	786	720	814	714	755	644	513	519	905	955	972	598	682
果実類															936
植物珪酸体総量	1940	2451	2726	2656	3074	2613	2551	1943	1951	1403	3528	3830	3104	1987	1940
計合の百分率(植物珪酸体総量/kg/m²)															3544

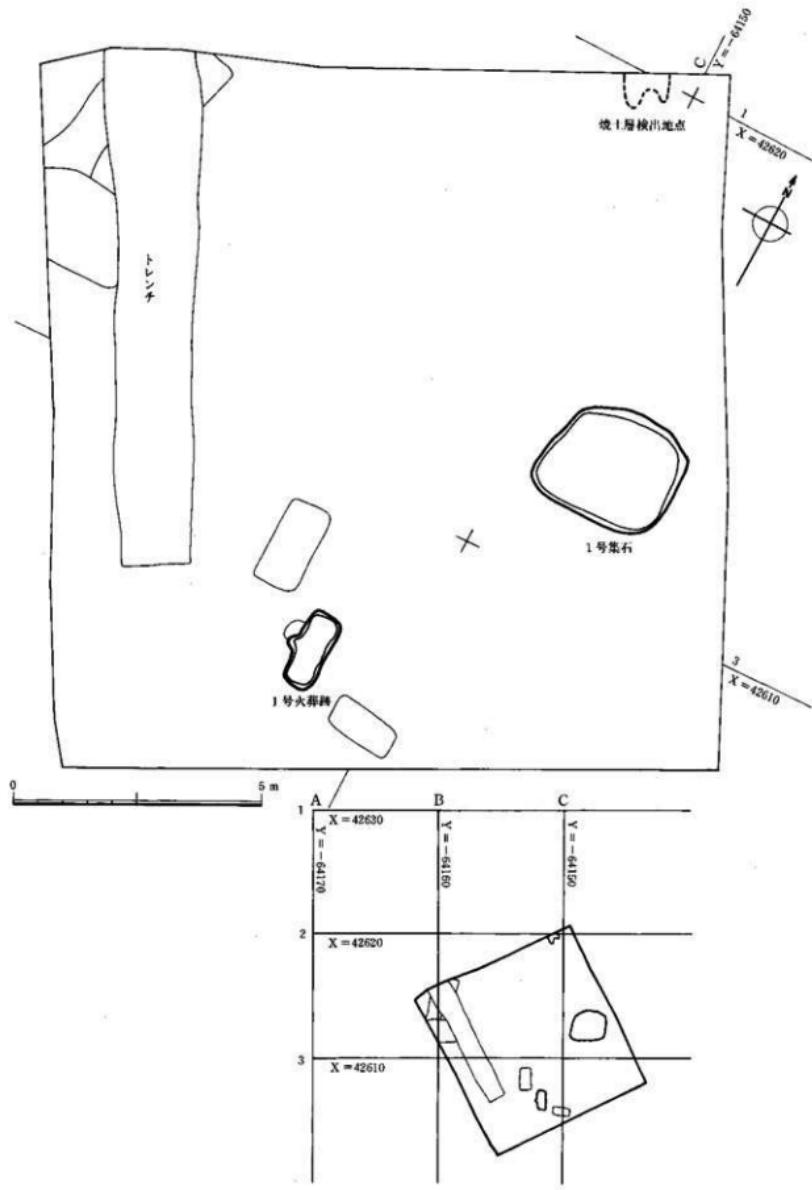
計合の百分率を1.00として算出。



第69図 第2トレンチの植物珪酸体分析結果



第70図 第7トレンチ西地点の植物珪酸体分析結果



第71図 西片貝源田島遺跡全体測量図

第5章 西片貝源田島遺跡

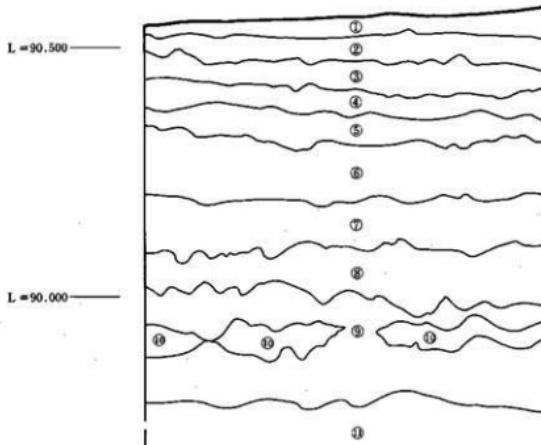
遺跡の概要

本遺跡は、桃の木川を挟んで石関西築瀬遺跡の西方に位置する。調査対象区は石関西築瀬遺跡Ⅱ・Ⅲ区と同じく学校建設にともない移転する鉄塔部分の14m四方である。

今回の発掘調査では、火葬跡1基、集石1基を検出している。また、B-2グリッド表土中からは高台付近、かわらけ、鉄滓等が、C-2グリッドからは羽釜等がいずれも表土除去作業中に検出されている。

基本堆積土層

桃の木川右岸の土手下に立地する本遺跡は、現地表面から1.5~1.6m掘り下げるとき層にあたる。層層の上層は、二次堆積のロームと思われるきめの細かい暗褐褐色土が3層にわたって堆積し、この層の上面に遺構が掘り込まれている。この周辺では、地下水を汲み上げる給水所があるため石関西築瀬遺跡のような湧水はなかった。



第72図 西片貝源田島遺跡基本堆積土層

地層①	黒色土	瓦土
地層②	暗褐色土	灰土
地層③	暗褐色土	①層が削除された層。耕作土か?
地層④	褐色土	白色灰石粒子少混入。青褐色土ブロック痕跡混入
地層⑤	暗褐色土	白色輕石粒子少混入
地層⑥	褐色土	白色灰石粒子少混入。褐色褐色土ブロック (1.0~5.0m) まばら、灰化した埴塗
地層⑦	褐色土	白色灰石粒子少混入。耕作土
地層⑧	褐色土	白色灰石粒子少混入。耕作土
地層⑨	褐色褐色土	白色灰石粒子少混入。耕作土
地層⑩	褐色褐色土	白色灰石粒子少混入。耕作土
地層⑪	褐色褐色土	白色灰石粒子少混入。耕作土
地層⑫	褐色	円錐多量含む。離どうし透き間には青褐色土が充填される

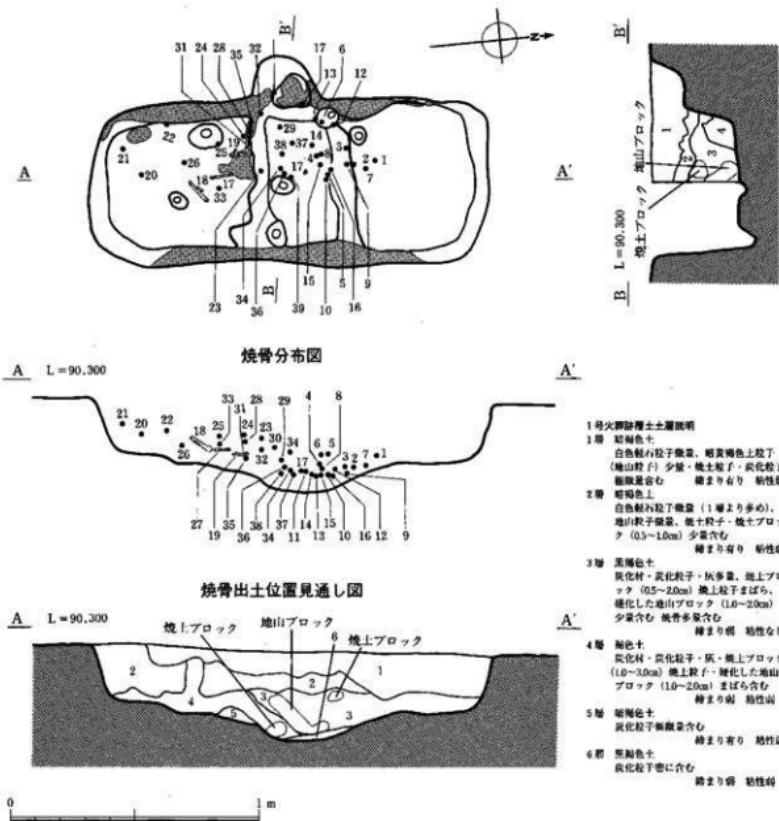
地層⑫層上面が遺構確認面。

検出された遺構と遺物

1号火葬跡（拡図 第73図 写真図版113・114）

位置/B-3グリッド。平面形/南北に細長い長方形を呈するが、西に伸びる張り出しを持ち最密には凸型である。主軸/N-92°-W。規模/東西に67cm、張り出しを含めると83cm、南北に160cm。壁/65~85°の角度で立ち上がり、25~35cm遺存する。底部/中央部が段をもって低くなり、径8~13cm、深さ5~8cmのピットが6箇所に開いている。張り出し部の底部は、本体の底部より約20cm高く独立した面をなす。

最下層には炭化粒子層、その上に炭化材・焼土ブロックおよび、焼骨を含む層が堆積する。また、東西壁面の上半、底部の一部および、張り出し部は赤変硬化している。

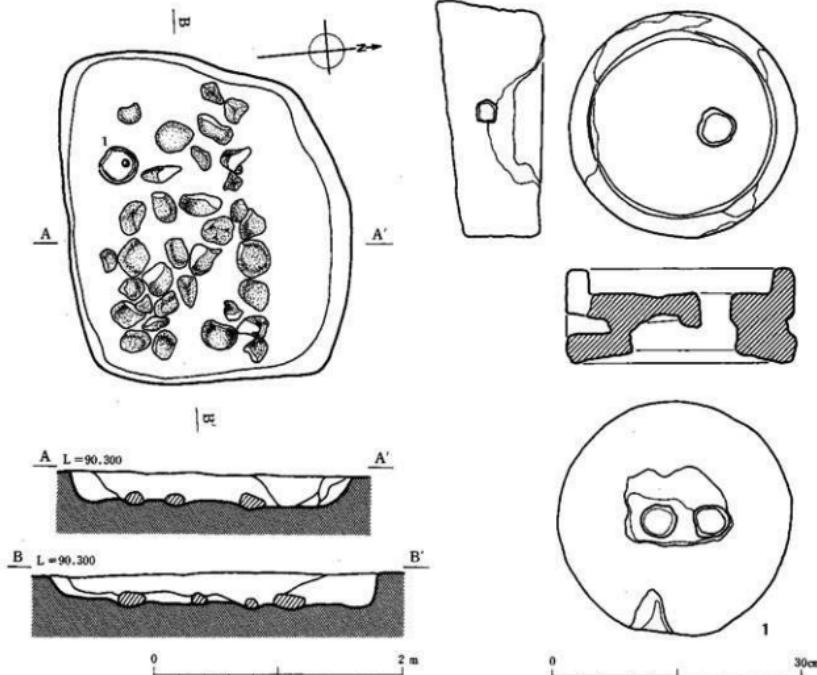


第73図 1号火葬跡

1号集石（挿図 第74・75図 写真図版111・115、遺物観察表 第29表）

位 置／C - 2 グリッド。平面形／掘り込みは若干いびつであるが、東西に長い長方形を呈する。規模／東西に2.65m、南北に2.25m。壁／45~65°の角度で立ち上がり、16~25cm遺存する。底 部／平坦である。

集石部分は、径10~30cmの円礫を用い、掘り込みより一回り小さい東西2.25m、南北1.25mのほぼ長方形に並べられている。これらの礫に混ざって粉引き白の上白が、出土している。出土状態および、白の刷り合わせ部の溝が、磨り減ってほとんど残っていないことから、使用不能になった臼を礫と同様ただの石とみなし、集石の構材としたものと考えられる。



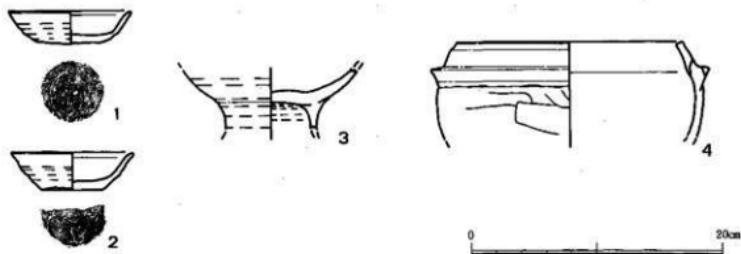
第74図 1号集石

第75図 1号集石出土遺物

1号集石埋土土層説明

- 1層 砂褐色土 白色粗粒石子少含む、無土粒子、炭化粒子微混含む
- 2層 黄褐色土 白色粗粒石子少含む、暗黃褐色土（地山）ブロック（φ10~40cm）まばら含む
- 3層 黄褐色土 白色粗粒石子少含む、暗黃褐色土（地山）ブロック（φ10~25cm）少含む
- 4層 茶褐色土 白色粗粒石子多含む、暗黃褐色土（地山）ブロック（φ10~40cm）多量含む
- 5層 和色土 白色粗粒石子、塊上粒了少含む、灰黒色含む 解より石引 始性弱
- 6層 黑色土 白色粗粒石子微含む、暗黃褐色土（地山）ブロック（φ10~40cm）まばら含む

- | | |
|-------|-----|
| 解より石引 | 始性弱 |
| 緑より石引 | 始性弱 |



第76図 遺構外出土遺物（写真図版112、遺物観察表 第30表）

第29表・1号集石出土遺物観察表

番号	器種	法量（単位cm）				器形の特徴		位置
		直径	横存最大高	ふくみ高	供給孔径	供給孔を丸に、挽き手孔を手前に置いた時にその右側が、著しく片減らしているため、左回転で使用されていたことが窺える。すり合わせ部の溝は完全に残っていない。		
1	石製品 石臼（上臼）	28.0 13.3 上縁 上縁	3.0 2.5	1.6 45 42	23	角開石・赤褐色 色粒子・白色 粒子等を含む	にぶい程 7.5YR 7/4	底部着

第30表・西片貝源田島遺跡構外出土遺物観察表

番号	器種	法量（単位cm）	遺存率	器形・成形の特徴	胎土	色調	焼成	位置
1	かわらけ	口径（9.8） 底径（5.0） 器高（2.6）	1／2存	器形-平底。体部は内消氣味に立ち上がる。成・塑形-体部はロクロナダ。底部は回転糸切り、無調整。	角開石・赤褐色 色粒子・白色 粒子等を含む	にぶい程 7.5YR 7/4	焼化	B-2 グリッド
2	かわらけ	口径（9.8） 底径（5.0） 器高（3.0）	1／3存	器形-平底。体部は内消気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。成・塑形-体部はロクロナダ。底部は回転糸切り、無調整。	角開石・赤褐色 色粒子・白色 粒子等を含む	にぶい程 10YR 7/3	焼化	B-2 グリッド
3	高台付坏		2／3存	器形-体部は内消氣味に立ち上がる。高台は高く垂直に立ち上方で広がる。成・塑形-全体にロクロナダが施される。	角開石・白色 粒子・石英等 を含む	にぶい程 7.5YR 7/3	焼化	B-2 グリッド
4	湯釜	口径（18.0）	口縁部片	成・塑形-外面・脚部から下をハラケズリ。脚部および、口縁部はロクロナダ。内面・ハラケズリの後口縁部をロクロナダ。	白色粒子・暗 灰色粒子・角 開石等を含む	程 7.5YR 7/3	焼化	C-2 グリッド

まとめ

本遺跡からは、火葬跡1基、集石1基、焼土層堆積地点1ヶ所を検出した。

1号集石からは、使用不能になった石臼が出土している。このため若干の時間差は生じるもの、中世の構築と推測される。火葬跡からは、遺構の年代を特定出来る遺物が出土していないが、藤岡市白石大御堂遺跡の調査例に酷似した様相から中世の所産と思われる。これらのことから、本遺跡周辺には、中世の墓域が展開することが予測される。

また、今回の調査で、火葬跡出土の焼人骨を個別に取り上げ、部位同定（「前橋市西片貝源田島遺跡火葬跡出土の焼人骨」参照）を実施できたことは意義深い。

（参考文献）

津金澤古茂「第4章 第5節 石製品について 3 石臼」『下東西遺跡』財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987

鶴貴親次郎・宮崎重雄・津金澤古茂・飯島義雄「郡馬沼藤岡市白石大御堂遺跡における中世埋葬遺構の検討」『研究紀要』9 『財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団』1992

前橋市西片貝源田島遺跡火葬跡出土の焼人骨

宮崎 重雄・飯島 義雄

1.はじめに

火葬跡である土坑出土の焼人骨について、取り上げの単位ごとに部位を同定し（第31表）、出土位置との関係を調べた、その結果は下記の通りである。

2.出土状況

解剖学的に自然な出土状態は示していない。しかし、同一の部位や解剖学的に関節している部位が比較的近接して出土していることが認められることから、徹底的に移動させられているとは思われない。No.22などの一部を除けば、頭蓋部や下頸骨は中央部から北部にかけて、一方大腿骨などの下肢骨は中央部から南部にかけて出土していることが確かめられる。本来的には頭部を北にして安置されたのであろう。この遺体は、下記のように成人であると思われることから、遺構の規模からして屈葬状態が考えられる。

3.形質的記録

1個体分の部位からなる。

頭椎椎体部の横径は15.8mm、矢状径は9.6mmである。橈骨骨幹部の横径、大腿骨、下顎中節骨は細く、女性のものである可能性が強い。大腿骨骨幹部栄養孔での横径は18.4mm、矢状径15.6mmで、前後に扁平である。橈骨の骨体中央径は11.1mm、同矢状径は6.9mmであり、非常に細い。上肢末節骨は全長16.0mm、骨体最小幅は5.5mmである。下頸枝は筋突起からの稜が鋭い線をなし、第2大臼歯の辺まで伸び、歯槽の面より高く発達している。また上顎第1切歯？の歯根は閉鎖し、下顎頭の骨端は壘着していることから成人である。

4.まとめ

- 1) 出土したのは1個体分の焼人骨で、成人のきわめて小柄な女性のものである。
- 2) 出土状況は頭部を北に遺体が安置されていたことを示している。
- 3) 欠けている部位があるのは、細分化した焼人骨では部位によって同定の難易度に大きな差があり、遺存度にもちがいがあることに起因し、元来存在していなかったとは考えにくい。また、火葬後特定部位骨の抽出されたことを示す規則性も見出しえなかつた。しかし、火葬後の抽出を否定する確認も得られなかつた。

第31表・西片貝源田島遺跡人骨記録表

遺物No.	部 位	遺物No.	部 位
1	頭蓋片多数、中手骨又は中足骨	8	椎骨片
2	犬歯？歯根部、細骨片數片	9	下頸枝
3	細骨片數片	10	中手骨又は中足骨片
4	頭蓋片數片、中手骨又は中足骨片	11	細骨片
5	上肢？指骨片、細骨片	12	脳頭蓋片、後頭隆起付近？
6	上腕骨？片數片	13	指骨片2、腰骨片1、骨片數片
7	頭蓋片數片	14	橈骨片、上肢末節骨片、指骨片、骨片16

遺物No.	部 位	遺物No.	部 位
15	上肢指骨片、肩甲骨片	28	骨片
16	右下顎頭、上顎第1切歯歯根、骨片数片	29	下肢第1指中足骨片
17	下肢中節骨、上腕骨又は大腿骨片、下体肢骨片1	30	指骨？片数片
18	左大腿骨骨幹部	31	大腿骨骨幹部片、大腿骨遠位端部片、肢骨片2、頭蓋片？2
19	中足骨の遠位2／3	32	橈骨又は尺骨片？
20	腓骨？骨幹部片、骨片2	33	中手骨又は中足骨片、骨片10
21	中足骨片	34	頸椎椎体部、肋骨片
22	頭蓋部？細骨片数片	35	大腿骨片、骨片10
23	上肢？指骨片2、肋骨片1、骨片10	36	体肢骨片4
24	指骨片数片	37	中手骨又は中足骨片、骨片10
25	橈骨？、尺骨？、腓骨？など10数片	38	橈骨骨幹部
26	体肢骨片	39	橈骨又は尺骨片
27	橈骨骨体部片、上腕骨片2		



22. 1号火葬跡出土の焼人骨

図版 1



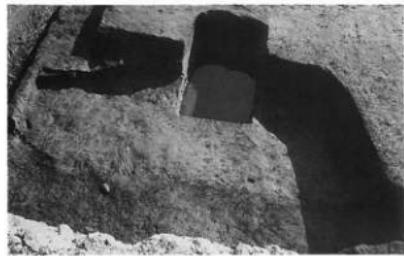
23. 石岡西築造跡 I 区全景（空撮）



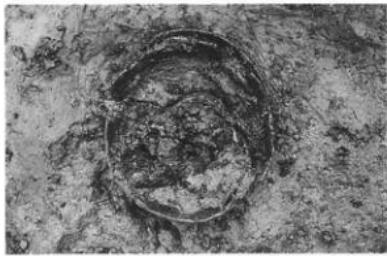
24. 1号住居跡遺物出土状況（西から）



25. 1号住居跡遺物出土近景（西から）

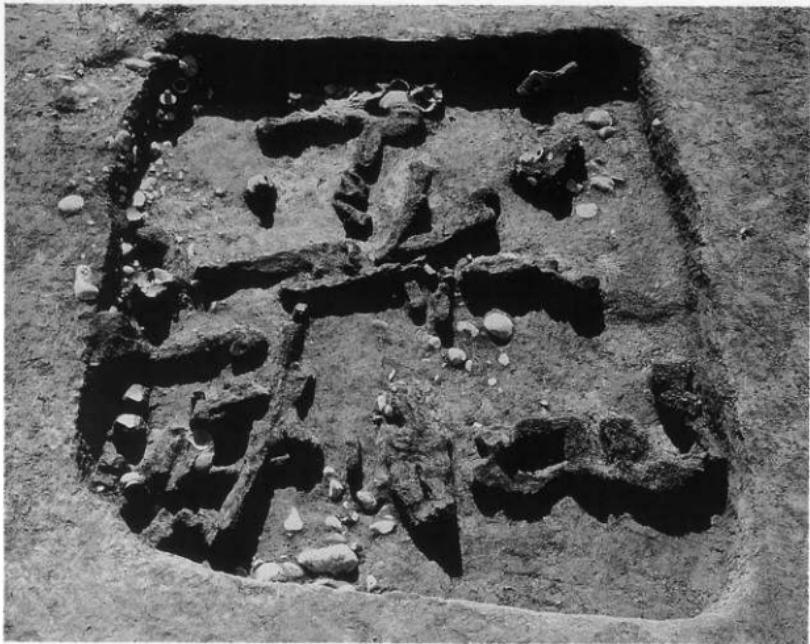


26. 1号住居跡完掘全景（西から）



27. 1号住居跡遺物出土近景（北西から）

図版 2



28. 5号住居跡炭化材出土状況（北西から）



左上29 5号住居跡遺物出土近景（東から）

左下30 5号住居跡遺物出土近景（南東から）

上31 5号住居跡遺物出土近景（南東から）



図版 3



32. 6号住居跡遺物出土近景（北から）



33. 6号住居跡遺物出土状況（北から）



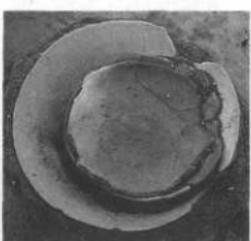
34. 6号住居跡遺物出土近景（北から）



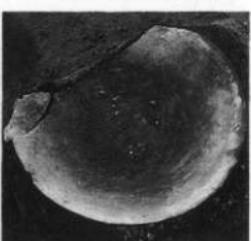
35. 6号住居跡遺物出土近景（北から）



36. 7号住居跡遺物出土状況（西から）

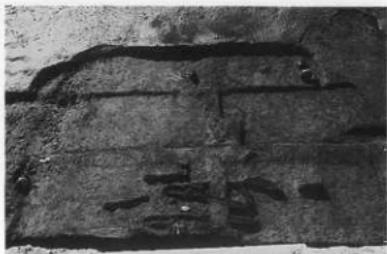


37. 7号住居跡遺物出土近景（南西から）



38. 7号住居跡遺物出土近景（南西から）

図版 4



39. 11号住居跡炭化材出土状況（北から）



40. 11号住居跡全景（北から）



41. 19号住居跡遺物出土状況（北から）



42. 19号住居跡遺物出土近景（北から）



43. 13号住居跡遺物出土状況（西から）



44. 13号住居跡全景（西から）



45. 13号住居跡遺物出土近景（西から）



46. 13号住居跡遺物出土近景（西から）

図版 5



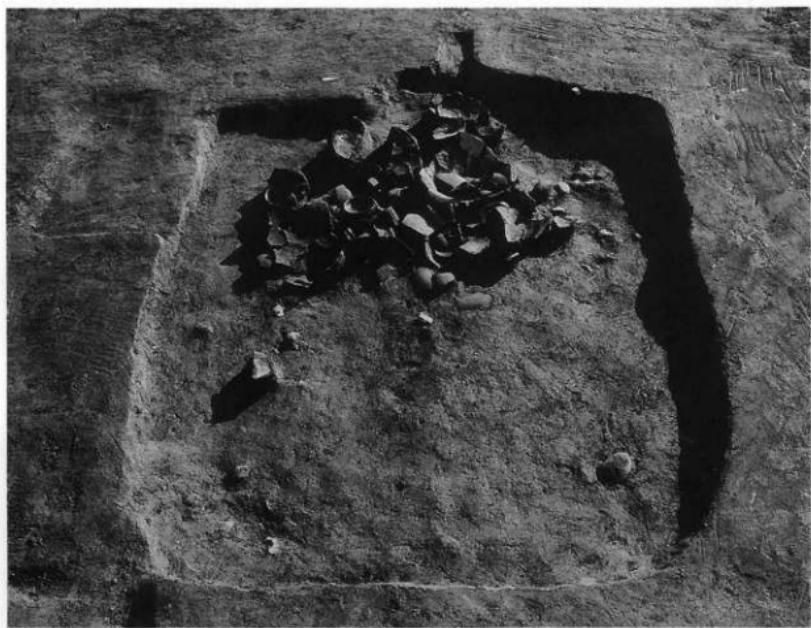
47. 14号住居跡遺物出土状況



48. 14号住居跡遺物出土近景（西から）



49. 14号住居跡遺物出土近景（西から）



50. 15号住居跡遺物出土状況（西から）

図版 6



51. 2号住居跡遺物出土状況（南西から）



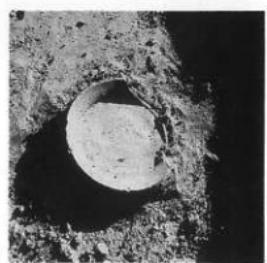
52. 2号住居跡カマド近景（西から）



53. 2号住居跡遺物出土近景（南西から）



54. 2号住居跡遺物出土近景（南西から）



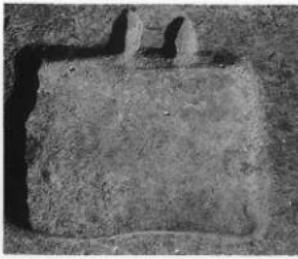
55. 3号住居跡遺物出土近景（西から）



56. 3号住居跡全景（西から）



57. 3号住居跡カマド近景（北から）



58. 4号住居跡全景（南から）



上59 4号住居跡カマドA層断面（南から） 下60 4号住居跡カマドB層断面（北から）

図版 7



61. 8号住居跡遺物出土状況（西から）



62. 8号住居跡住居跡カマド近景（南から）



63. 8号住居跡遺物出土近景（南西から）



64. 9号住居跡遺物出土近景（西から）



65. 9号住居跡全景（西から）



66. 9号住居跡カマド近景（西から）



67. 12号住居跡全景（西から）



68. 12号住居跡カマド近景（西から）

図版 8



69. 10号住居跡全景（西から）



70. 10号住居跡カマド近景（西から）



71. 10号住居跡遺物出土近景（西から）



72. 10号住居跡遺物出土近景（西から）



73. 10号住居跡遺物出土近景（東から）



74. 16号住居跡全景（西から）



75. 16号住居跡カマド近景（西から）



76. 16号住居跡遺物出土近景（西から）



77. 16号住居跡土層断面噴砂近景（東から）

図版 9



78. 17号住居跡全景（西から）



79. 17号住居跡カマド完掘近景（西から）



80. 17号住居跡遺物出土近景（西から）



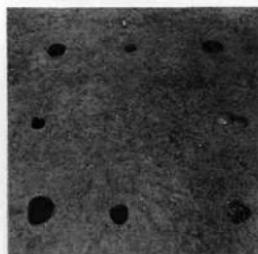
81. 18号住居跡全景（西から）



82. 18号住居跡カマド近景（西から）



83. 18号住居跡遺物出土近景（北から）



84. 1号掘立柱跡全景（南から）

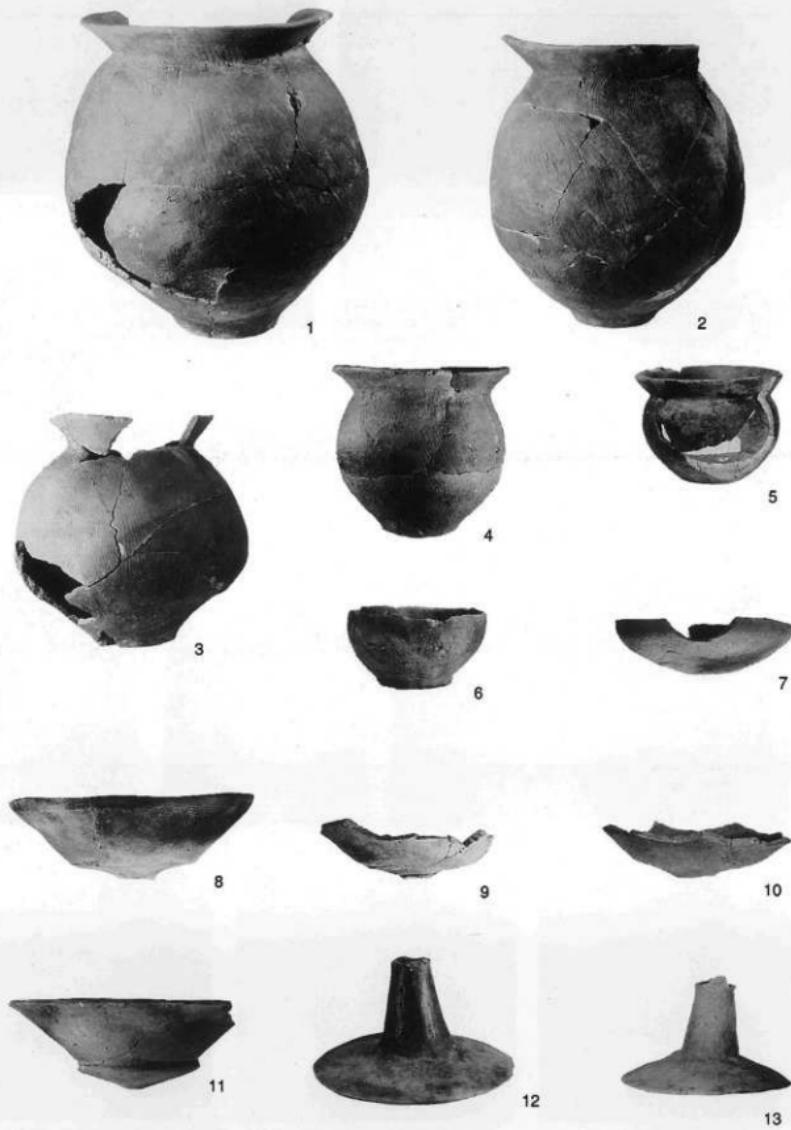


85. 2号掘立柱跡全景（北から）



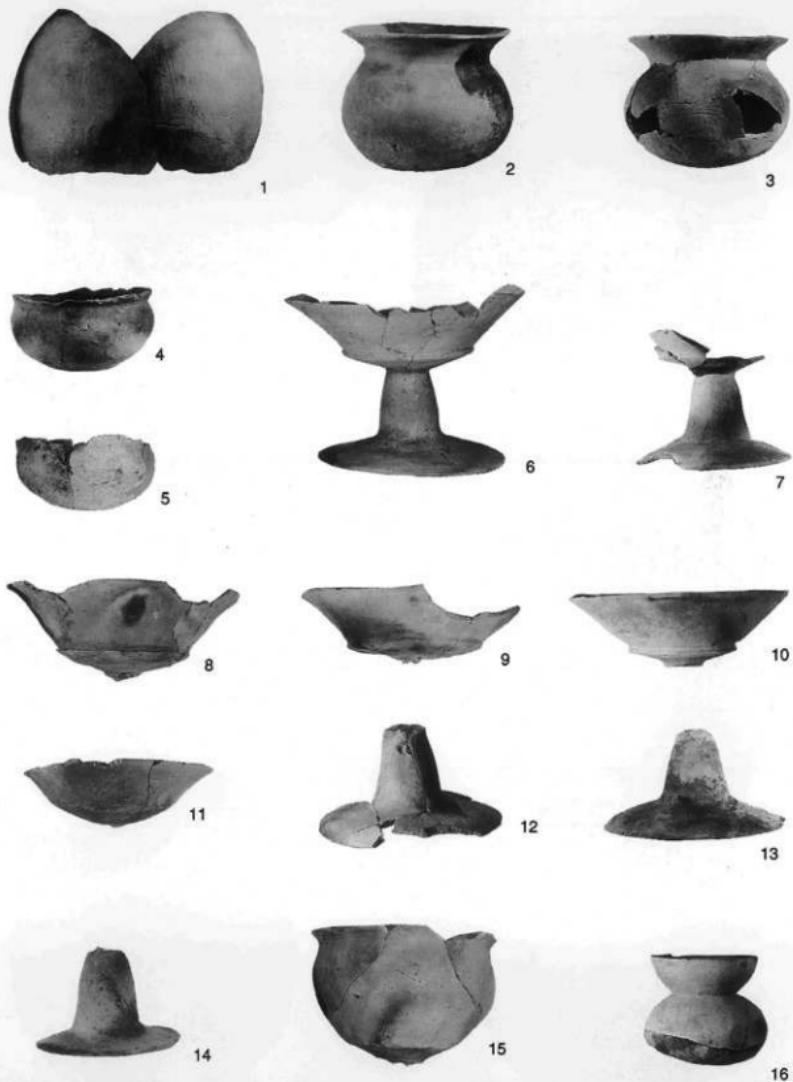
86. 3号掘立柱跡全景（西から）

図版10



87. 1号住居跡出土遺物

図版11



88. 5号住居跡出土遺物

図版12



1



2



3



4



6



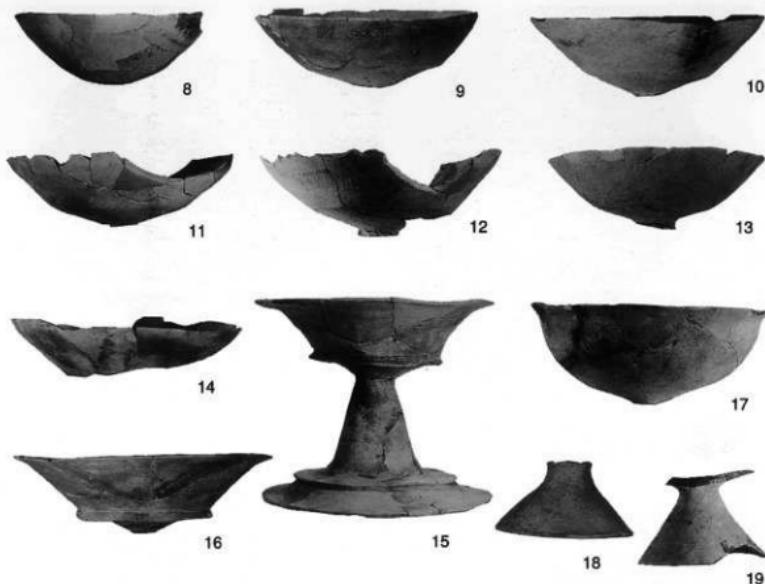
5



7

89. 6号住居跡出土遺物その1

図版13



90. 6号住居跡出土遺物その2

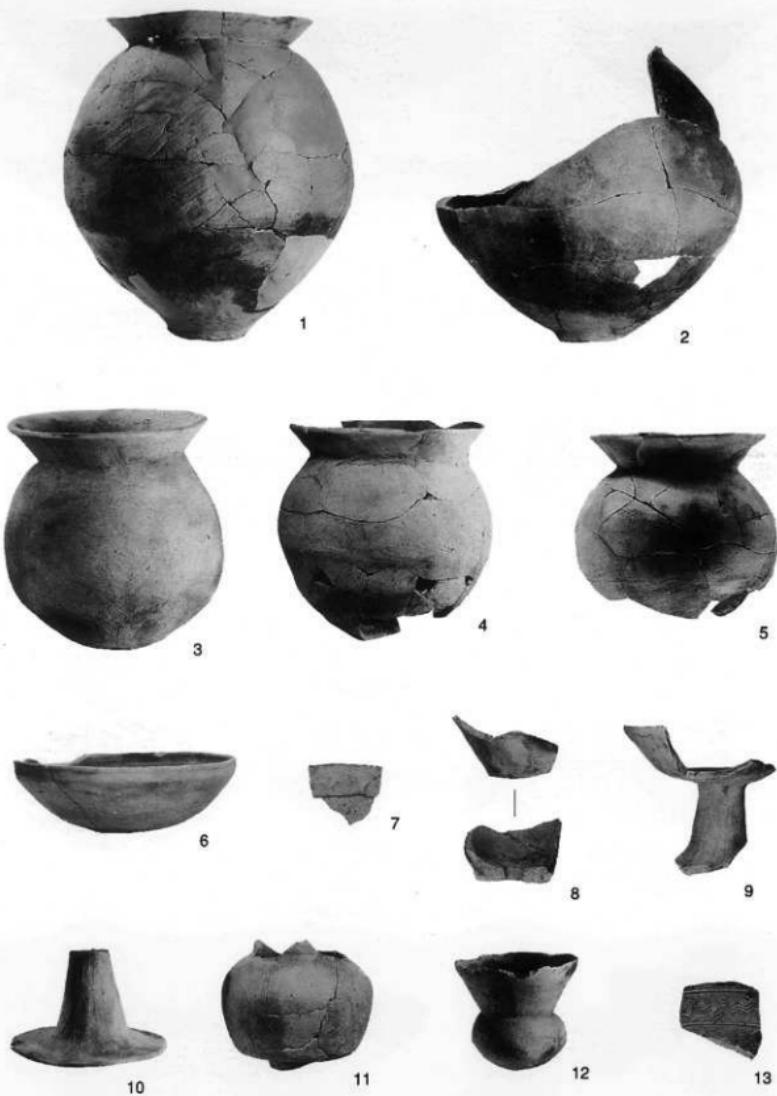


91. 7号住居跡出土遺物



92. 11号住居跡出土遺物

図版14



93. 19号住居跡出土遺物

図版15



1



2



N-10グリッド表採

† 95. 遺構外出土遺物



3



1



2



3



4



6



5



7



8

96. 13号住居跡出土遺物



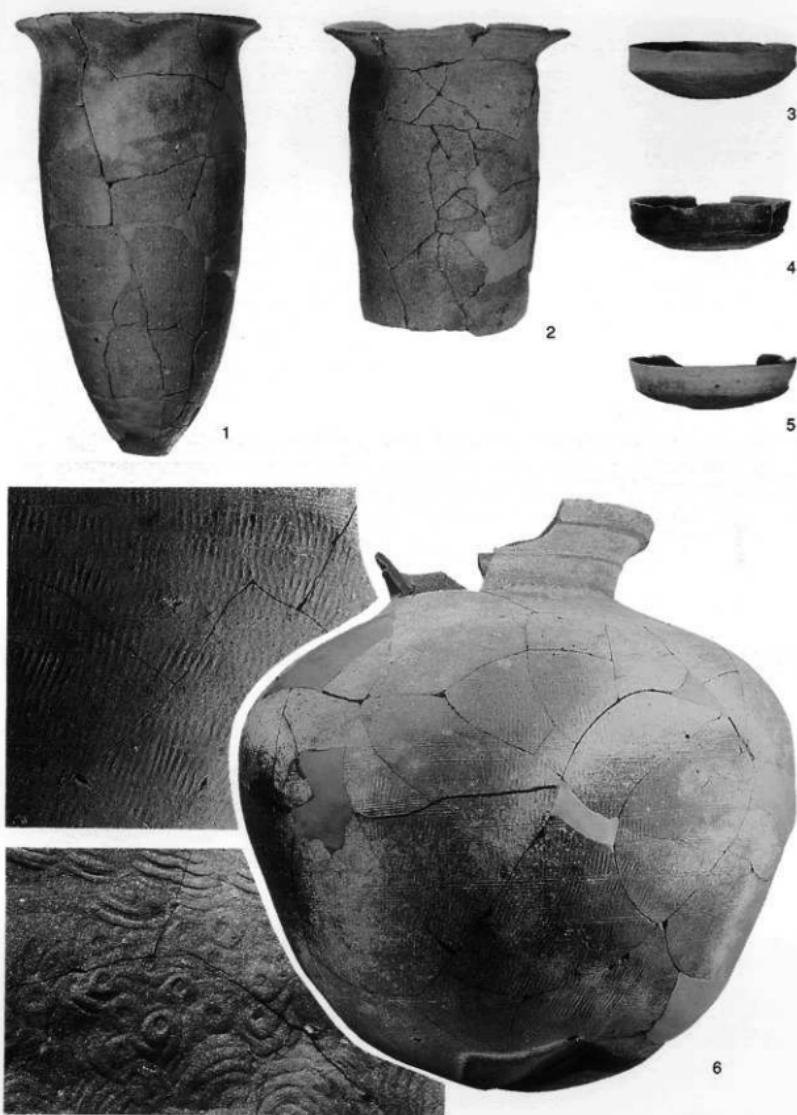
1



2

97. 14号住居跡出土遺物

図版16



98. 15号住居跡出土遺物その1

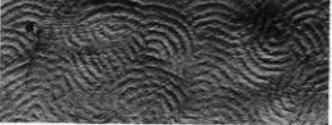
図版17



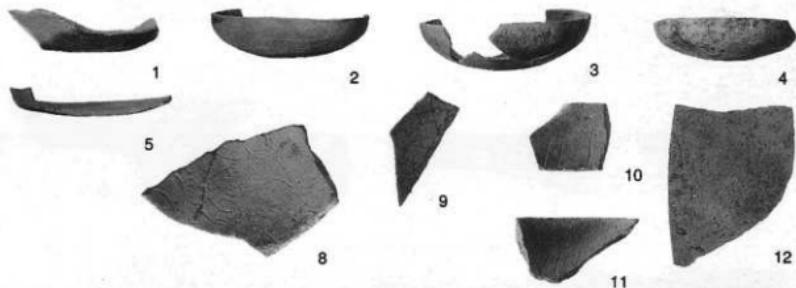
7



8



99. 15号住居跡出土遺物その2



100. 2号住居跡出土遺物



1



2

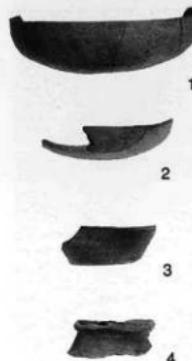


3

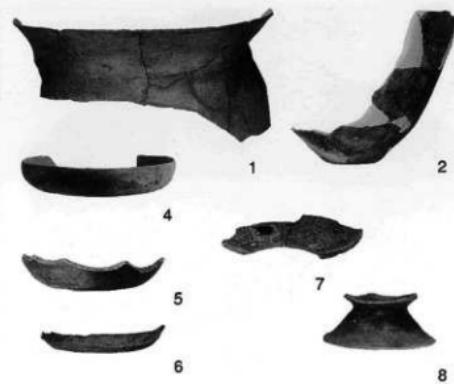
102. 4号住居跡出土遺物

101. 3号住居跡出土遺物

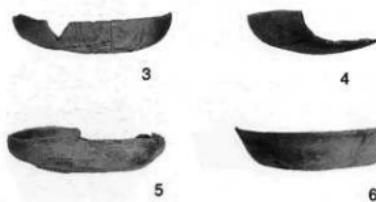
図版18



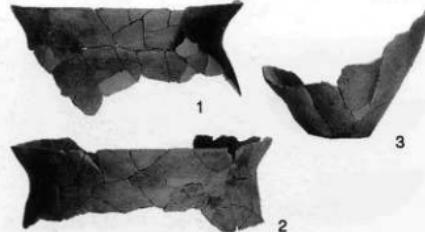
103. 8号住居跡出土遺物



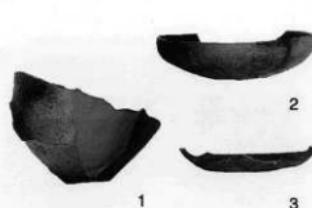
104. 9号住居跡出土遺物



105. 10号住居跡出土遺物

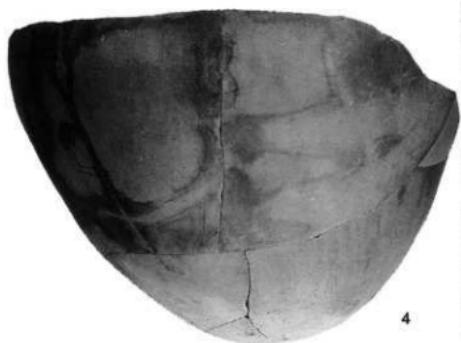


106. 16号住居跡出土遺物



107. 17号住居跡出土遺物その1

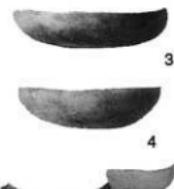
図版19



108. 16・17号住居跡出土遺物その2



2



3

4

5

6

7

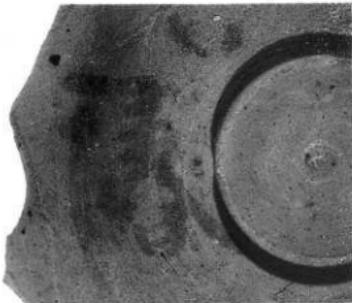
8



109. 18号住居跡出土遺物



3



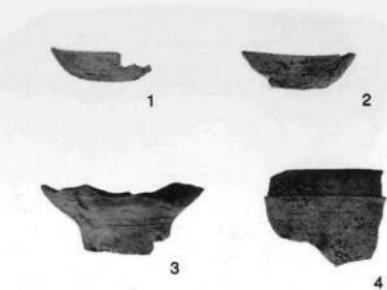
No. 8 墨書き部分原寸

110. 2号溝出土遺物

図版20



111. 1号集石出土遺物



112. 遺構外出土遺物



113. 1号火葬跡全景（東から）



114. 1号火葬跡出土焼骨No.18



115. 1号集石全景（西から）

抄 錄

フリガナ	イシゼキニシヤナセイセキ ニシカタガイゲンタジマイセキ						
書名	石関西塗瀬遺跡 西片貝源田島遺跡						
調査名	県立前橋産業技術専門校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	奥富雅之 齊藤和之 早田勉 宮崎重雄 飯島義雄						
編集機関	山武考古学研究所 / T-286 千葉県成田市並木町221番地 0476(24)0536(代)						
発行機関	石関西塗瀬遺跡調査会/T-371 群馬県前橋市大手町1丁目1番地1号 群馬県教育委員会内						
発行年月日	西暦1996年3月29日						
フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 6D-10	東經 36°22'58"	調査期間 1994.12.08 1995.03.02	調査面積 5.540m ²	調査原因 県立前橋産業技術専門校建設
イシゼキニシヤナセイセキ 石関西塗瀬遺跡	群馬県前橋市 石関町123-1他	102016	6D-11	36°22'55"	139°07'17" 1995.02.18 1995.02.27	196m ²	
西片貝源田島遺跡	群馬県前橋市 西片貝町417-4						

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石関西塗瀬遺跡	集落	古墳時代	住居跡 土坑	9軒 1基	土師器(壺・坏・瓶・高坏・脚付壺・堵) 須恵器(壺)
		奈良時代	住居跡	9軒	土師器(壺・台付壺・坏) 須恵器(坏・蓋・転用碗)
		時期不明 その他の他	竪状遺構 住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝	1軒 3棟 11基 5条	古墳時代中期の住居跡は、遺物の遺存が良く器種構成を窺わせる好資料を得ている。
西片貝源田島遺跡	火葬跡 他	中世	火葬跡 集石	1基 1基	焼人骨 石臼
					焼骨は部位同定を行った。

石関西塗瀬遺跡
西片貝源田島遺跡

平成8年3月25日 印刷

平成8年3月29日 発行

編集 山武考古学研究所
発行 石関西塗瀬遺跡調査会

印刷 (株)文化総合企画
TEL 0476-93-0593



柏川村出土文化財管理センター

